

高知県香美郡

十万遺跡発掘調査報告書

(香我美町埋蔵文化財調査報告書第2集)

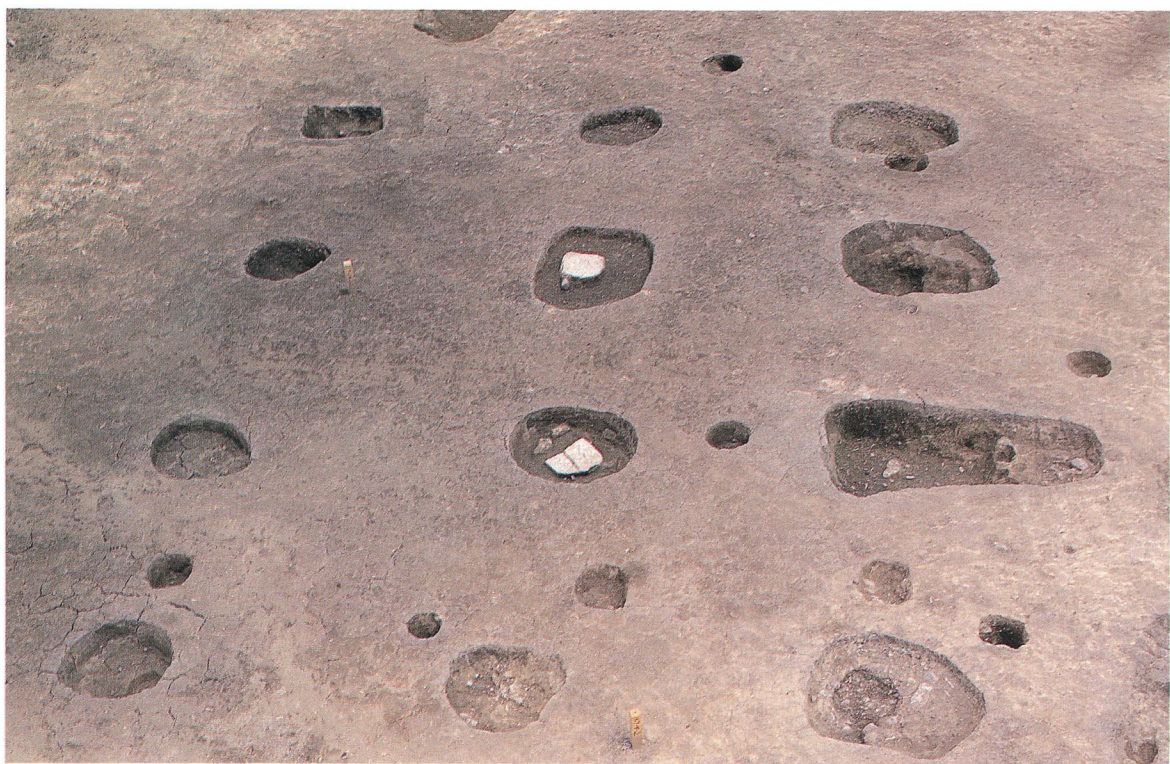




調査区全景



SB 6



SB 12

序

十万遺跡の周辺には、東十万城、十万城、国吉城と一連の中世の山城が、金比羅（標高80m）の山並にそって、東西に連なり、香宗川に北側を写した姿は、町民に多くのロマンスをあたえながら今日を迎えた。

このたび香宗川改修工事によって影響を受ける十万遺跡の範囲について発掘調査が行われたのであるが、中世以遠の遺跡については、多くの期待がもてなかったのも事実である。ところが発掘調査の伸展にともない、その発掘された遺構の形状や遺物により、縄文から中世に至る複合遺跡であることが明らかとなった。先に下分遠崎遺跡の発掘調査において弥生時代前期から中期までの住居、食生活、農耕、信仰等古代人の営みが、推察可能な状況にて発掘され、今回その隣接する十万地区においての新たな資料の発見は、歴史の連続性を如実に物語るものであり、その意味においても、極めて意義あるものと確信する。

本書はその発掘調査をまとめたものであり、広く活用され文化財保護の一助となれば幸いである。

最後に調査にあたって、御指導を頂きました、高知県教育委員会なかんずく、高橋啓明、出原恵三、吉原達生の各先生方並びに、地権者、南国土木事務所、調査に御協力を頂いた方々に心から御礼申しあげる次第である。

昭和63年3月

香我美町教育長 和田 和 夫

例 言

1. 本書は、香我美町香宗川中小河川改修事業にかかわる十万遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、高知県香我美町上分十万に所在する。
3. 調査対象面積は 7,000 m^2 であり、調査面積は 4,200 m^2 である。
4. 調査は、香我美町教育委員会の依頼により、高知県教育委員会が行った。
調査顧問 岡本 健児 (高知県文化財保護審議会会長)
調査員 高橋 啓明 (高知県教育委員会・文化振興課社会教育主事)
" 出原 恵三 (高知県教育委員会・文化振興課主事)
" 吉原 達生 (高知県教育委員会・文化振興課主事)
事務担当 清藤 正郎 (香我美町教育委員会・社会教育係長)
5. 本書の執筆は、第 I 章を高橋、第 II・III・IV 章を出原、第 V 章については、縄文時代から弥生時代を吉原、古代を高橋、中・近世を出原、第 V 章は、高橋、出原、吉原が分担した。
6. 遺構については、ST (竪穴住居)、SB (掘立柱建物)、SK (土壙)、SD (溝)、SA (柵列・塀) で標示した。
7. 調査にあたっては、南国土木事務所の全面的な協力を得た。また、測量では小松幹典氏の協力を得た。記して深く謝意を表したい。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の方法	6
第Ⅳ章 基本層序と包含層出土遺物	6
第Ⅴ章 遺構と遺物	10
第1節 遺構	10
1 縄文時代～弥生時代	10
2 古代	17
3 中・近世	35
第2節 遺物	43
1 縄文時代～弥生時代	43
2 古代	49
3 中・近世	56
第Ⅵ章 総括	70
第1節 縄文時代～弥生時代	70
第2節 古代	70
1 遺物	70
2 遺構	71
第3節 中・近世	73
1 遺物	73
2 遺構	76

図 版 目 次

Fig 1 : 周辺の遺跡分布図	2
Fig 2 : 発掘調査区位置図	5
Fig 3 : トレンチセクション位置図	6
Fig 4 : 基本層序	7
Fig 5 : 包含層及びSK12出土遺物実測図	10
Fig 6 : 縄文、弥生時代の土壌実測図	14
Fig 7 : 弥生時代の土壌	15
Fig 8 : 弥生時代竪穴住居実測図	16
Fig 9 : SB1実測図	23
Fig 10 : SB2実測図	24
Fig 11 : SB3実測図	25
Fig 12 : SB4実測図	26
Fig 13 : SB5実測図	27
Fig 14 : SB6実測図	28
Fig 15 : SB7, SB8実測図	29
Fig 16 : SB9, SB10実測図	30
Fig 17 : SB11, SB12実測図	31
Fig 18 : SB13, SB14実測図	32
Fig 19 : ST3, SA-1, SA-2, SD2実測図及び断面図	33
Fig 20 : SK7・10・28・39・50実測図	34
Fig 21 : 中近世土壌実測図	38
Fig 22 : SD1, SD4A, SD3セクション図	41
Fig 23 : ST1・4出土遺物実測図	46
Fig 24 : ST4, SK2・6・24・37・43出土遺物実測図	47
Fig 25 : SK48, P1, P4, P5出土遺物実測図	48
Fig 26 : SK2出土遺物実測図	49
Fig 27 : SB1~3・5・6・8, ST3, SA2出土遺物実測図	50
Fig 28 : SK10・50出土遺物実測図	52
Fig 29 : SD2出土遺物実測図	54
Fig 30 : SB3, SD2出土遺物実測図	55
Fig 31 : SB21・24・32・30・52・55~58出土遺物実測図	58
Fig 32 : SK11出土遺物実測図	59
Fig 33 : SK11・12・15・29・49・55出土遺物実測図	60
Fig 34 : SD1出土遺物実測図	62
Fig 35 : SD1・3・4出土遺物実測図	64
Fig 36 : SD4出土遺物実測図	65
Fig 37 : SD6~9出土遺物実測図	66
Fig 38 : SD10~12, SK11・15及び包含層出土遺物実測図	68
Fig 39 : SD1・3・8・12出土遺物実測図	69

写 真 目 次

PL 1	: 調査区発掘前全景	80
PL 2	: Aトレンチ遺構検出状態 Aトレンチ北壁セクション	81
PL 3	: Aトレンチ北壁セクション SK43完掘	82
PL 4	: SK24完掘状態 SK24検出状態 SK24縄文土器出土状態	83
PL 5	: ST1バンクセクション ST1完掘状態	84
PL 6	: SK2完掘状態 SK2土器・石器出土状況	85
PL 7	: SK1完掘状態 SK10完掘状態	86
PL 8	: ST3・ST4完掘状態 SK50完掘状態	87
PL 9	: ST4土器出土状態	88
PL 10	: SK50土器出土状態	89
PL 11	: SB5検出状況 SB6のP5半截	90
PL 12	: SK11土器出土状態 SK11西壁セクション	91
PL 13	: SK11土器出土状態	92
PL 14	: SK12西壁セクション SK12土器出土状況	93
PL 15	: SK15土器出土状態 SB58のP1土器出土状態	94
PL 16	: SD1礫出土状態	95
PL 17	: SD4-A完掘状態	96
PL 18	: SD1バンク(A-B)セクション SD1バンク(C-D)セクション	97
PL 19	: SD1遺物出土状態	98
PL 20	: SK10・SK50・SD2遺物出土状態	99
PL 21	: 土壌セクション・遺物出土状況	100
PL 22	: 弥生前・中期土器 弥生後期土器	101
PL 23	: 弥生土器	102
PL 24	: 弥生・中世土器	103
PL 25	: 縄文・弥生・古代・近世出土土器	104
PL 26	: 古代出土土器	105
PL 27	: 土師器羽釜	106
PL 28	: 土師器 B1・B2・B36類	107
PL 29	: 土師器皿C1・C3類	108
PL 30	: 土師器皿C3・D1類	109
PL 31	: 青磁・白磁・染付 土錘	110
PL 32	: 瓦器・土師器鍋 須恵器	111
PL 33	: 石鏃・石鏑・鉄鏃	112
PL 34	: 調査に協力された方々	113

第 I 章 調査に至る経過

香宗川中小河川改修事業は、沿川地区を洪水から防御するために香我美町十万地区から河口までの区間を掘削、護岸等の施工をなし、あわせて水資源の合理的な利用の促進を図ることを目的として計画されたものである。一方、当事業対象地区内には、原始時代以来今日の「山南」を築き上げた祖先の営みの足跡ともいうべき埋蔵文化財が確認されており、特に十万地区においては、弥生時代から中、近世までの遺物の散布が見られるところである。そこで河川改修事業が施工せられれば、現状は大きく変更され地下の埋蔵文化財も極めて甚大な影響を受けることは当然である。かかる意味において、以下の如き試掘調査を実施することになった。

遺跡の性格、範囲、遺物・遺構の深度や遺存の状況を把握する目的で、昭和61年11月25日から27日まで試掘調査を実施した。その結果、遺跡の範囲は約7,000 m^2 であり、遺構は比較的良好に遺存していることが判明した。以上の経緯をふまえて、昭和62年度4月初旬から埋蔵文化財の記録保存を行うことを目的として本格的な発掘調査を実施するに至った。

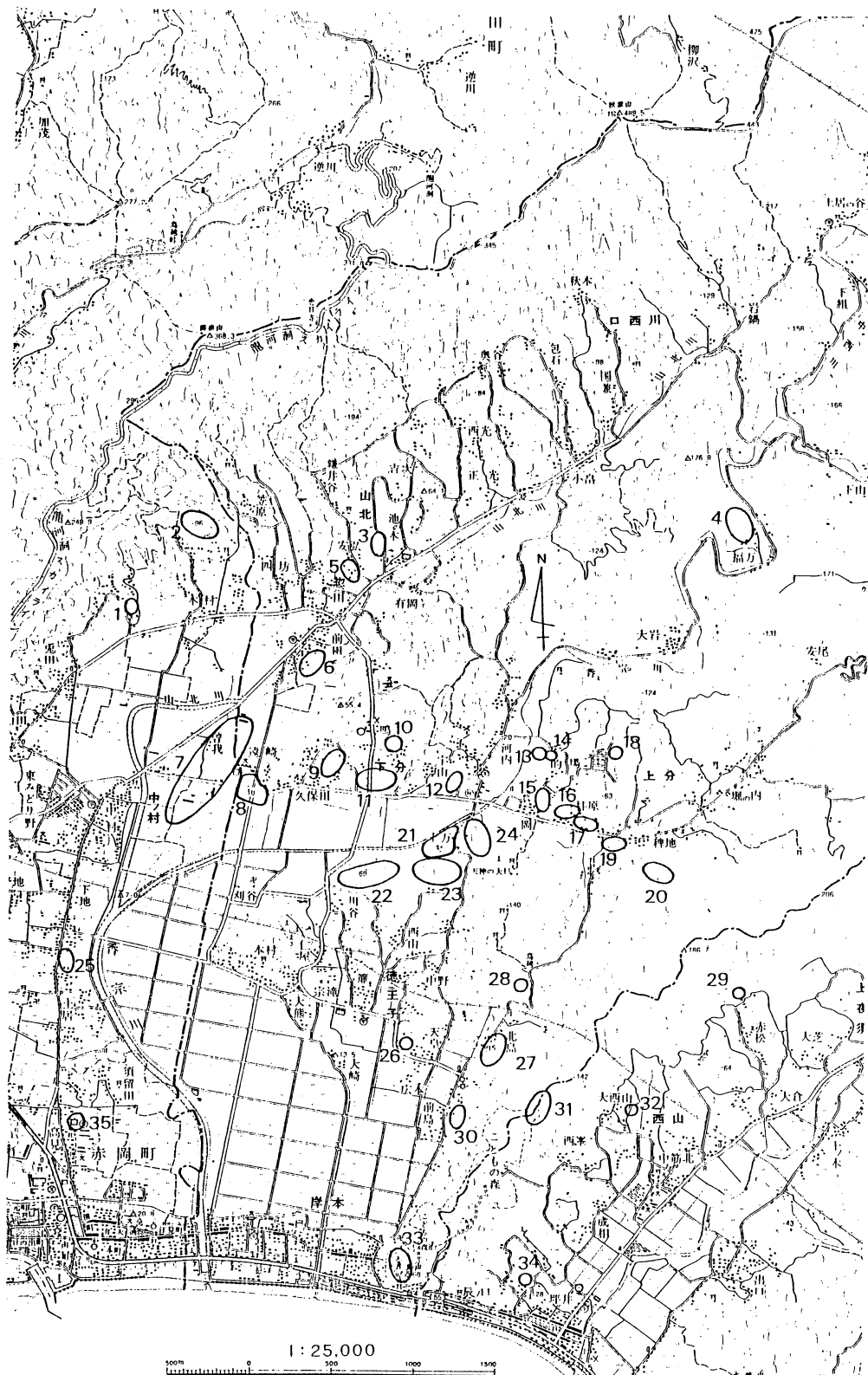


Fig 1. 周辺の遺跡分布図

第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境

十万遺跡は、香美郡香我美町十万に所在し、高知県下最大の穀倉地帯である香長平野の東端に位置する。遺跡周辺の沖積平野を形成する香宗川は、香北町と境を接する記念坂付近に源を発し、途中いくつかの谷平野を形成しながら山塊を縫うように流れ、十万遺跡の北400mの地点で山南川と合流し、大きく向きを西に転じる。当遺跡は、香宗川の左岸にあり標高は遺跡西端で13m、東端で14.1mを測り下流に向かって僅かに傾斜している。東には大峰山が迫り、南は緩やかなスロープで月見山山系から派生した山塊に至る。西に向かっては眺望がよく、香宗川周辺の沖積平野を遠望することができる。

香宗川から分枝した山南川右岸にある拝原遺跡や下分遠崎遺跡からは、縄文晩期の土器片が出土しており、周辺地域におかる生活の営みる今日に伝える最古の遺跡とすることが出来る。弥生前期前半遺跡は見られないが、前期末になると多量の木器が出土した下分遠崎遺跡や当遺跡⁽¹⁾が営まれるようになり、中期中葉頃まで継続して生活が営まれている。しかしながら凹線文土器が盛行する中期後葉に至ると、平野部では遺跡が見られなくなり、的場遺跡や棒ヶ谷遺跡のように標高30m以上を測る丘陵上に立地するようになる。弥生時代後期は、現状ではその前半の遺跡を欠如しているが、後半になると、香宗川中流域の東曾我遺跡、河谷平野に沿っての河内遺跡、拝原遺跡が営まれる。また、香宗川や山北川流域の斜面には、幅山遺跡などに見られるような墓墳群が見られるようになる。

古墳時代の前期の状況は不明であるが、5世紀になると当遺跡南方の徳王子に徳善天王古墳が出現する。県下では、宿毛市の高岡山⁽²⁾、曾我山古墳に次ぐもので、県東部においては唯一最古の古墳であり、政治的成長を遂げた地域首長層の出現を表徴している。これ以降螢野古墳・赤坂古墳・幅山古墳等が築造され、7世紀になると徳王子古窯址群も営まれるなど、当地域における継続的な生産力の発展を示している。

No.	遺跡	時代	No.	遺跡	時代	No.	遺跡	時代
1	大崎山古墳	古墳	13	幅山古墳	古墳	25	香宗城	中世
2	富家城	中世	14	幅山遺跡	弥生	26	徳善天王古墳	古墳
3	城山城	〃	15	岡城	中世	27	徳王子古窯址群	古代
4	福万城	〃	16	拝原城	〃	28	螢野古墳	古墳
5	安弘遺跡	弥生	17	拝原遺跡	縄文～中世	29	ノツゴ古墳	〃
6	前田城	中世	18	的場遺跡	弥生	30	徳善城	中世
7	東曾我遺跡	弥生～中世	19	稗地遺跡	中世	31	西峰の砦	〃
8	下分遠崎遺跡	弥生	20	岩神城	〃	32	野神古墳	古墳
9	中城	中世	21	十万遺跡	縄文～近世	33	姫倉城	中世
10	鳴子古墳	古墳	22	国吉城	中世	34	梶ヶ山古墳	古墳
11	鳴子遺跡	古墳～古代	23	十万城	〃	35	須留田城	中世
12	河内遺跡	古墳～中世	24	東十万城				

表1. 周辺の遺跡分布表

律令体制下においては、当地域が如何なる展開を見せていたのか定かに致し難いが、『和名類聚抄』によると香美郡の^{***さとのごう}大忍郷という記載があり、現在の香我美町全域が大忍郷に包含されていたことが窺われる。また、香宗川上流の山川には、物部氏がその祖を祭ったと伝えられる式内社天忍穂別神社(石舟神社)が鎮座する。⁽³⁾鎌倉時代に入ると大忍郷は、荘園化して大忍庄と呼ばれるようになり北条得宗家の支配下に置かれるが、弘安10年(1287年)頃には、「故以土州大忍庄充其費」(『元享釈書』)⁽⁵⁾とあるように僧忍性の建てた極楽寺桑谷療養所の費用に充てられている。その後、有栖川家の荘園となり、さらに鎌倉時代末期には熊野神社が領家となり、南北朝時代初期に至って熊野新宮の造営料所となる⁽⁶⁾ことが史料にあらわれてくる。

当遺跡の所在する大忍庄南部については、史料を欠き具体的な動向が不明であるが、北部においては『安芸文書』等の史料によって大忍庄の研究がなされ、その大要が判明している。それらによると鎌倉時代には、香宗川の河谷平野に沿って清遠名・国弘名等の百姓名が成立展開し、下級荘官であるところの専当などの存在が窺われる。⁽⁷⁾これら名主層は、南北朝時代を通して成長し、領主に対してしばしば年貢免減等の要求を突き付ける行動をとるに至っている。また、名内の山林原野の開発に乗り出し、その結果個別経営を可能とする脇名の成立を促し、⁽⁸⁾名主自らは小領主化への道を歩み始めるのである。

15世紀に入ると荘園領主は、その力を失い「大忍庄南北沙汰人百姓中」⁽⁹⁾に命ぜざるをえないような状況に陥る。一方在地勢力は、ますます強大化し「新興の武士的農民」である山川氏の台頭に見られるように、在地の新旧有力名主間における対立抗争も激化し、⁽¹⁰⁾守護代細川勝益が京都へ引き上げた後は、これらの勢力の対立抗争は、国人層間の戦いに止揚され戦国時代に突入して行く。当遺跡の周辺には、東十万城・十万城等図示したように幾多の山城が存在するが、当時の緊張した状勢を今日に伝えている。大忍庄は、文明年間以降安芸・山田・香宗我部氏の勢力伸張の場となっていたが、安芸氏滅亡の永禄12年(1569年)以降長宗我部氏の支配下に屈し天正16年(1588年)に検地を受けており、地検帳の本地登録人の中に、十万一族という記載が見られる。ここに大忍庄の旧名主層は、長宗我部氏の給人となりいわゆる一領具足として初期封建体制の中に組み込まれて行くのである。

なお、周辺の中世以前の遺跡として、次の如きものがある。表にしてこれを掲げる。(表1)

- 註 (1) 香我美町教育委員会『下分遠崎遺跡』1987年
(2) 高知県教育委員会『高岡山古墳群発掘調査報告書』1985年
(3) 『高知県の地名』平凡社刊 1984年
(4) 福岡彰徳氏のご教示による。
(5) 山本大『高知県史古代・中世編』高知県 1971年
(6) 同 上
(7) 横川末吉『大忍庄の研究』 1959年
(8) 同 上
(9) 註(5)に同じ
(10) 註(5)に同じ

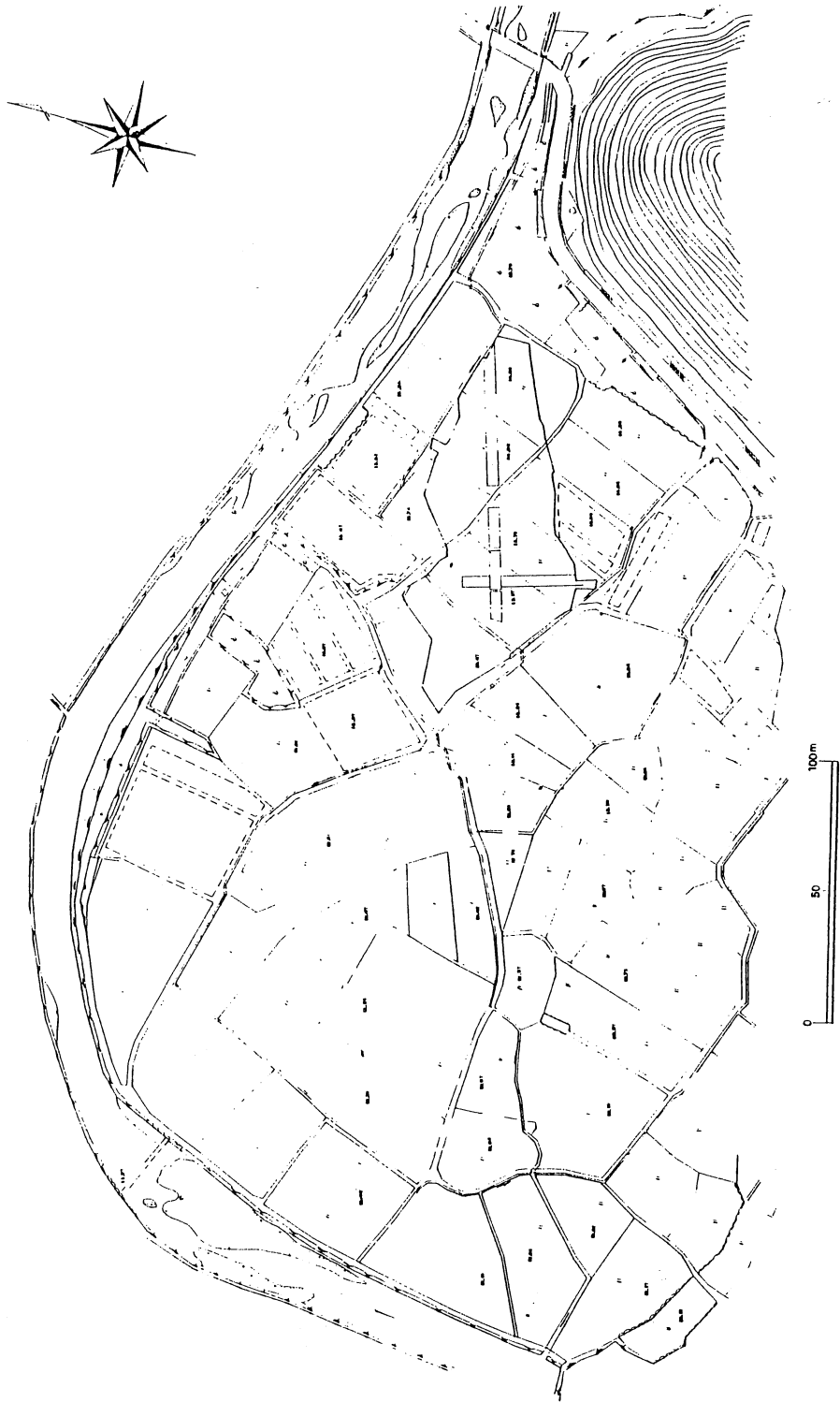


Fig 2. 発掘調査区位置図

第Ⅲ章 調査の方法

東西に長い調査区の長軸方向に $4\text{ m} \times 104\text{ m}$ の A トレンチ、それに直交するかたちで $4\text{ m} \times 44\text{ m}$ の B トレンチを設定し、遺構の検出の頻度や遺物包含層の状況を確認した。当初の計画では、遺構が検出されたところを拡張する予定であったが、A・B トレンチ全面に遺構が認められたので、発掘区を $4,200\text{ m}^2$ にまで拡張し、全面発掘をすることにした。発掘調査の実施にあたっては、表土である耕作土を除去した後、遺構検出を行った。包含層の遺物取り上げや遺構検出は、磁北によって南北方向を定め $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ を最小単位とするグリッドを設定して記録を取った。また、中世の SD 1 の南端コーナー部分については、現農道下にもぐり込んでいたために、後日農道掘削工事の際に立会調査を行った。

第Ⅳ章 基本層序と包含出土の遺物

1. 基本層序 (Fig 3・4)

(1) A トレンチ

A トレンチの基本層序は、Ⅰ層：耕作土 Ⅱ層：床土 Ⅲ層：濃茶色粘質土 Ⅳ層：黒

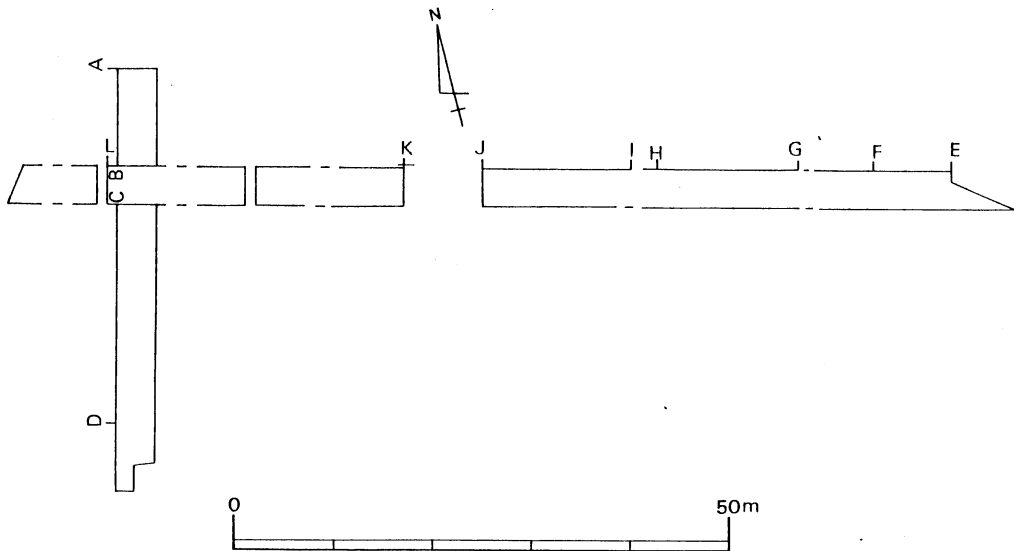


Fig 3. トレンチセクション位置図

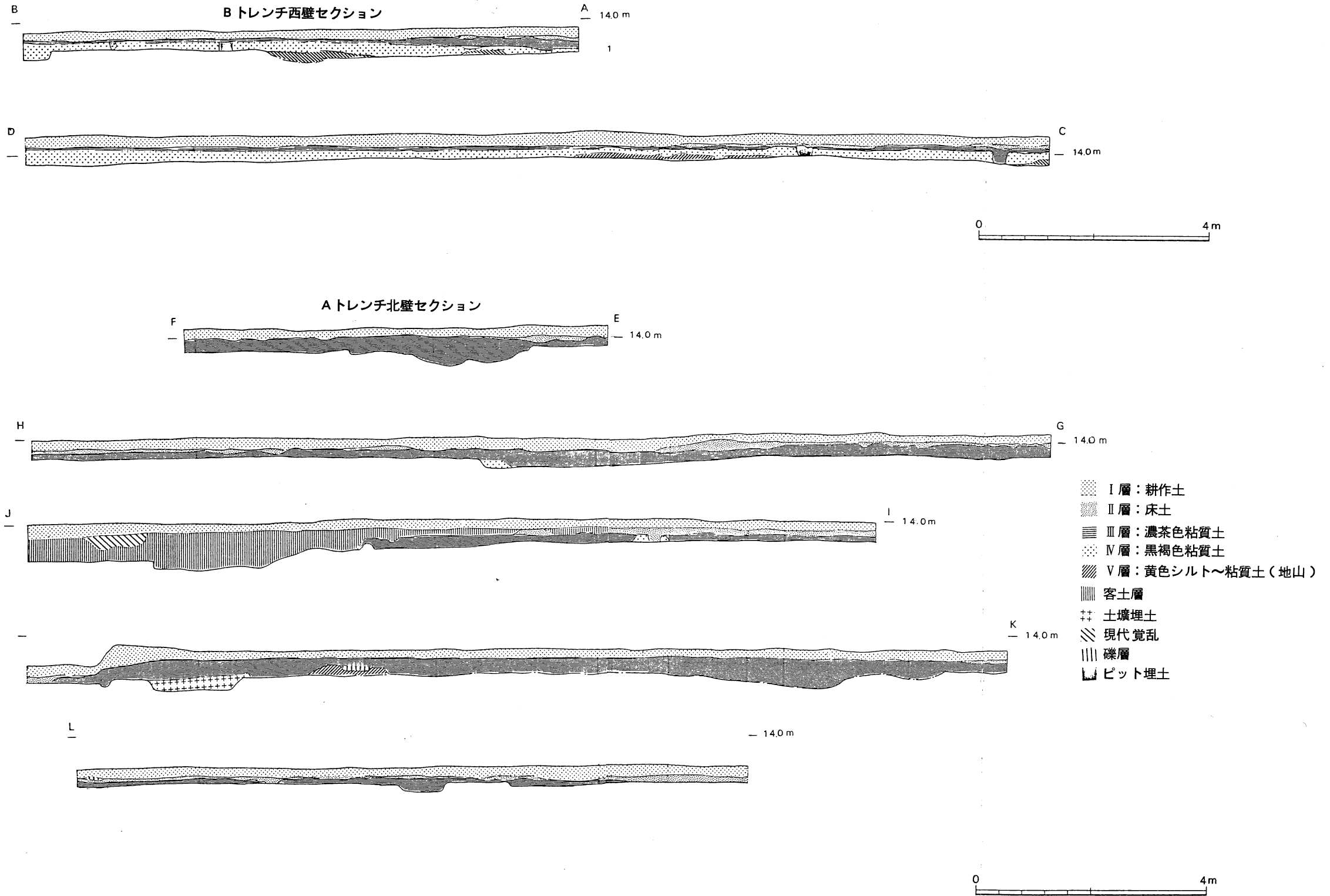


Fig 4. 基本層序(トレンチ)

褐色粘質土 V層：地山層である。II層は部分的にみられるものであり、多くはI層の下部は、中世の遺物包含層であるIII層となっている場合が多い。特に、I-Jにおいては耕作土下に厚い客土が置かれている。この客土層は、出土遺物から見て近世に形成されたものと考えられる。Aトレンチでは、III層下が直接地山となっており、BトレンチのようにIV層を峻別することができなかった。しかしながらIII層下部層には、古代の包含量が含まれているものと考えられる。

遺構検出面は、東から西へ行くに従って浅くなり、セクションでは把えきれていないが、西端部は耕作土を除くとそのまま遺構検面となっている。

(2) Bトレンチ

Bトレンチの基本層序もAトレンチと同様であるが、先述したようにIII層の下に古代の遺物包含層であるIV層を明瞭に分離して把えることができた。

2. 包含層出土の遺物 (Fig 5)

1は、I層出土の青磁稜花皿である。口縁部はなめらかに外反し、端部は丸くおさめる。畳付けは、外面を斜めに削り狭くなっている。釉は青濁色で厚くかかり高台内面まで施釉される。底部外面は蛇ノ目状に掻き取られている。2・3はIII層出土の青磁碗である。うち2は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。内・外面無文で淡緑色の釉が厚くかかる。胎土は灰白色で緻密である。3は、2と同様の形態をもつ碗で、釉は淡緑色で全面に貫入が入る。4は、土師器の甕でIII層出土である。胴部以下が欠損しているが、口縁部が「く」字状に外反し、口唇部は横方向の強いナデ調整により凹状をなす。5は、III層出土の須恵器の蓋である。口径は13cmを測り、比較的小振りである。擬宝珠形のつまみを有し、天井部外面は左より右へのヘラ削りを施す。口縁部は内・外面横ナデ調整を行い、端部外面は僅かに凹状を呈す。7・8は、IV層出土の弥生土器である。うち、7は甕で口縁部が強く外反し口唇部は面をなす。口唇部及び口縁部内・外面は横方向のナデ調整、胴部外面は木理の荒い縦方向のハケ調整を施す。8は、中期の壺でラッパ状に開く口縁部の外面に幅2.5cm、厚さ1cmの粘土帯を貼付している。口唇部は丸くおさめ頸部外面は縦方向のハケ調整、内面には指ナデが見られる。その他包含層出土の遺物として、土錘301～304を挙げることができる。302～304は平均9g、301は33.2gを測る。

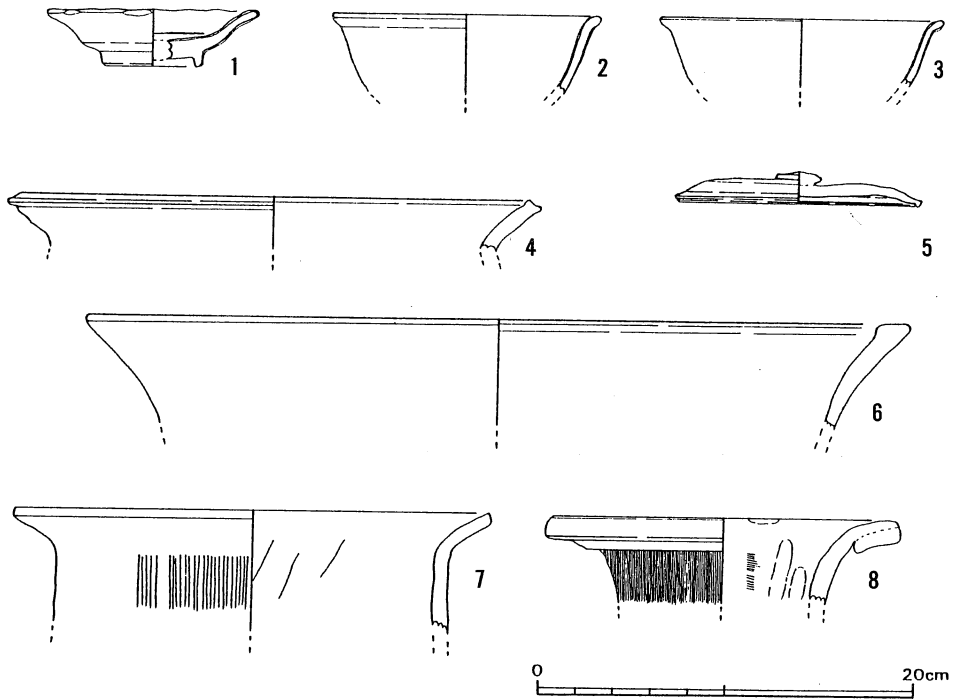


Fig 5. 包含層及びSK 12(6)出土遺物実測図

第V章 遺構と遺物

第1節 遺構

1. 縄文時代～弥生時代

(1) 縄文時代

土 壙

SK 24 (Fig 6)

SK 24は調査区の東部に位置する。平面は円形を呈し、長径1.00m、短径0.95m、深さ1.00mを測る。断面は逆台形を呈し、長軸方向はN-84°-Wを示す。埋土は黒褐色粘質土及

挿図番号	遺構番号	平面形	規模(m)			長軸方向	断面形	備考
			長径	短径	深さ			
第 図	SK 17	長楕円形	2.00	1.00	0.20~0.30	N-45°-E	舟底状	
	SK 18	楕円形	1.60	0.95	0.40	N-87°-E	逆台形	
	SK 23	不定形	2.75	1.10	0.71	N-87°-W	隅丸台形	
	SK 25	"	2.55	1.10	0.25~0.37	N-81°-W	箱形	
	SK 26	不整楕円形	1.55	0.95	0.20	N-86°-W	段状	

表2. 縄文時代土壙計測表

びシルト層で、遺物は床上30cmの部分から縄文時代晩期の深鉢(27)と浅鉢各1点が出土している。本土壙は、貯蔵穴と考えられる。

また、SK24の埋土に同一のものに、SK17, 18, 23, 25, 26がある。これらの各土壙の規模等については、表2の通りである。なお各土壙からは、遺物の出土は見られなかった。

(2) 弥生時代

竪穴住居

ST1 (Fig 8)

調査区の中央部に位置し、径5.10m~5.40m、深さ約45cm、面積は約21.23㎡を測る円形住居址である。床は平坦面をなし、中央ピットは楕円の平面形をなし、長径1.50m、短径0.70m、深さ45cmを測る。他に7個のピットが認められるが、P2, P3, P4, P5が支柱穴である。各々の柱間距離はP2-P3が2.10m、P3-P4が2.06m、P4-P5が1.78m、P2-P5が2.04mを測る。北壁の一部に幅1.80~2.20m、深さ30cmの壁溝が見られる。また、東側及び西側は、中世の溝、土壙等によって切られており、かなりの攪乱を受けている。

第I層は濃茶色粘質土、第II層は黒褐色粘質土である。遺構検出面からは、須恵器壺・高杯、土師器皿、備前焼播鉢等が出土し、第I層は中世の土器片を多量に含んでいる。古墳時代から中世にかけての遺物が混入している。

各ピットからは、タタキ目のみられる土器片が数点出土している。また支柱穴であるP2からは、高杯(11)、P3からは、鉢(10)が出土している。出土遺物等より後期の住居と考えられる。

ST2 (Fig 8)

調査区の東端で検出された方形のプランを有す竪穴住居である。幅14~20cm、深さ28cmの壁溝が見られ、南東壁の一部は削平を受けて明確にできない。一辺約3.95m、深さ22cm、面積約15.21㎡を測る。埋土は黒褐色粘質土で、主軸方向はN-4°-Eを示す。中央ピットは楕円の平面形を呈し、長径83.0m、短径55.0m、深さ30cmを測る。他に8個のピットが認められるが、支柱穴はP4, P5, P8である。

遺物はP1(中央ピット)、P3, P6から弥生土器数点、P4から土師質土器15点、P2から弥生土器、土師質土器数点、P8から土師器、土師質土器数点が出土している。なおこれらの土器は、すべて細片である。P5, P7, P9には遺物は見られなかった。

ST4 (Fig 8)

調査区の東部で検出された方形のプランを有す竪穴住居である。南西部は古代の住居(ST3)によって切られている。また北東部は中世の溝によって切られている。一辺約4.10m

ST1ピット計測表

No	径(cm)	深さ(cm)	備考
P1	150.0	42.8	中央ピット
P2	23.0	61.1	支柱穴
P3	32.5	53.0	"
P4	35.0	54.0	"
P5	30.0	44.5	"
P6	38.0	39.1	
P7	33.0	36.1	
P8	35.0	36.1	

深さ 6 cm、面積は約 17.63 m² を測る。埋土は黒褐色粘質土で、主軸方向は N-3°-E を示す。

ピットは 8 個認められるが、遺物は P5 から弥生土器 1 点、須恵器 1 点のみが出土した。ST4 の埋土中からは、弥生土器が多量に見られ、特に北東部で顕著であった。なかでも甕 (17~26)、鉢 (16) 等が集中して出土した。

土 塙

SK2 (Fig 6)

調査区の西端に位置する。平面は隅丸長方形を呈し、長軸方向は N-3°-E を示す。長径 1.75 m、短径 1.10 m を測る。断面は中央部が台形状に 34 cm ほど高くなっており、南 (深さ 46 cm)、北 (深さ 38 cm) の 2 つに分かれている。埋土は黒褐色粘質土の単純一層である。出土遺物は、北側に多く、床面より砥石 (50)、壁面より叩石 (51)、後期の壺 (28)・甕 (29~31) 等が出土している。また南側では、床面から 7 cm のところに乳白色の粘土塊が見られた。

SK3 (Fig 6)

調査区の西端に位置する。SK2 の南東寄り、長軸方向は N-4°-E を示す。平面は方形を呈し、長径 0.60 m、短径 0.35 m、深さ 10 cm を測る。断面は浅い逆台形を呈し、埋土は黒褐色粘質土である。弥生土器片 2 点が出土している。後期のものと考えられる。

SK4 (Fig 7)

調査区の西部に位置する。平面は楕円形を呈し、長径 2.20 m、短径 1.45 m、深さ 25 cm を測る。なお西側は削平されている。断面は逆台形を呈し、長軸方向は N-62°-W を示す。埋土は黒褐色粘質土で、遺物はタタキ目の見られる後期の弥生土器片が数点出土した。

SK6 (Fig 7)

調査区の西部に位置する。SK4 の北東寄り、中世の土塙 (SK5) と切り合っている。長軸方向は N-88°-W を示す。平面は楕円形を呈し、長径 1.40 m、短径 1.15 m、深さ 25 cm を測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色粘質土の単純一層である。遺物は前期の土器片 8 点、うち壺 (33) 1 点を含む、中期の土器片、壺 (32) 等が多量に出土している。

SK37 (Fig 7)

調査区の北部に位置する。平面は楕円形を呈し、長径 1.30 m、短径 1.10 m、深さ 7 cm を測る。断面は浅い皿形を呈し、長軸方向は N-30°-E を示す。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は壁面より前期の甕 (35)、床面より中期の壺 (34) 等が出土している。

SK43 (Fig 7)

調査区の中央部に位置する。ST1 の東側、長軸方向は N-85°-W を示す。平面は不整楕円形を呈し、長径 2.20 m、深さ 15~40 cm を測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色粘質土である。遺物は壺 (36, 37) の他に多量の弥生土器片が出土している。中期中葉のものである。

SK44 (Fig 7)

調査区の中央部に位置する。平面は長楕円形を呈し、長径 2.75m、短径 0.80m、深さ 25～40cm を測る。断面は逆台形を呈し、長軸方向は N-27°-E を示す。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は壺の口縁部・底部の他に多量の弥生土器片が出土している。中期中葉に属する。

SK45 (Fig 7)

調査区の北部に位置する。平面は不定形を呈し、長径 1.60m、短径 1.10m を測る。断面は逆台形をなし、東側が深さ 32.5cm、西側は 25cm を測る。長軸方向は N-52°-W を示す。埋土は黒褐色粘質土の単純一層である。遺物は弥生土器片が数点出土しているが、詳細な時期決定はでき難い。

SK48 (Fig 7)

調査区の北端に位置する。平面は不定形を呈し、長径 2.50m、短径 1.30m を測る。断面は東側がU字形をなし深さ 48cm、西側は逆台形をなし深さ 31cm を測る。長軸方向は N-62°-W を示す。埋土は黒褐色粘質土の単純一層である。遺物は壺 (38～40)、甕 (41)、鉢 (42) の他、多量の弥生土器片が出土している。前期末である。

SK54 (Fig 7)

調査区の中央部に位置する。ST1 の南側で、長軸方向は N-60°-W を示す。平面は楕円形を呈し、長径 1.35m、短径 0.70m、深さ 7cm を測る。断面は浅い逆台形をなし、埋土は黒褐色粘質土である。遺物はタタキ目の見られる後期の弥生土器片が数点出土した。

ピット

P1 (付図 1)

ST1 の西側に位置する。平面は円形を呈し、直径 57cm、短径 50cm、深さ約 25.6cm を測る。埋土は黒褐色粘質土で、壺 2 点 (47, 48) の他、多量の弥生土器片が出土している。中期のピットと考えられる。

P2 (付図 1)

ST1 の西隣に位置する。平面は楕円形を呈し、直径 120cm、短径 75cm、深さ 10.5cm を測る。埋土は黒褐色粘質土で、弥生土器片 2 点が出土している。

P3 (付図 1)

SK24 の北側に位置する。平面は円形を呈し、直径 84cm、短径 82cm、深さ 26.7cm を測る。埋土は黒褐色粘質土で、ハケ調整の見られる土器片等 13 点が出土している。時期は不明である。

P4 (付図 1)

SK24 の東側に位置する。平面は円形を呈し、直径 49cm、短径 44cm、深さ 30.5cm を測る。埋土は黒褐色粘質土で、壺 (44～46) 等が出土している。前期末のピットと考えられる。

P 5 (付図 1)

ST 4 の南側、SK 24 の東側に位置する。平面は円形を呈し、直径 55cm、短径 53cm、深さ 5.8 cm を測る。埋土は黒褐色粘質土で、鉢 (49) 1 点、土師器数点が出土している。

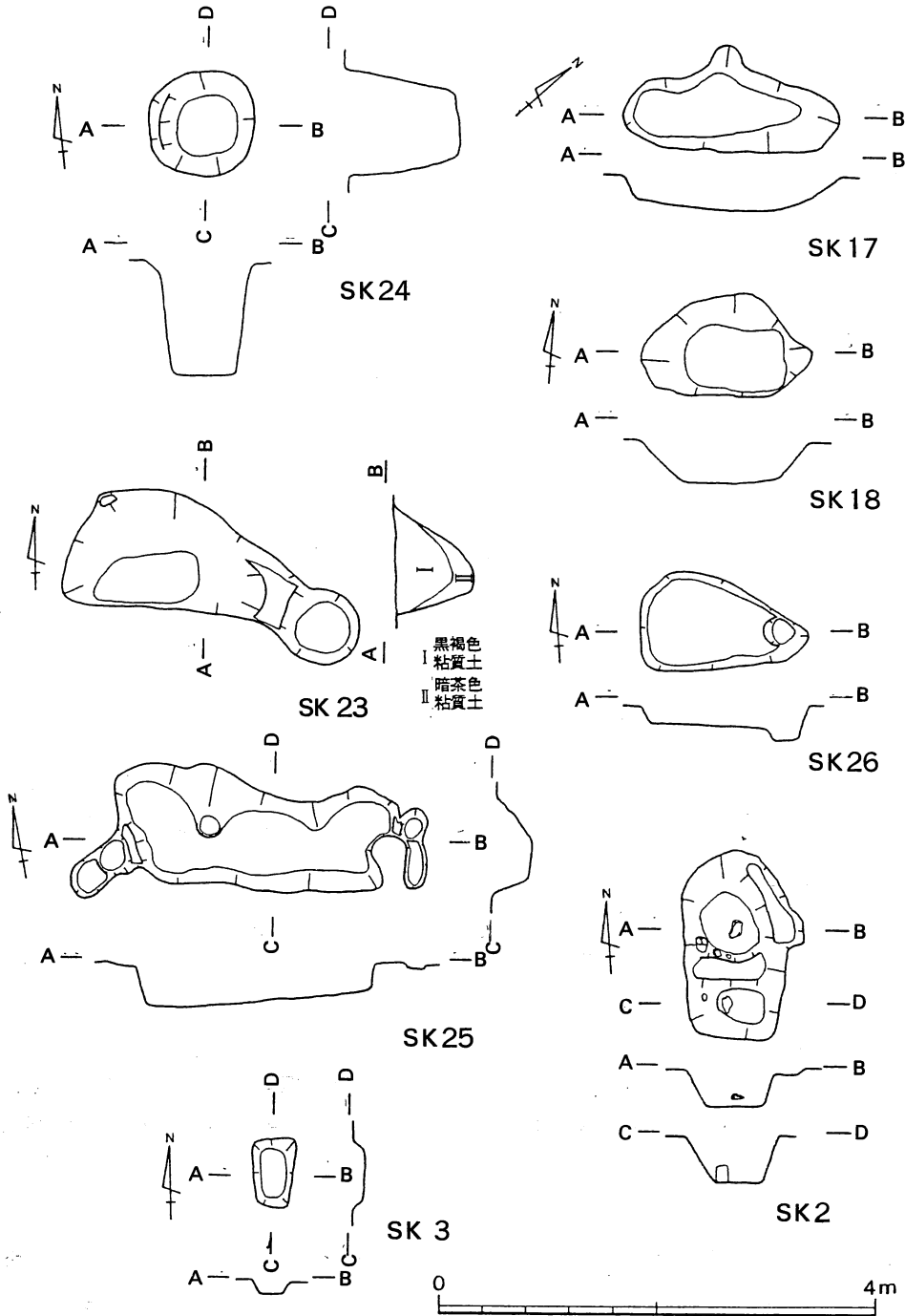


Fig 6 縄文 (SK 17~26)・弥生時代 (SK 2・3) の土壌実測図

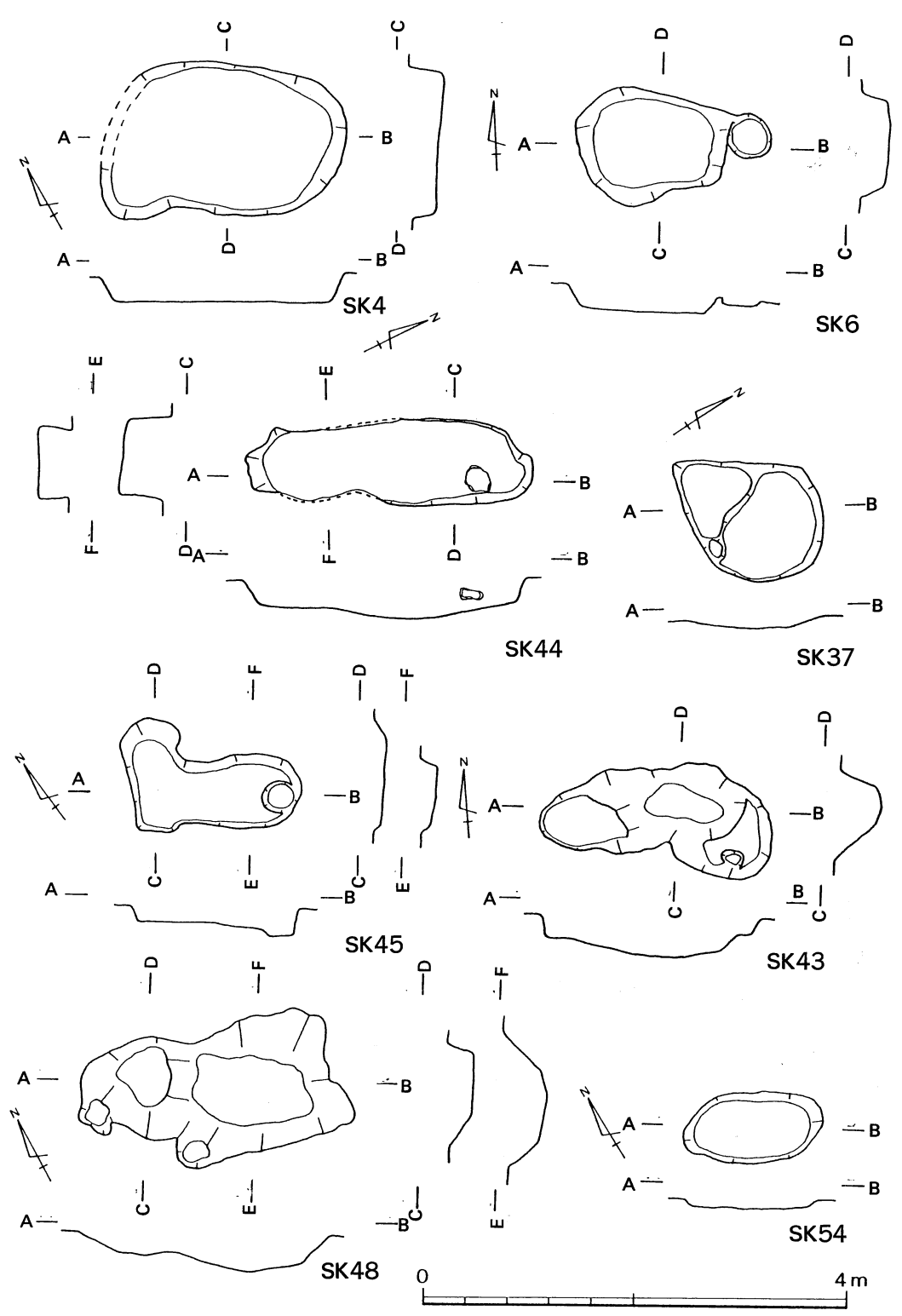


Fig 7 弥生時代の土壇

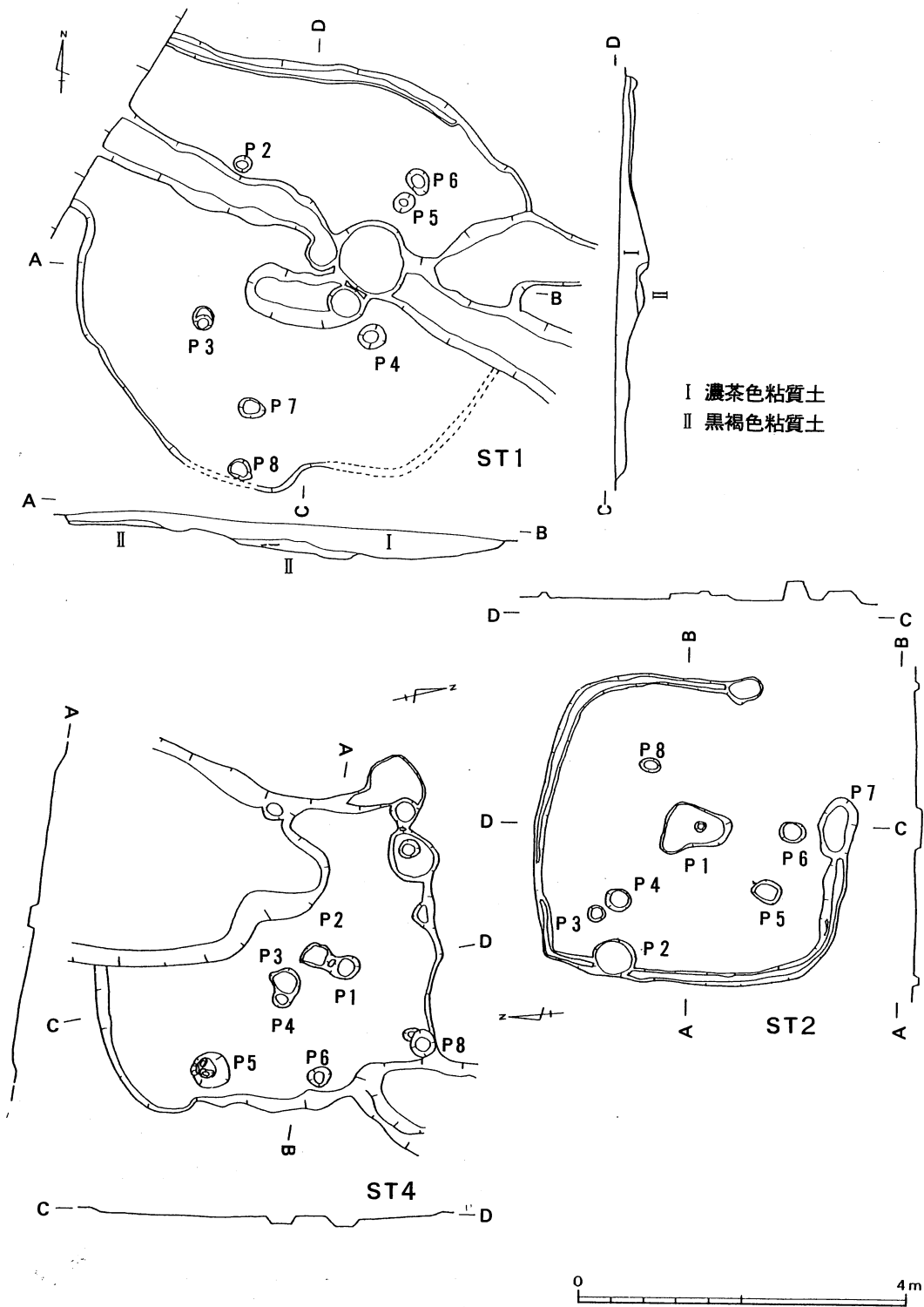


Fig 8 弥生時代堅穴住居実測図

2. 古 代

古代の遺構は、竪穴住居1棟、掘立柱建物14棟、柵列2条、土城5基、溝1条を検出した。古代の柱穴の埋土は、特にことわりのない場合黒褐色粘質土（砂質土混り）である。また遺構の組合せやその変遷については次章に譲る。

掘立柱建物（付図1）

SB1（Fig 9）

SB1は、調査区東部、建物群の中では北寄りに位置する。建物は、桁行3間（6.56m）×梁間2間（4.24m）の東西棟で、棟方向はN-60.5°-Eであり、面積は27.8㎡を測る。柱穴の平面は、隅丸方形と不整形を呈し、一辺50~93cmを測り、柱痕径は直径22~28cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、35~75cmである。柱間距離は、桁行2.20m等間、梁間2.13~2.14m間となっている。

建物は、中世のSD7及びSD12やピットに切られていた。また、西面中央の柱穴はSK46によって破損されたと考えられ、確認できなかった。P3はSD12に切られている。

出土遺物は細片が多く、図示できたのはP-9から出土した土師器（53）、須恵器（64）である。

SB2（Fig 10）

SB2は、調査区東南部、建物群の中では東南寄りに位置する。建物は、桁行5間（9.60m）×梁間3間（6.08m）の南北棟で、棟方向はN-30°-Eであり、面積は59.0㎡を測る。柱穴の平面は、隅丸方形と円形を呈し、一辺60~90cmを測り、柱痕径は、直径20~26cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、20~80cmである。柱間距離は、桁行1.80~2.10m間、梁間2.0~2.3m間となっている。

建物の東南部は、調査区外であるため未調査である。

遺物は細片が多く、図示できたのはP8から出土した須恵器（55）のみであった。

SB3（Fig 11）

SB3は、調査区の中央部よりやや東北側、建物群の中では、ほぼ中央部、SB5の北側に位置する。

建物は、桁行6間（12.7m）×梁間3間（4.65m）の南北棟で、北1間目で間仕切られており、棟方向はN-32°-Eであり、面積は59.0㎡を測る。柱穴の平面は、方形・隅丸方形及び不整形を呈し、一辺60~95cmを測り、柱痕径は、直径25~33cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、10~65cmである。柱間距離は、桁行1.85~2.95m間、梁間1.35~1.73m間となっている。埋土は黒赤色粘質土である。

建物は、SB4と重複しているが、先後関係は、柱穴の切り合い関係からSB3を新しくみる。出土遺物は少なく、図示できたのは、P4、P10、P11から出土した土師器（62、65、66）の3点のみである。

SB4 (Fig 12)

SB4は、調査区の中央部より、やや東北側、建物群の中では、ほぼ中央部SB5の北側に位置する。建物は、桁行3間(6.70m)×梁間3間(4.60m)の南北棟で、棟方向はN-33°-Eであり、面積は30.8㎡を測る。柱穴の平面は方形及び不整形を呈し、一辺60~103cmを測り、柱痕径は直径15~33cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、25~80cmである。柱間距離は、桁行1.90~1.95m間、梁間1.50~1.70m間となっている。

建物は、SB3に切られている。またP3~P5、P9は、切り合い関係が認められ、より古い段階での建替えの可能性が持たれるものである。

出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。

SB5 (Fig 13)

SB5は、調査区の中央部より、やや東側に位置し、建物群の中では、ほぼ中央に位置する。建物は身舎桁行5間(20.5m)×身舎梁間3間(5.45m)の西廂付南北棟で、棟方向はN-31°-Eであり、面積は57.2㎡を測る。身舎柱穴の平面は方形を呈し、一辺67~103cmを測り、柱痕径は直径20~25cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、12~46cmである。身舎柱間距離は、桁行1.90~2.10m間、梁間1.65~1.90m間となっている。廂の出は、2.56mを測り、廂の柱穴の平面は、不整形を呈し、一辺30~60cm、柱穴の検出面からの深さは、12~20cmを測り、東側の桁行の身舎柱穴に対応している。

建物の南端は、中世の堀であるSD4に切られており、南端の廂の柱穴は、確認できなかった。又、SB5は、SB3と重複しているが、SB5がより古いことが判明している。南東の柱穴には切り合いがみられるが、重複する建物は存在せず、建替えの可能性も存する。

出土遺物は、細片が多く、図示できたのはP4から出土した須恵器(54)のみである。

SB6 (Fig 14)

SB6は、調査区の中央部南端、建物群の中では、中央部より、やや西南側に位置する。建物は、桁行4間(8.35m)×梁間2間(5.32m)の東西棟で、棟方向は、N-61.5°-Wであり、面積は44.4㎡を測る。柱穴の平面は、方形を呈し、一辺55~75cmを測り、柱痕径は、直径15~25cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、20~50cmである。検出した柱穴は、計11個であり、それらの柱穴のうち断ち割り調査は、P2~P5、P8~P11とし、その他は、位置の確認のみにとどめた。柱痕の埋土は、灰黒色粘質土で、P-4は、柱を抜きとったあと、こぶし大の石を入れて埋め戻したものであることが確認された。柱間距離は、桁行2.00~2.32m間、梁間1.40~3.97m間となっている。

建物の西面の中央部の柱穴は確認できなかったが、削平されたものと考えられる。

出土遺物は、細片が多く、実測できたのは、P2より出土した須恵器(60)のみである。

SB7 (Fig 15)

SB7は、調査区の中央より西南部付近、建物群の中では、西端部に位置する。SB7、S

B 8、S B 9は、ほぼ同軸上に1列に並ぶ。建物は、桁行3間(4.75m)×梁間(4.05m)の南北棟で、棟方向はN-30.5°-Eであり、面積は19.2㎡を測る。柱穴の平面は、方形を呈し、一辺48~90cmを測り、柱痕径は、直径15~21cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは5~25cmであり、P 6、P 8、P 9の内部には礎盤と考えられる偏平な石が置かれていた。柱間距離は、桁行1.50~1.60m間、梁間1.25~1.50m間となっている。P 1、P 9、P 11は、近世のSD 3に切られている。西南部の柱穴は確認できなかったが、削平された結果と考えられる。

出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。

S B 8 (Fig 15)

S B 8は、調査区の中央より、やや西南部付近、建物群の中では、西端部に位置する。S B 7、S B 8、S B 9は、ほぼ同軸上に1列に並び、S B 7とS B 9に挟まれた位置にある。建物は、桁行2間(3.70m)×梁間2間(3.60m)の南北棟で、棟方向はN-29.50°-Eであり、面積は13.3㎡を測る。柱穴の平面は方形を呈し、一辺47~75cmを測る。柱痕が確認されたのは1個のみで、直径12.2cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、10~35cmである。柱間距離は、桁行1.70~2.00m間、梁間1.10m等間となっている。

P 2及びP 6は、近世の溝SD 3に切られている。

出土遺物は少量で、図示できたのは、P 3から出土した土師器(57)のみであった。

S B 9 (Fig 16)

S B 9は、調査区の中央より、やや西南部、建物群の中では西南端部に位置する。S B 7、S B 8、S B 9は、ほぼ同軸上に1列に並び南端に位置する。建物は、桁行2間(3.80m)×梁間2間(3.33m)の東西棟で、棟方向はN-61.5°-Wであり、面積は12.7㎡を測る。柱穴の平面は、方形・円形及び不整形を呈し、一辺60~75cmを測る。柱痕が確認されたのは1個のみで、直径18.0cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、13~30cmである。柱間距離は、桁行3.80m間、梁間1.35~1.80m間となっている。

建物の南西の隅の柱穴は、確認することができなかったが、削平された結果と考えられる。

出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

S B 10 (Fig 16)

S B 10は、調査区の中央部南端、建物群の中では、S B 9の東に位置する。建物は、桁行3間(5.15m)×梁間2間(4.8m)の南北棟で、棟方向はN-25.5°-Eであり、面積は24.7㎡を測る。柱穴の面積は、方形及び不整形を呈し、一辺50~82cmを測り、柱痕径は、直径20~25cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、8~27cmである。柱間距離は、桁行1.55~1.85m間、梁間1.60~3.20m間となっている。

建物の南面中央の柱穴は、確認することができなかったが、削平された結果と考えられる。

出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

SB11 (Fig 17)

SB11は、調査区の中央部最南端、建物群の中では、SB10の南西に位置する。3個の柱穴を確認したのみで、棟の方向は不明である。柱穴の平面は、方形を呈し、一辺60~87cmを測る。柱痕が確認されたのは1個のみで、直径28cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、23~28cmである。P2、P3の内部には礎盤と考えられる扁平な石が置かれていた。柱間距離は1.83~2.00m間となっている。P1の床面から少量の炭化物が検出された。

出土遺物はほとんどなく、図示できるものはなかった。

SB12 (Fig 17)

SB12は、調査区の中央部北端、建物群の中では、西北端に位置する唯一の総柱建物跡で倉庫と推定される。建物は、桁行3間(5.15m)×梁間2間(3.65m)の南北棟で、棟方向はN-31°-Eであり、面積は18.8㎡を測る。柱穴の平面は方形及び不整形を呈し、一辺45~102cmを測り、柱痕径は直径18~22cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、12~42cmである。柱間距離は、桁行1.70~1.73m間、梁間1.75~1.90m間となっている。

建物の中央に位置するP5及びP8の内部には礎盤と考えられる扁平な石が置かれている。なお、P8の礎盤とみられる石は、中央で割れていた。

出土遺物は細片で、図示できるものはなかった。

SB13 (Fig 18)

SB13は、調査区の東部、建物群の中では、SB2の北東側に位置する。建物は、桁行2間(4.75m)×梁間2間(4.25m)の東西棟で、棟方向はN-59.5°-Wであり、面積は20.2㎡を測る。柱穴の平面は、隅丸方形・円形及び不整形を呈し、一辺30~80cmを測り、柱痕径は直径15~25cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは、15~50cmである。柱間距離は、桁行2.10~2.45m間、梁間2.10~2.15m間となっている。

建物は、SB14と重複しているが、柱穴自体の切り合いは見られず、先後関係を明確にすることはできなかった。

出土遺物は、少量で図示できるものはなかった。

SB14 (Fig 18)

SB14は、調査区の東部、建物群の中では、北東端に位置する。建物は桁行2間(6.97m)×梁間2間(4.32m)の東西棟で、棟方向はN-59°-Wであり、面積は30.1㎡を測る。柱穴の平面は円形及び方形を呈し、一辺50~85cmを測り、柱痕は検出できなかった。これらの柱穴の検出面からの深さは、12~60cmである。柱間距離は、桁行2.50~4.47m間、梁間2.12~2.20m間となっている。

建物は、SB13、SK22、SK23と重複する。SB13とは、柱穴自体の切り合いはみられず、先後関係は不明である。SK23はP2に切られていることからSB14がより新しいことが判明している。

出土遺物は少量で図示できるものはなかった。

竪穴住居

ST3 (Fig 19)

ST3は、調査区の東北部にあり、SB1とSB4との間に位置する。

建物は、長径 6.8 m × 短径 3.13 m の南北棟で、主軸方向は N - 37° - E であり、面積は 16.4 m² を測る。平面形は、北部が突出気味に彎曲した不整隅丸長方形を呈している。壁高は約 21.5 cm で、壁はほぼ平坦な床面から急角度で立ち上がっている。南東部の隅に楕円形の平面をもつ径 117 cm、床面から深さ約 19 cm の落ち込みを検出したが、ST3 に伴うものかは不明である。西壁沿いに支柱穴と考えられる 3 個の柱穴を検出したが、対応する柱穴を確認できなかった。柱穴の直径は 20 ~ 35 cm、深さ 18 ~ 31 cm を測る。埋土は、2 層に区別でき I 層は黒褐色粘質土で攪乱が随所にみられる。II 層は黄茶色粘質土である。

出土遺物は、柱穴からの出土は皆無で、図示できたのは I 層より出土した土師器 (59.67)、須恵器 (58.61) である。

土 壙

SK7 (Fig 20)

SK7は、調査区の東部に位置する。平面形及び長軸方向は、中世のSD1及び柱穴に切られているため不明であるが、円形を呈していたと考えられる。長径 ? × 短径 1.5 m、検出面からの深さは 20.0 cm を測り、壁は緩やかに立ち上がる。床面は、ほぼ平らである。埋土は黒褐色粘質土であり、単純一層であった。

出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。

SK10 (Fig 20)

SK10は、調査区の西部に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長径 2.05 × 短径 0.87 m、検出面からの深さは 15 cm を測り、長軸方向は N - 42° - E である。壁は急傾斜で立ち上がる。床面は、水平である。埋土は黒褐色粘質土であり、単純一層であった。

出土遺物は少なく、図示できたのは土師器 (68) のみである。

SK28 (Fig 20)

SK28は、調査区の東南部、SB2の南西に位置する。平面形は不整形を呈し、長径 1.05 m × 短径 0.7 m、検出面からの深さは 5 ~ 10 cm を測り、長軸方向は N - 66° - E である。壁は急傾斜で立ち上がっている。床面は、ほぼ水平である。埋立は黒褐色粘質土であり、単純一層であった。

出土遺物は、土師器の細片が 1 点出土したのみで図示できなかった。

SK39 (Fig 20)

SK39は、調査区の中央部のやや北寄り、SB12の東南に位置する。平面形は不整形を呈し、長径 1.15 m × 短径 1.05 m、検出面からの深さは 5 ~ 25 cm を測り、長軸方向は N - 78° - E であり、

壁は緩やかに立ちあがり、床面はやや傾斜をもっている。中世の柱穴に切られている。埋土は黒褐色粘質土であり、単純一層である。

出土遺物は少量で、図示できるものはなかった。

SK50 (Fig 20)

SK50は、調査区の北東部、ST3の北東側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長径5.25m×短径4.05m、検出面からの深さは15~50cmを測り、長軸方向はN-58°-Wである。壁は急傾斜で立ち上がっているが、北側の一部は袋状を呈している。床面は、南西部と北東部に一段高い平坦部を有する。中世の柱穴及びSD12に切られている。埋土は2層に別れて、I層は濃茶色粘質土で、II層は黒褐色粘質土である。

出土遺物は多く、土器捨て場であったと考えられる。図示できたのは土師器(87, 88, 90, 91, 93~98)、須恵器(69~86, 89, 92)、土製品(99)である。

柵 列

SA1 (Fig 19)

SA1は、調査区東南部、建物群の中では東南寄り、SB2の西側に位置する。規模は4間(8.00m)の南北方向で、主軸方向はN-29.5°-Eを測る。柱穴の平面は隅丸方形及び円形を呈し、一辺27~68cmを測り、柱痕径は直径20~22cmである。これらの柱穴の深さは23~33cmであり、柱間距離は2.0m等間である。

出土遺物は少なく、図示できるものはなかった。

SA2 (Fig 19)

SA2は、調査区の東部、SB3とSB2との間に位置する。規模は、5間(9.10m)の東西方向で、主軸方向はN-55°-Wを測る。柱穴の平面は円形及び不整形を呈し、一辺37~58cmを測り、柱痕径は、直径10~20cmである。これらの柱穴の深さは、14~32cmであり、柱間距離は、1.35~1.93m間である。

出土遺物は少なく、図示できたのはP1、P2より出土した土師器(52, 56, 63)のみであった。

溝

SD2 (Fig 19)

SD2は、調査区の中央よりやや西に位置し、調査区を北東から南西に向かって、北端付近で西側にゆるやかな弧状を描きながら直線的に延び、南端でやや東側に曲がっている。両端は調査区外に出ている。規模は、長さ約66.4m、幅約42~120cm、深さ10.0~42.0cm、主軸方向はN-32°-Eを測る。中央よりやや北部の約7mの間は削平を受けている。埋土は、砂まじりの黒褐色粘質土であるが、北端と南端の標高差はほとんど見られない。

出土遺物は、特に北部に集中している。図示できたのは、土師器(100~112, 118~128)、須恵器(113~117)、土製品(129~131)、石製品(134)である。

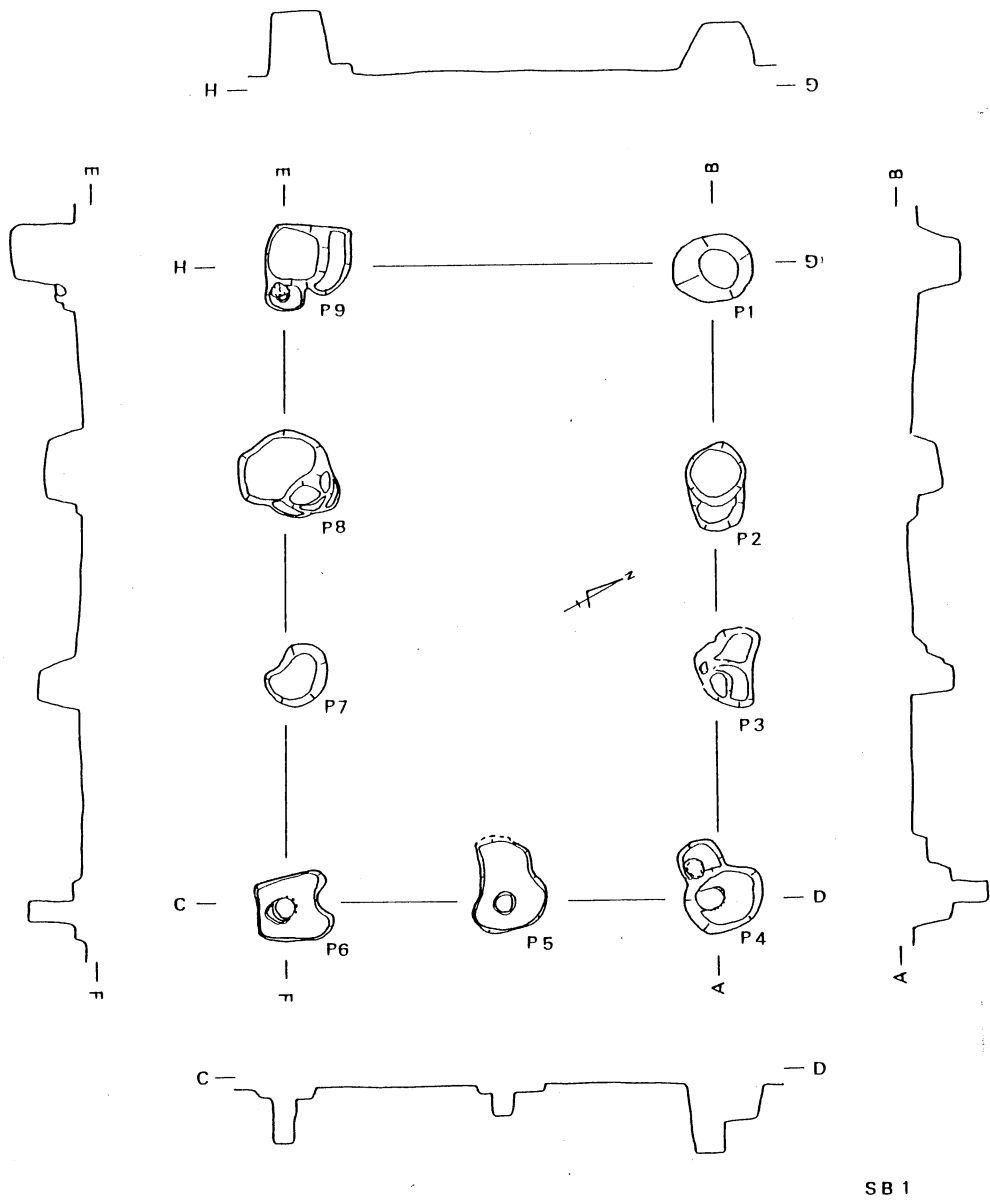


Fig 9. SB 1 实测图

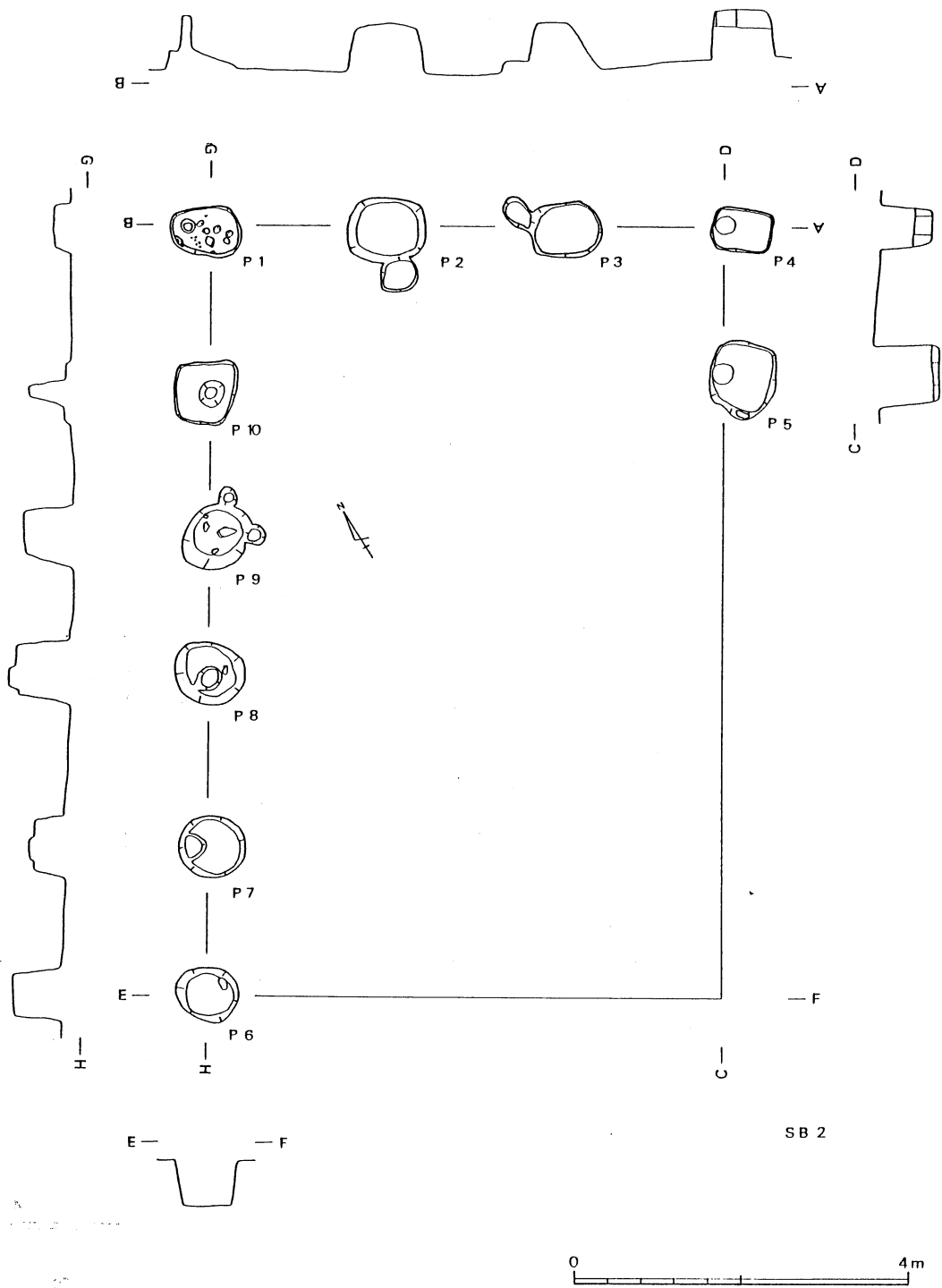


Fig 10. SB 2 实测图

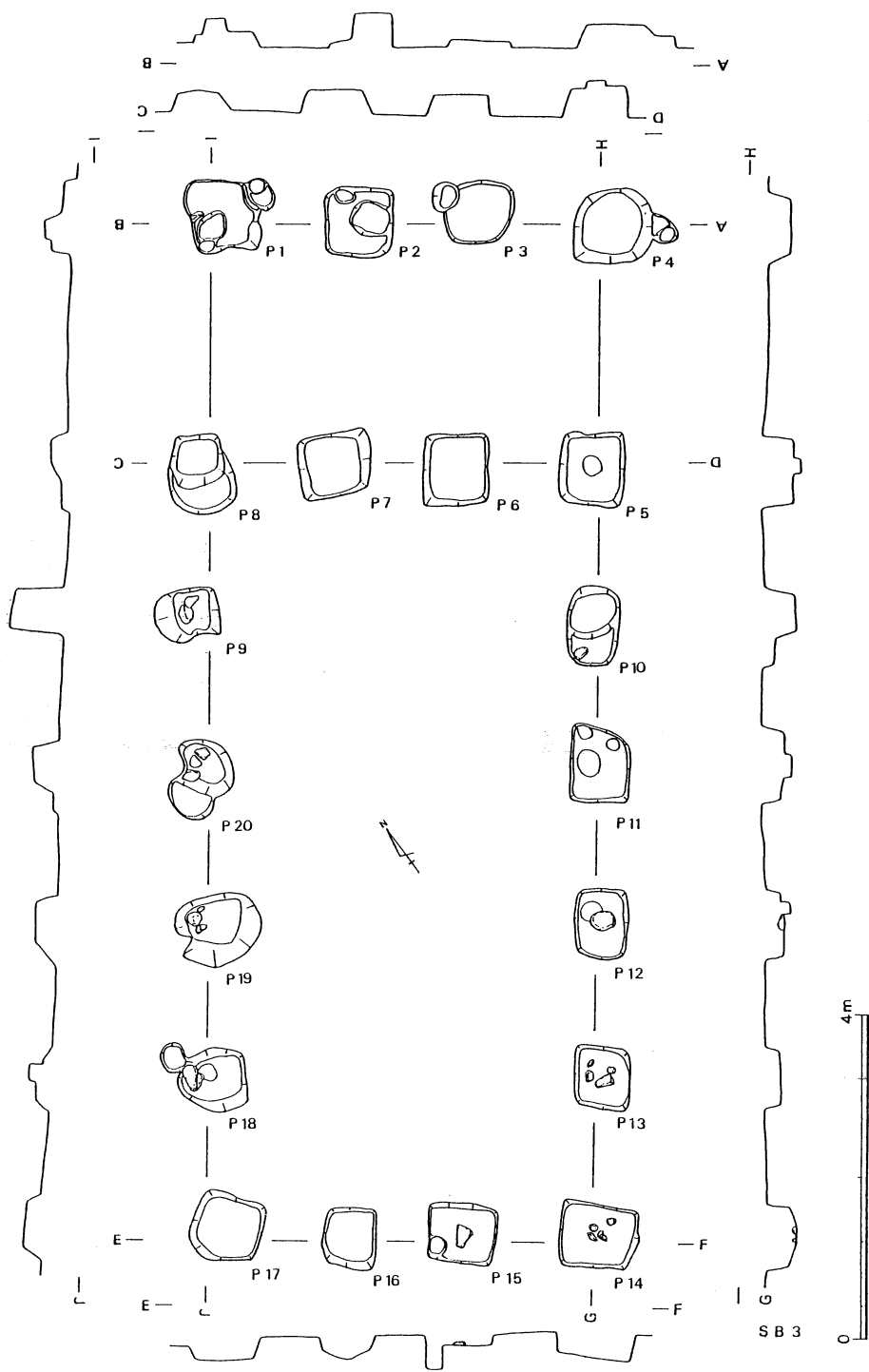


Fig 11. SB 3 実測図

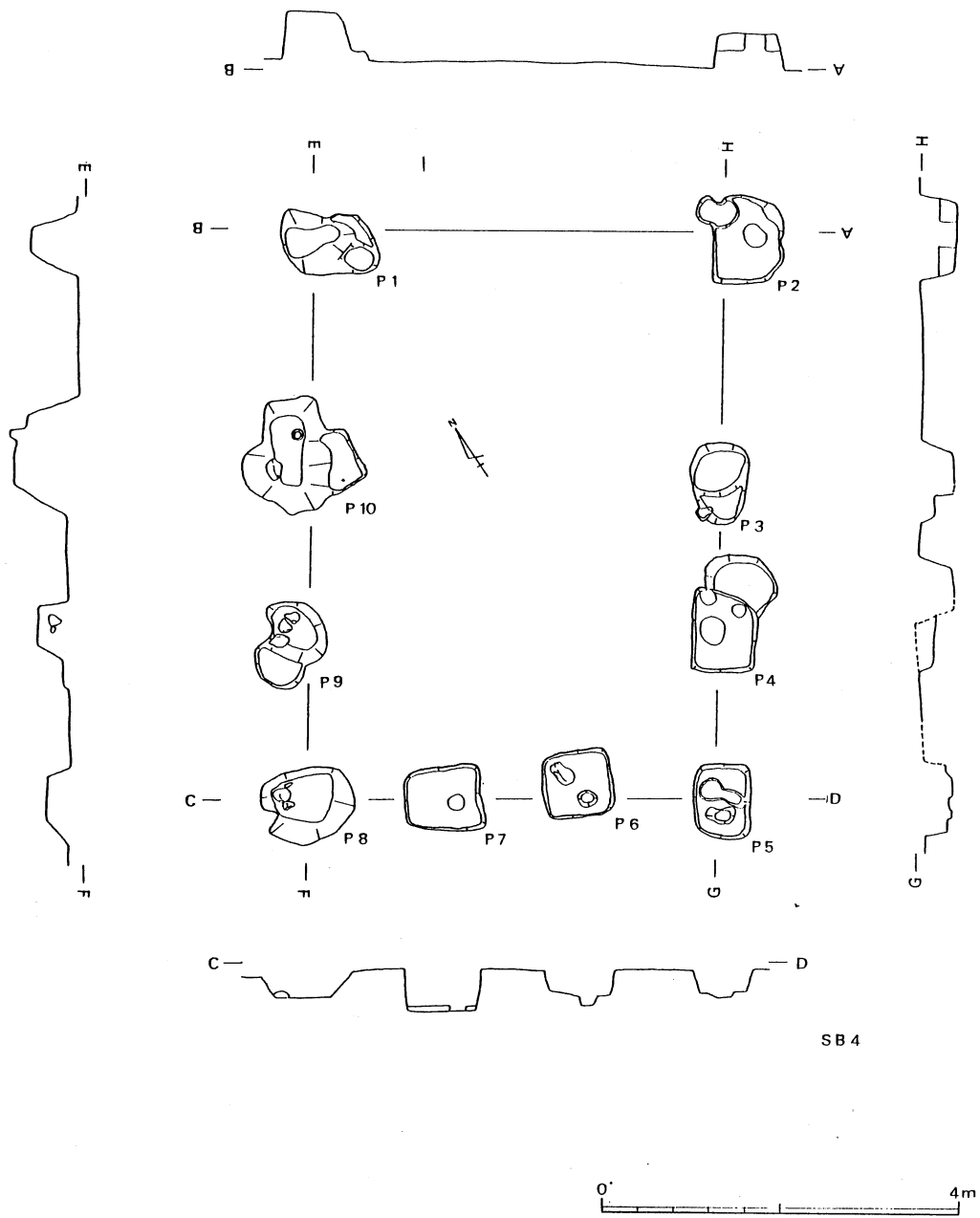


Fig 12. SB 4 实测图

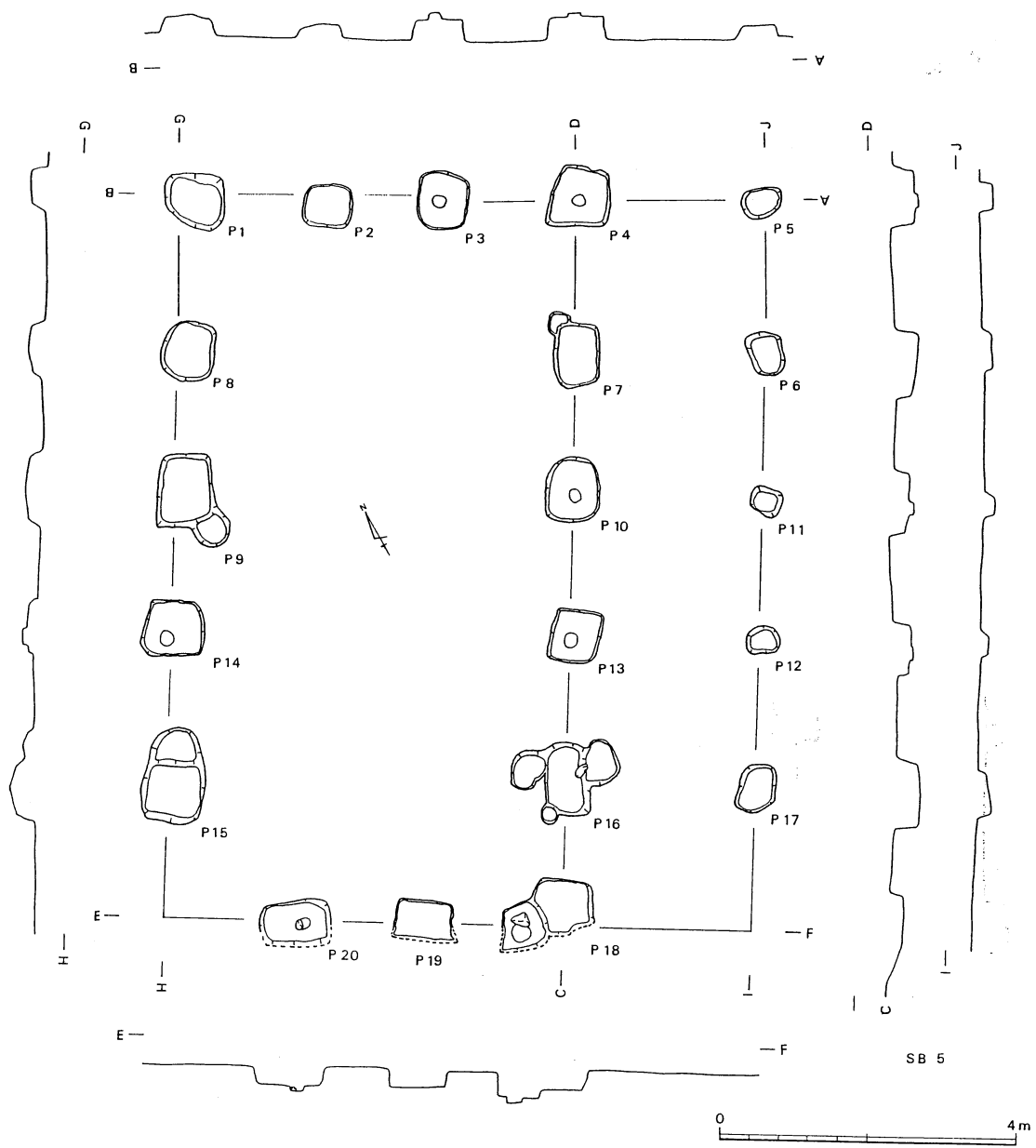
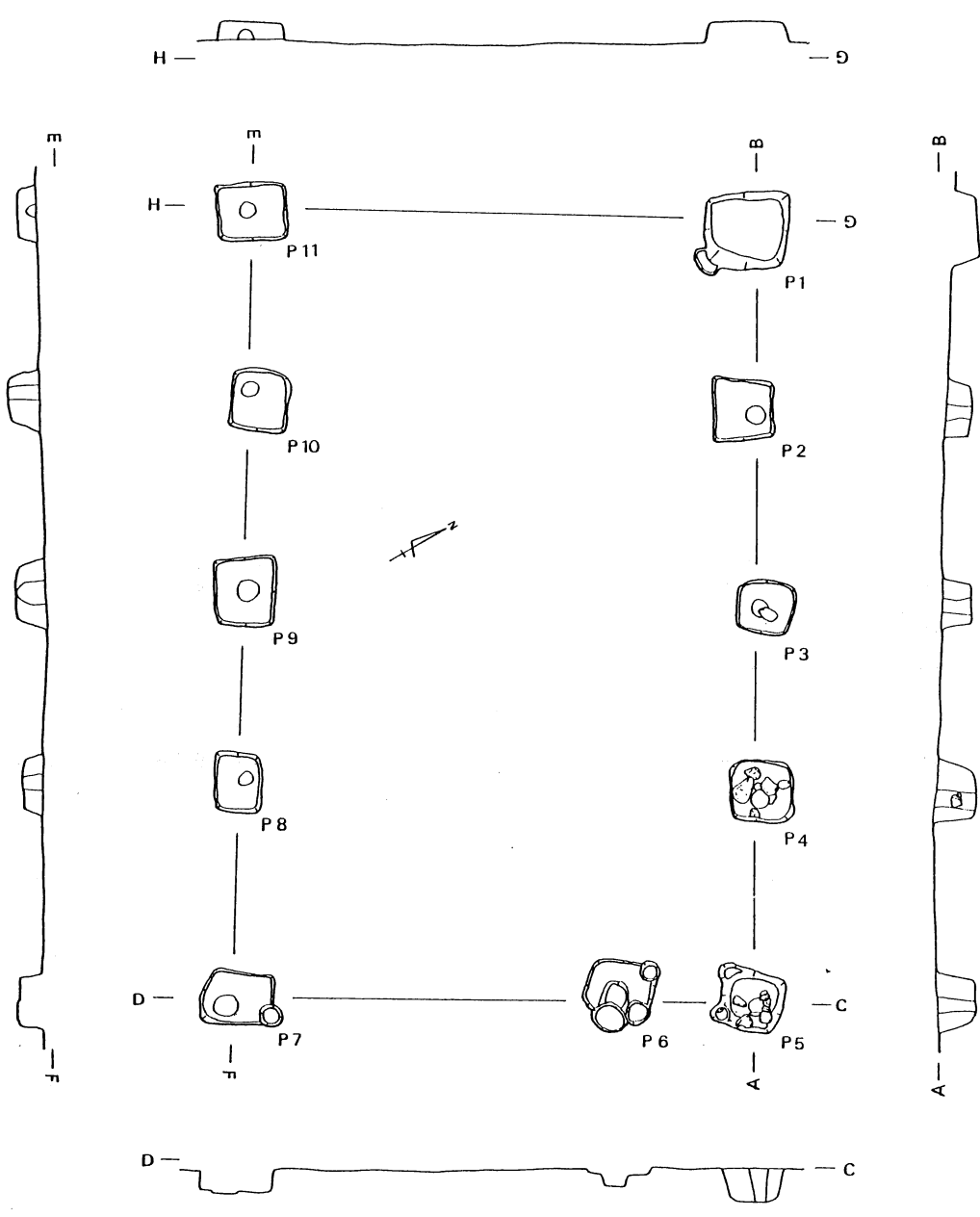


Fig 13. SB 5 实测图



SB 6

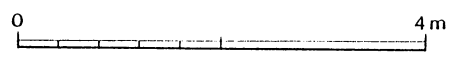


Fig 14. SB 6 实测图

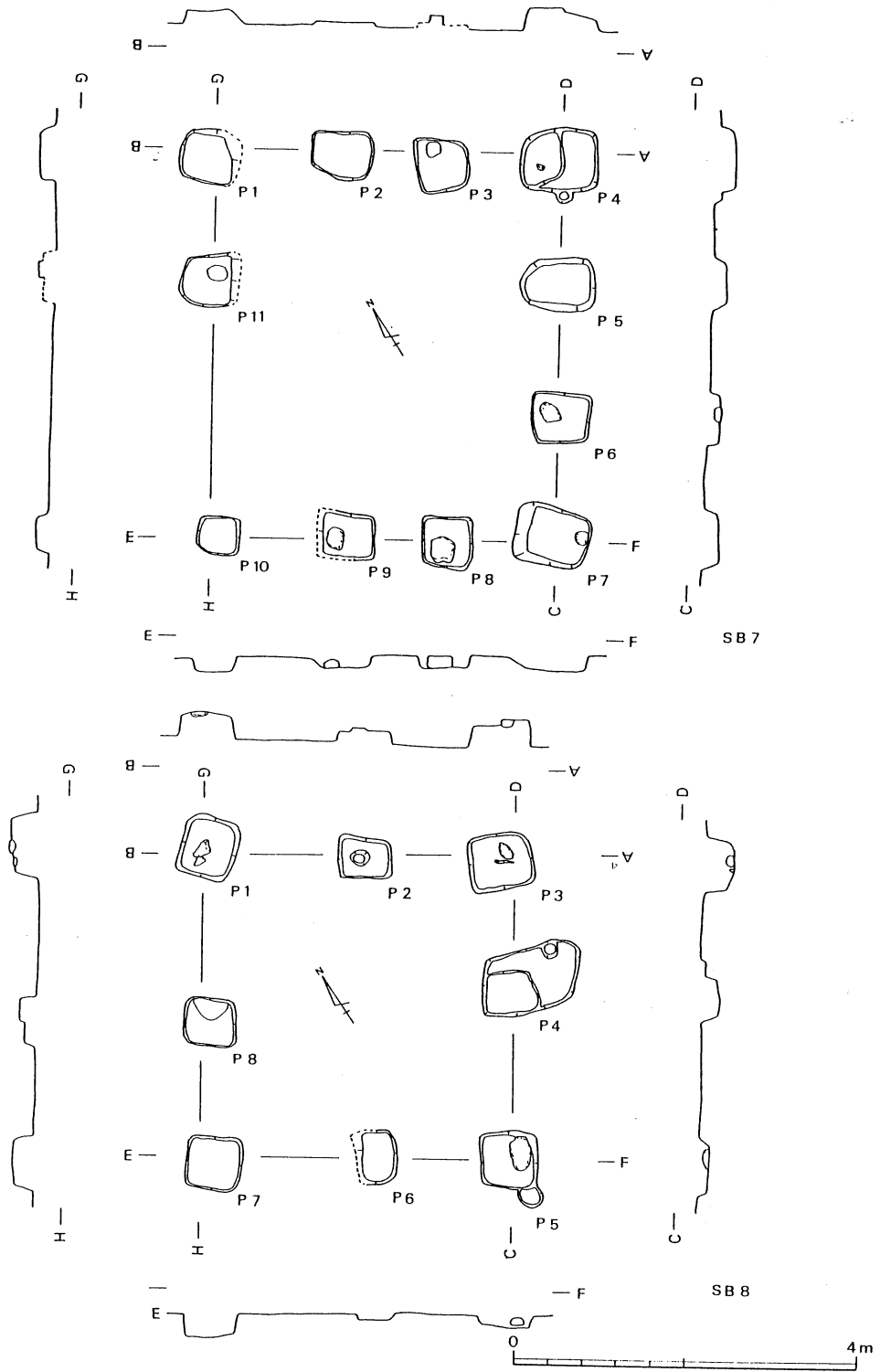
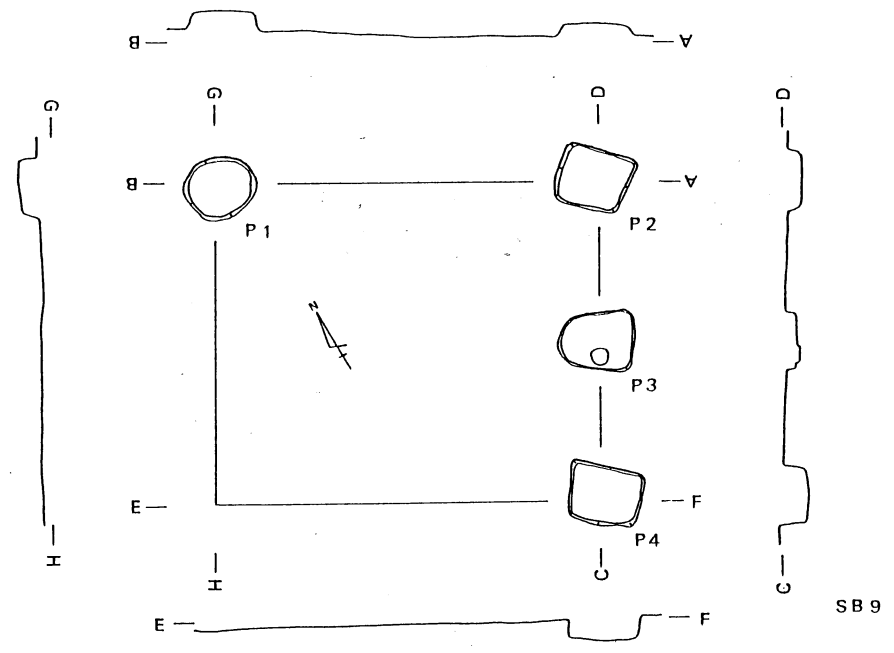
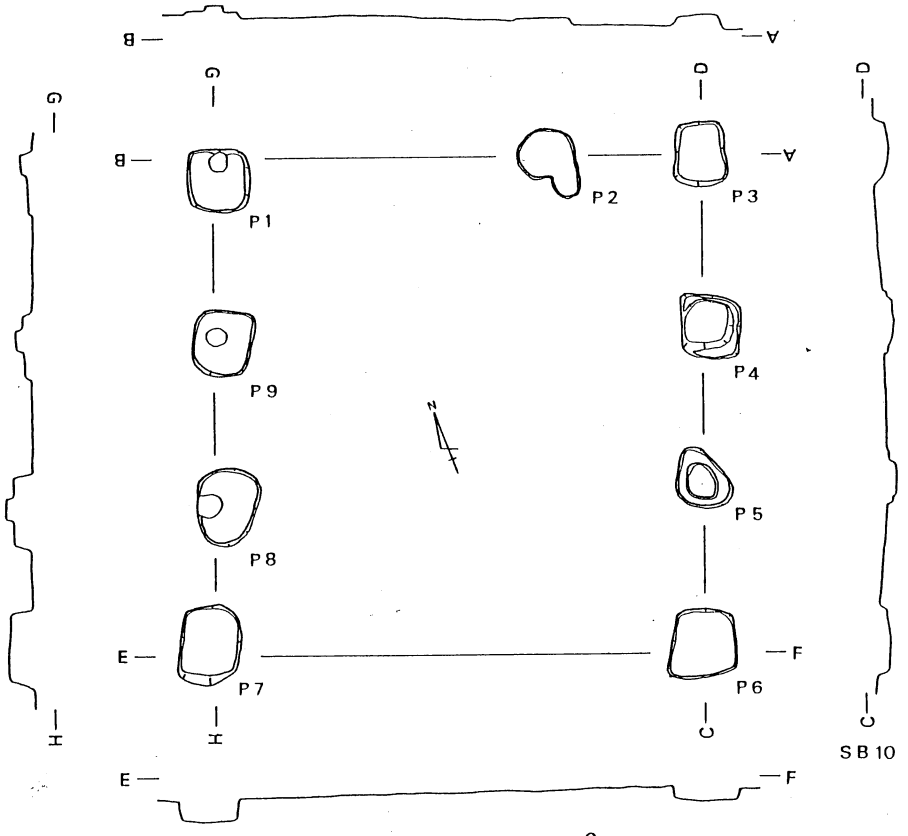


Fig 15. SB7 · SB8 实测图



SB 9



SB 10

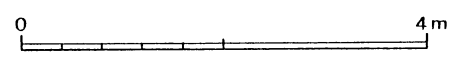


Fig 16. SB 9 · SB 10 実測図

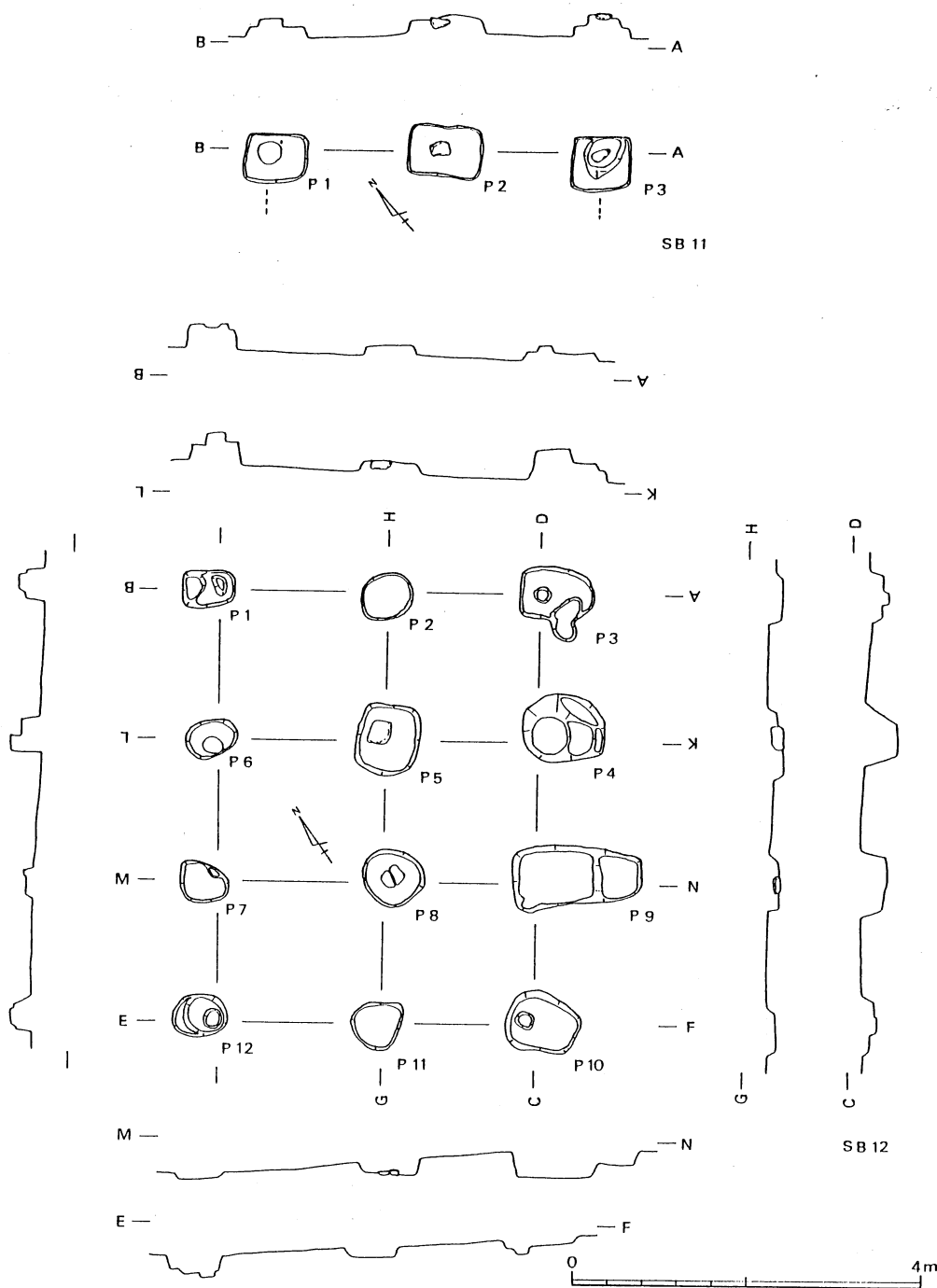


Fig 17. SB 11 · 12 实测图

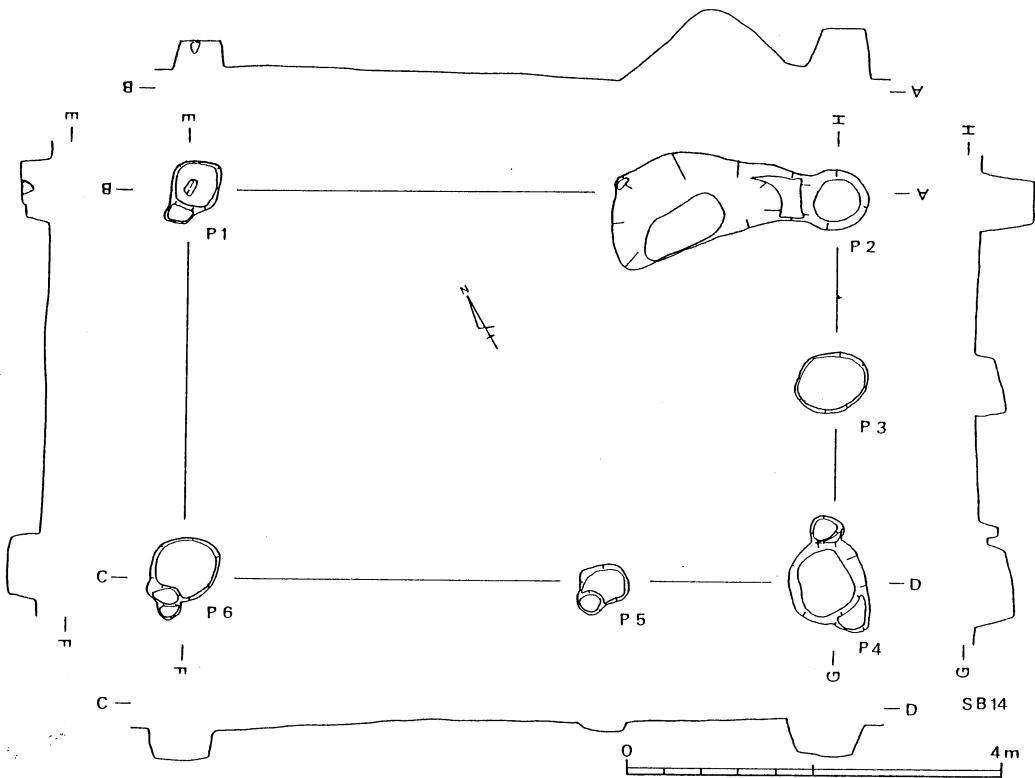
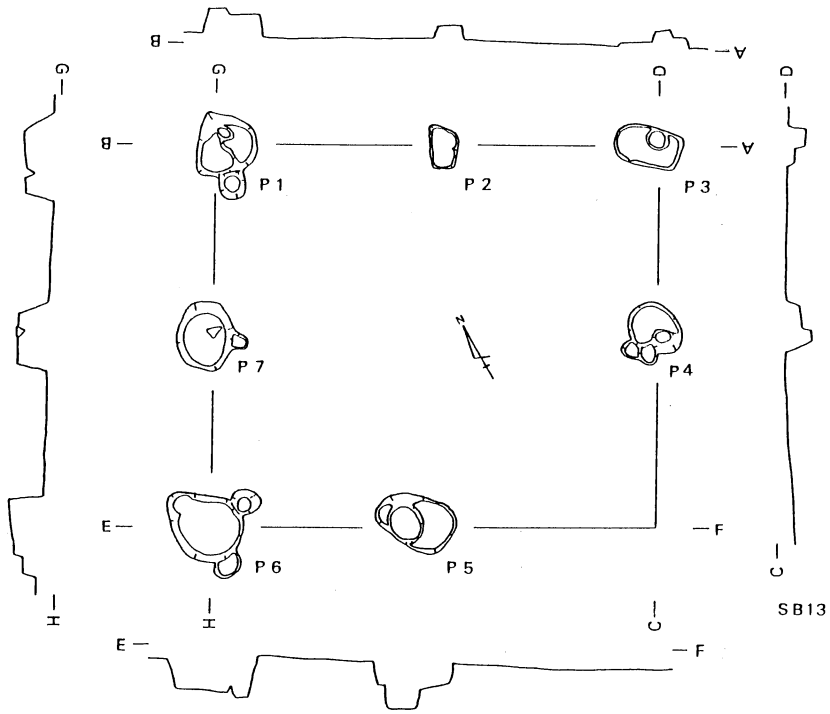


Fig 18. SB 13 · SB 14 实测图

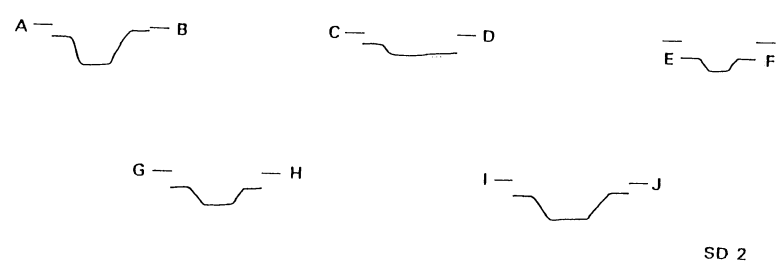
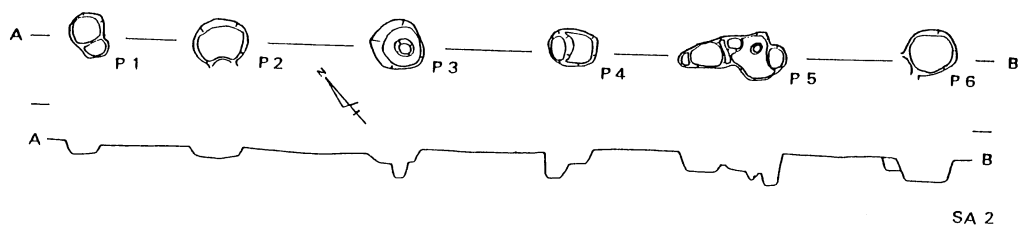
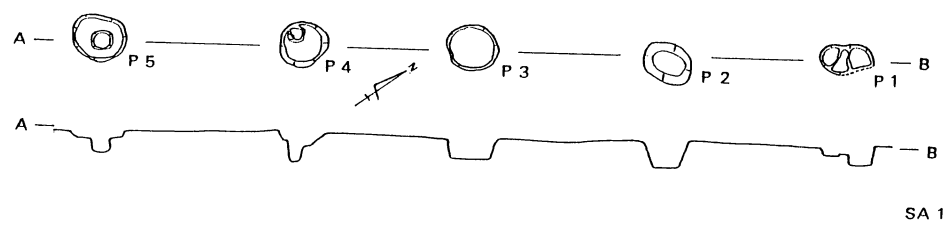
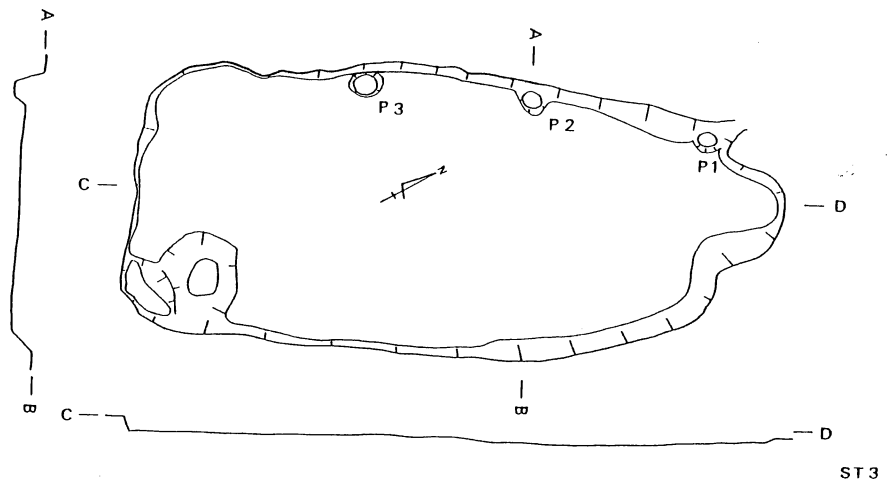


Fig 19. ST3・SA1.2・SD2 実測図及び断面

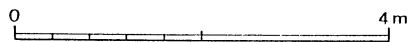
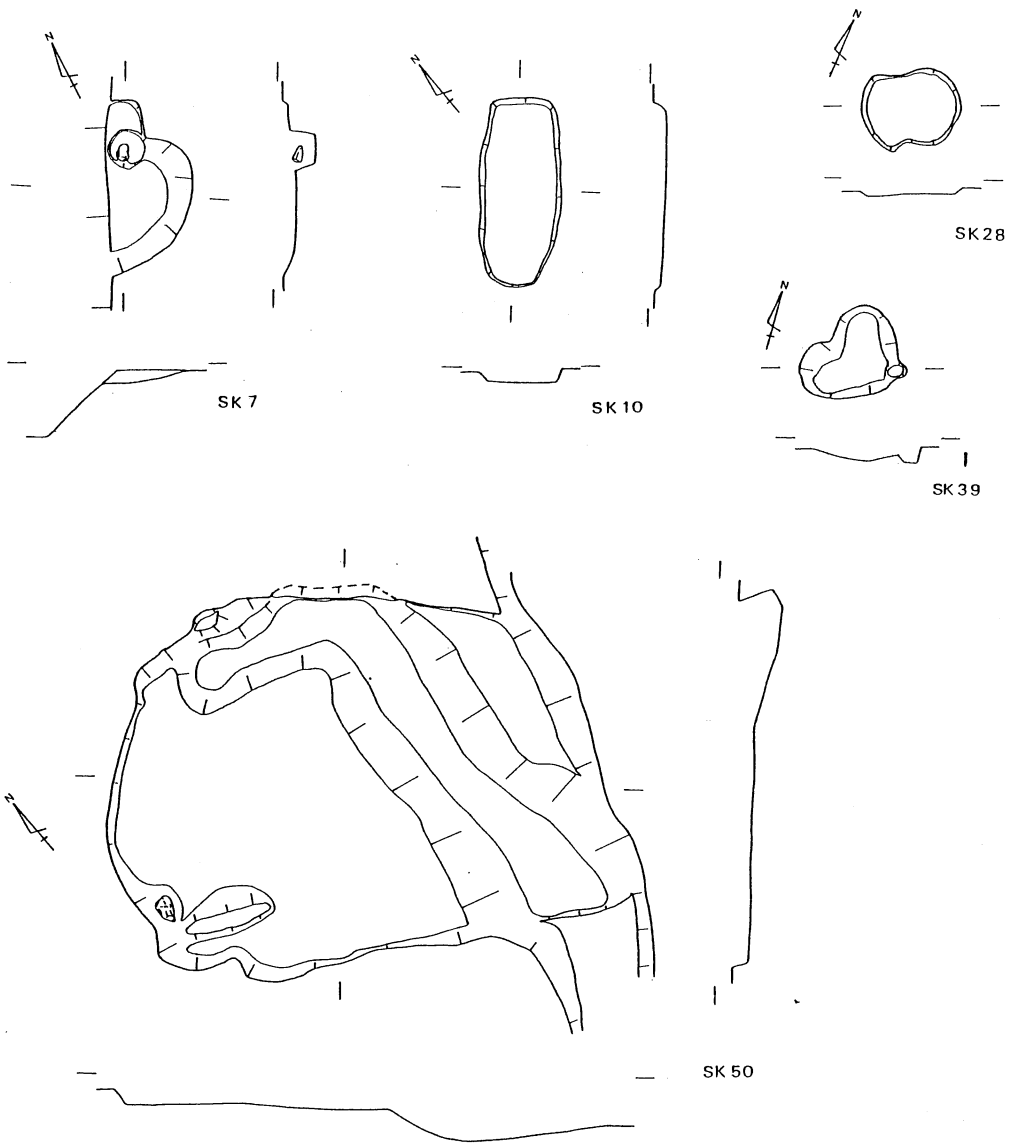


Fig 20. SK 7 · 10 · 28 · 39 · 50 実測図

3. 中・近世

中・近世の遺構は、掘立柱建物44棟、柵3、土塋31基、溝11条を検出した。ここでは各遺構の中で主だったものを摘出して個別に説明する。摘出外の遺構については、一覧表に掲載する。また、遺構の組合せやその変遷については、次章に詳述する。

掘立柱建物(付図2)

SB20・21は、共に梁間1間、桁行3間の建物で、柱穴は径50~60cmを測り、他の建物の柱穴より一廻り大きい。柱穴からの出土遺物は少ないが、SB21のP5からは、土師器椀・杯(136・137)が出土している。両者は、棟方向を共有しているところから同時期の所産と考えられる。またSB20がSD1に切られているところから、SD1に先行する。

SB23は、梁間1間、桁行4間の長屋であり、SB22と切り合っているが、先後関係は不明である。両者共に15世紀に比定できる土器細片が少量出土している。SB23は、SB24・25と棟方向を直交させるところから、SB24・25に関連のある建物の可能性がある。

SB24・25は、共に梁間2間、桁行3間の規模を有し、棟方向は3°向きを異にしている。先後関係は不明であるが、連続する建て替えが考えられる。SB24のP6からは、土鍋(138)が出土している。

SB30は、梁間2間、桁行3間の建物で、柱穴掘り方が50~60cmを測り、他の建物の柱穴よりも一回り大きい。P6より土師器皿(145)の他に、青磁・土師器細片が多量に出土している。SB26・29と切り合っているが、これらに先行する建物と考えられる。

SB32は、梁間2間・桁行3間の身舎の西側に1間分の廂が付く。P7から土師器杯・皿(139・153・143)が、P5より土師器皿(140・141・142)が出土している。SK15と切り合っているが、出土遺物から見る限り、近似する時期の所産と考えられる。

SB39は、梁間2間・桁行2間の建物で、棟方向をSD4に平行させる。南をSA3に画され、SD4の西方に単独で存在している。出土遺物がなく時期決定は困難であるが、SD4と同時期と考えてもよからう。

SB47は、SD4の内側に位置する。梁間2間・桁行5間の規模を有し、掘立柱建物群の中では大型に属する。SB48・49と切り合っており、SB49には先行するがSB48との先後関係は不明である。SB50・51も重複しているが、共に出土遺物がなく時期決定及び先後関係を明らかにすることはできない。

SB52は、梁間1間・桁行2間の建物でP3より白磁碗(154)が出土している。

SB53は、梁間1間・桁行2間の建物でSB52を切っている。各柱穴より15世紀代の土師器細片が出土している。

SB54は、梁間2間・桁行4間の建物で、棟方向はSD4の南北溝(SD4-B)に直交する。各柱穴より15世紀代に比定できる土師器細片が少量出土している。SD8と西の妻側で切

表3. 中世掘立柱建物一覧表

SB No.	梁間(間) (m) × 桁行(間) (m)	棟 方 向	面積 (m ²)	時期	SB No.	梁間(間) (m) × 桁行(間) (m)	棟 方 向	面積 (m ²)	時期
15	2 間 × 1 間 2.7 m × 3.2 m	N-59°-E	8.6		38	1 間 × 3 間 3.95 m × 5.8 m	N-4°-W	22.9	不明
16	2 間 × 2 間 3.8 m × 4.4 m	N-80°-E	16.7		39	2 間 × 2 間 2.6 m × 5.0 m	N-28°-E	13.0	
17	2 間 × 3 間 2.5 m × 3.1 m	N-15°-E	7.8	不明	40	1 間 × 1 間 2.4 m × 3.0 m	N-53.5°-W	7.2	不明
18	2 間 × 2 間 3.25 m × 4.8 m	N-17°-E	15.6		41	1 間 × 3 間 2.6 m × 4.0 m	N-17.5°-E	10.4	不明
19	2 間 × 2 間 2.5 m × 4.0 m	N-65°-W	10.0	不明	42	1 間 × 1 間 1.8 m × 3.0 m	N-65.5°-W	5.4	不明
20	1 間 × 3 間 2.2 m × 6.8 m	N-32°-E	15.0		43	1 間 × 3 間 2.6 m × 5.6 m	N-74°-W	14.6	
21	1 間 × 3 間 2.3 m × 6.8 m	N-32°-E	15.6		44	1 間 × 1 間 1.5 m × 1.5 m	N-32.5°-E	2.3	不明
22	2 間 × 2 間 3.3 m × 4.5 m	N-30°-E	14.9		45	1 間 × 2 間 3.0 m × 4.2 m	N-6°-W	12.6	
23	1 間 × 4 間 1.8 m × 6.3 m	N-24.5°-E	11.3		46	1 間 × 3 間 1.6 m × 4.8 m	N-32°-E	7.7	
24	2 間 × 3 間 3.3 m × 5.4 m	N-66°-W	17.8		47	2 間 × 5 間 4.8 m × 8.3 m	N-56°-W	39.8	
25	2 間 × 3 間 2.9 m × 5.6 m	N-69°-W	16.2		48	2 間 × 2 間 2.8 m × 4.1 m	N-65.5°-W	11.5	不明
26	1 間 × 2 間 2.8 m × 5.9 m	N-46°-W	16.5	不明	49	1 間 × 1 間 1.8 m × 2.3 m	N-8°-W	4.1	
27	1 間 × 1 間 3.0 m × 3.0 m	N-14.5°-W	9.0		50	1 間 × 2 間 4.3 m × 1.9 m	N-65°-W	8.2	不明
28	1 間 × 1 間 3.0 m × 2.6 m	N-84°-W	7.8		51	1 間 × 1 間 1.6 m × 3.1 m	N-78°-W	5.0	
29	1 間 × 1 間 2.0 m × 2.5 m	N-9.5°-W	5.0	不明	52	1 間 × 2 間 2.3 m × 14.1 m	N-25°-W	32.4	
30	3 間 × 2 間 4.2 m × 5.6 m	N-25°-E	23.5		53	1 間 × 3 間 2.3 m × 8.0 m	N-88°-E	18.4	
31	1 間 × 1 間 2.4 m × 2.4 m	N-15°-W	5.8	不明	54	2 間 × 4 間 4.1 m × 8.6 m	N-69°-W	35.3	
32	3 間 × 3 間 5.9 m × 5.7 m	N-31.5°-E	33.6		55	2 間 × 2 間 3.7 m × 3.8 m	N-61°-W	14.1	
33	2 間 × 2 間 2.8 m × 5.2 m	N-59°-E	14.6		56	2 間 × 3 間 3.9 m × 6.6 m	N-67.5°-W	25.7	
34	1 間 × 3 間 3.4 m × 4.7 m	N-77°-E	16.0	不明	57	2 間 × 2 間 2.4 m × 2.4 m	N-9°-W	5.8	
35	1 間 × 2 間 1.4 m × 4.1 m	N-62°-W	5.7	不明	58	1 間 × 2 間 1.6 m × 2.4 m	N-80°-E	3.8	
36	2 間 × 2 間 3.7 m × 4.1 m	N-66.5°-W	15.2		59	1 間 × 2 間 1.4 m × 2.3 m	N-22°-E	3.2	
37	1 間 × 2 間 3.7 m × 3.8 m	N-88°-W	14.1						

り合っているが、先後関係は不明である。

SB55は、梁間2間・桁行2間の建物でSB54に切られている。P5より土師器(146)が出土している。

SB56は、梁間2間・桁行3間の建物でSB54、SB57と切り合っており、SB55とは西の妻側で接している。P3から土師器皿(147)、P2から土師器杯(148)が出土している。

SB57は、梁間1間・桁行2間の建物で、P5から土師器皿(149)が出土している。

SB58は、梁間1間・桁行2間の建物で、P6から土師器皿(150~153)が出土している。出土遺物からSB56に先行する建物と考えられる。

柵 列 (付図2)

SA3は、SD1とSB21の間をN-25°-Eの方向に4間分、約7m走っている。SD1より5°、SB21より7°西へ振っている。柱穴径は20~30cm、深さ20cm、柱間は1.3~2.2mを測る。埋土は濃茶色粘質土である。出土遺物が見られないので時期を決定することができないが、埋土から判断してSB21よりも後出すると考えられる。

SA4は、SD4南西コーナーから西に向かってSD3に直交するように伸びている。径30~40cmの柱穴が、2.0~4.4mの間隔で6間分、N-64°-Wの方向に15.2m伸びている。出土遺物が僅少であり、時期を決定することは難しい。

SA5は、SB47の西隣りにあり、梁方向とほぼ平行する形でN-35°-Eの方向に5間分10.8m伸びている。柱穴径は20~30cm、深さ20cm、柱間は1.6~3.0mを測り不揃いである。柱穴より14世紀代に比定することができる土師器細片が出土している。

SA6は、調査区の北東隅にありSD9の南をN-70°-Wの方向に6間分21.6m伸びている。柱穴径は20~30cmを測り、深さ10~20cm、柱間は2.2~4.7mで不揃いである。柱穴から14世紀に比定できる土師器細片が少量出土している。

土 塋 (付図2、Fig 21・38)

中・近世の土塋は、表-4に示すように30基を数える。ここでは、出土遺物や埋土の堆積状況から時期や性格を明らかにすることができるものや、遺物の共伴関係を明らかにする上で重要なものを摘出して説明し、他の土塋については一覧表(表-4)に譲りたい。

SK11は、SD1の内側にある。不整楕円形のプランを呈し、長軸1.55m、短軸1.4m、深さ50cmを測る。床面は水平で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は、I層：黄色粘質土に茶色粘質土がブロック状に入る。II層：濃茶色粘質土、III層：濃茶色粘質土に黄色地山層がブロック状に入る。IV層：濃茶褐色粘質土、V層：淡茶色粘質土、VI層は地山が崩れ落ちたものである。遺物は、V層の上層とIV層から多量に出土している。これは、V層まで埋まった段階で一気に多量の土師器が廃棄されたもので、出土状況を詳細に観察することによって、南から投げ込まれたことが判明している。IV~V層から土師器椀・杯・皿(155~184)、土錘(300)青磁、白磁(185~187)が出土している。

SK12は、SD1の内側で、SK11の南西約3.5mのところにある。不整楕円形のプランを呈し、長軸1.2m、短軸1.15cm、深さ45cmを測る。床面は、ほぼ水平を保っているが、中央部はわずかに凹んでいる。断面形は逆台形をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は、I層：濃茶色粘質土、II層：暗茶色粘質土、III層：暗茶色粘質土に地山の黄色シルト層がブロック状に入っている。遺物は、I層から多量の、II層から少量の土師器が出土している。III層上面から青磁碗(190)・瓦質甕(6)、III層中より瓦質羽釜(191)・床面より土師器皿(188)が出土している。II層までのものは、時に多量の土師器が廃棄されたものとみられる。また、床面出土の土器と埋土出土のものとの時間差はほとんどみられない。

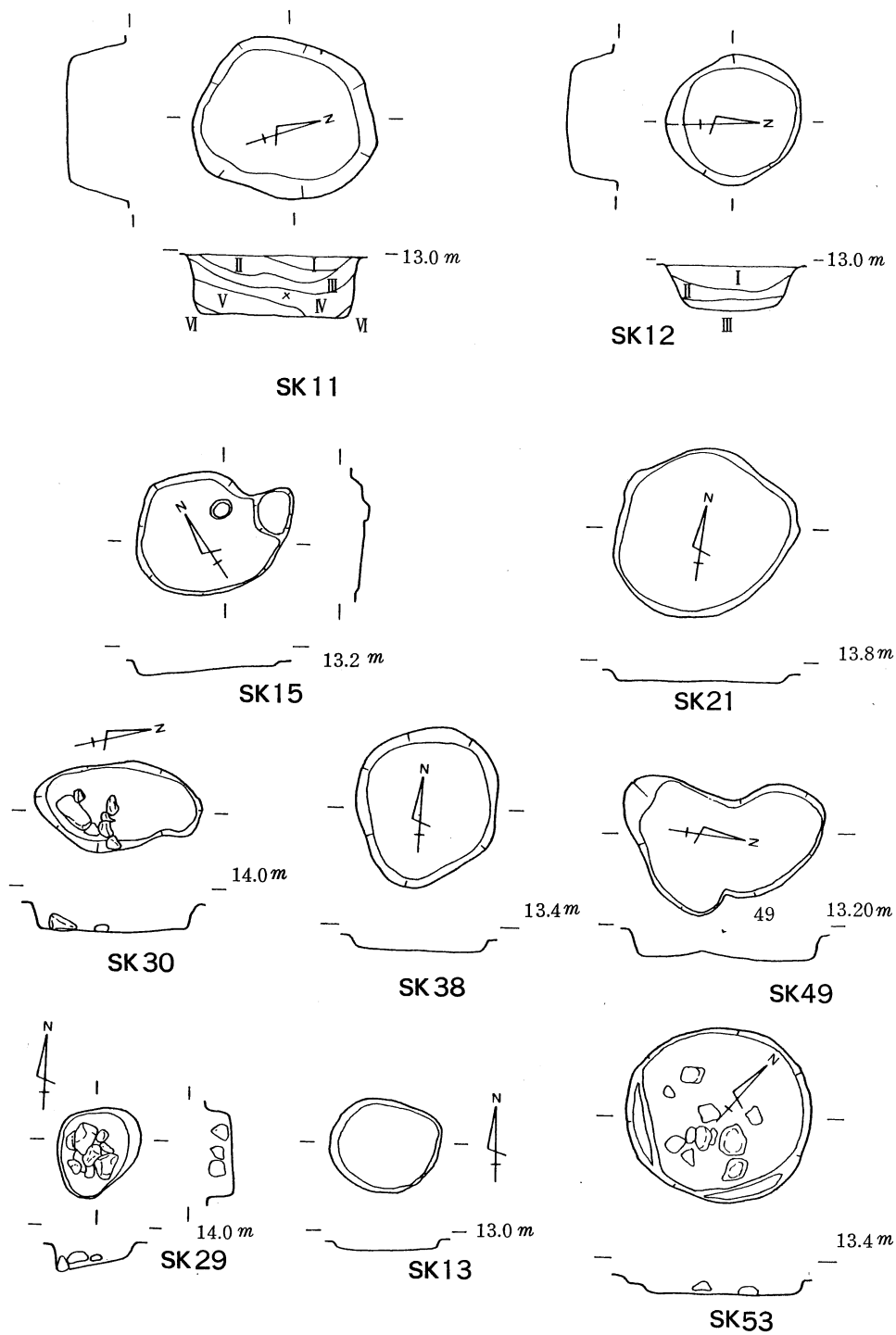


Fig 21
中近世土坑实测图

中世：SK 11.12.13.15.
21.49.
近世：SK 29.30.53



SK13は、SK12の南に位置する。隅丸方形のプランを呈し、長軸0.95m、短軸0.85m、深さ10cmを測る。断面は逆台形を呈し、床面は水平な面をなす。埋土は、濃茶色粘質土の単純一層で、出土遺物は土師器小片が数点出土しているが図示できるものはない。

SK15は、SK13の東にあり、SB32と先後関係にある。不整形のプランを呈し、壁の一部が東に突出している。床面は水平な面をなし深さ15cmを測り、東の突出部は床面よりも一段高くなっている。また、床面東部に径20cm、深さ5cm前後の小ピットがある。埋土は、濃茶色粘質土単純一層で、土師器、土錘(192~197・299)等が出土している。

表4. 中近世土壌一覽表

SKNo.	長軸(m)×短軸(m)	深さ(cm)	軸方向	SKNo.	長軸(m)×短軸(m)	深さ(cm)	軸方向
1	2.25 × 1.37	10.0~20.0	N-57°-W	31	1.85 × 1.65	50.0	N-23°-E
5	1.5 × 1.5	15.0	N-49°-E	32	3.75 × 1.3	30.0~35.0	N-45°-W
9	1.75 × 0.8	15.0~30.0	N-80°-E	33	1.3 × 0.6	5.0~10.0	N-0°
11	1.55 × 1.4	50.0	N-14°-E	34	1.3 × 0.8	7.0	N-75°-W
12	1.2 × 1.15	45.0	N-90°	35	0.9 × 0.8	10.0	N-86°-W
13	0.95 × 0.85	10.0	N-90°	36	1.0 ×	20.0	N-0°
14	0.95 × 0.9	12.0	N-86°-E	38	1.45 × 1.2	10.0	N-90°
15	1.2 × 1.0	5.0~15.0	N-55°-W	40	2.1 × 0.85	15.0~40.0	N-42°-E
16	2.1 × 1.1	5.0~10.0	N-43°-W	42	2.35 × 1.1	15.0~35.0	N-71°-E
20	0.9 × 0.8	5.0~10.0	N-76°-E	44	2.75 × 0.8	25.0~40.0	N-27°-E
21	1.6 × 1.5	10.0	N-77°-E	49	1.65 × 1.1	15.0~23.0	N-9°-W
22	1.75 × 1.15	35.0~50.0	N-80°-W	51	0.8 × 0.6	5.0	N-40°-W
27	1.65 × 1.05	10.0	N-68°-E	52	1.9 × 0.7	15.0~30.0	N-90°
29	0.8 × 0.7	15.0~20.0	N-0°	53	1.6 × 1.5	15.0	N-53°-E
30	1.4 × 0.75	25.0	N-10°-E	55	1.0 × 0.7	20.0	

SK21は、調査区の東端部に位置する。不整楕円形のプランを呈し、長軸1.6m、短軸1.5m、深さ10cmを測る。床面は水平な面をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は濃茶色粘質土で、土師器細片が少量出土している。SK11と同時期と考えられる。

SK29は、調査区東部南端にあり、SK30と近接している。不整形のプランを呈し、長軸80cm、短軸70cm、深さは15~20cmを測る。床面は西壁側が低く、東壁側が高くなっている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、灰茶色粘質土単純一層であり、床面及び床より5cm程浮いて、10~30cm大の河原石が置かれている。これら河原石にはさまれるようにして、天目茶碗(198)が出土している。

SK30は、不整楕円形のプランを呈する。長軸1.4m、短軸0.75m、深さ25cmを測る。断面は逆台形を呈し、床面はほぼ水平な面をなすが、中央部がわずかに凹む。埋土は灰茶色粘質土で、SK29と同様に、床面及び直上に河原石が置かれている。

SK38は、SD4の西方に位置する。隅丸方形のプランを呈し、長軸1.45m、短軸1.2m、深

さ10cmを測る。床面は水平をなし、壁は斜めに立ち上がる。埋土は濃茶色粘質土で、弥生前期土器片3点と土師器小片が出土している。

SK49は、調査区南端に位置し、SD3に近接している。不整形プランを呈し、長軸1.65m、短軸1.1m、深さ15~23cmを測る。床面は凹凸が見られ、壁は斜めに立ち上がる。埋土は茶灰色粘質土で、埋土中より備前播鉢(200)、同壺(201)が出土している。

SK53は、調査区の南部にある。楕円形のプランを呈し、長軸1.6m、短軸1.5m、深さ15cmを測る。床面は水平な面をなし、壁は斜めに立ち上がるが部分的に2段に掘られている。埋土は灰茶色粘質土単層で、床面及び床直上に10~30cm大の河原石が置かれている。遺物は全く見られない。

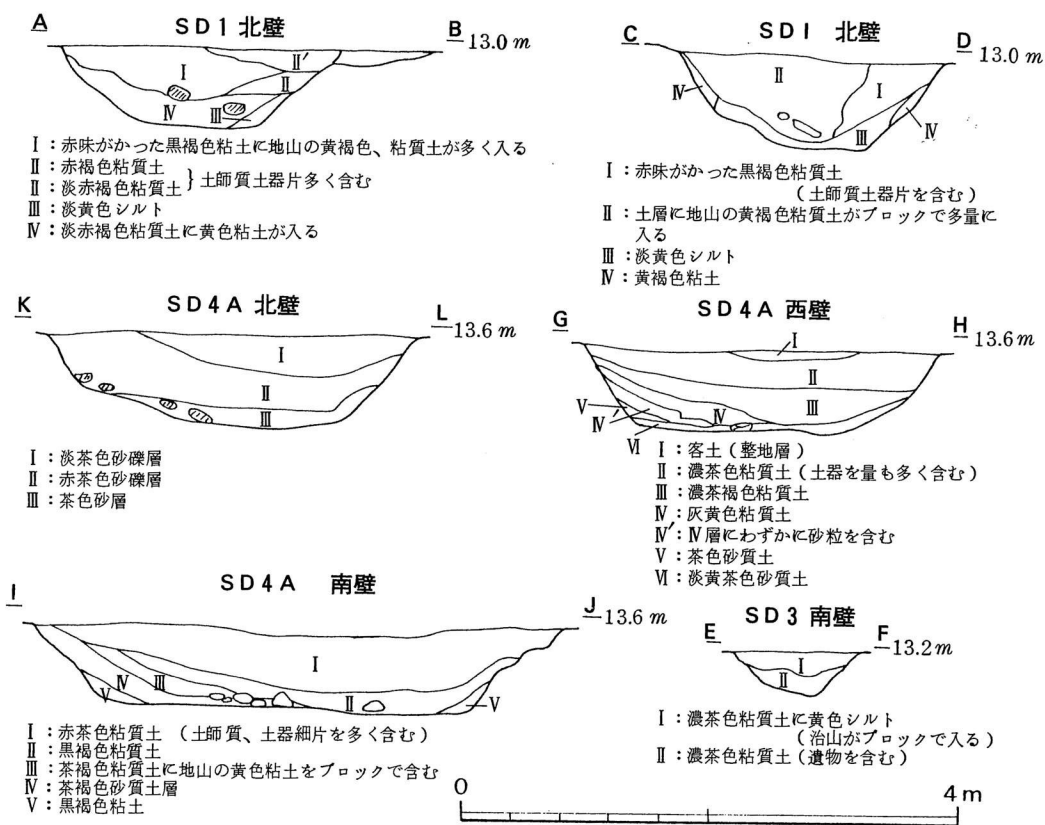
溝 (付図2、Fig 22)

SD1は、調査区の西部をN-30°-Eで直走する溝である。北端は調査区外に出ているが、南で直角に東南方向に向きを転じている。南端コーナーから北端までの長さは48m、溝幅は1.8~2.4m、深さ72cmを測り、断面はU字形をなしている。床面の標高は12.2m前後で勾配はほとんど見られない。埋土は、I~VI層で各層から多くの土師器片等が出土している。埋土の堆積状況の観察から注目すべきことが認められるので、以下詳述する。III層の黄色シルト層については、壁面を形成する地山層が自然堆積の状態で埋まったものと考えられるが、上層に堆積している埋土は、濃茶色粘質土の中に多くの黄色シルト層をブロック状に含み、しかも断面を見ると自然の状態で堆積したものと考えるのが難しい。また、I・II・IV層の中には、大小の河原石が多量に投げ込まれている。これらの河原石は、I・II・IV層と同時に入ったものと考えられる。

遺物の出土状況を見ると、床面上やIII層中には完形やそれに近い土師器が多く検出されたのに対して、I・II・IV層中からは細片のみが混入されている。床面及びIII層中の遺物は、SD1が機能していた時期のもので、上層のそれは人意的に埋め戻された時に混入していたものと考えられる。しかしながら、床面、III層中の遺物の時期と埋め戻された時期との時間的な差はほとんどないものと考えられる。なお、SD1は、流水をみない溝と考えられる。

SD3は、調査区のほぼ中央部に位置し、SD1と同じ方向に走っている。南端で2つに分かれ、一方はそのまま直進するが、他方は東に直角に向きを変えている。確認延長44.8m、幅1.0~1.2m、深さ10~30cmを測り、断面は逆台形状を有している。床面の標高は南端で13.01m、北端で12.9mを測り、わずかに北が低くなっている。埋土はI・II層からなり、埋土中より備前播鉢(235)、磁器(236・238・239)などが出土している。

SD4は、調査区中央部にあり、L字状のカーブを描く大溝であるが、SD4A・SD4Bの大小2つの溝からなっている。SD4Aは、調査区東端から19m北西に延び、そこから直角に向きを転じN-30°-Eで3.48m直走し調査区外に出ている。幅2.6~3.8m、深さ60~80cmを測り、断面はU字型をなす。SD1と同様に掘立柱建物群を囲繞する大溝であるが、埋土



F i g 22 SD1・SD4A・SD3 セクション図

の堆積状況は大きく異なっている。埋土は、コーナー部分 (I-J) で I~V 層、東西部分 (H-G) I~VI 層が各々自然堆積の状況を示している。北部 (K-L) では、砂礫 (I~III 層) の堆積が見られるが、これは香宗川の氾濫による流れ込みと考えられる。また、SD4A の床面には一部を除いて 5~40cm 大の河原石が敷き詰められている。出土遺物は、各層より弥生土器 (267)・土師器 (240~261)・須恵器 (263・269)・青磁 (265・260)・白磁 (268) 等が多量に出土している。出土遺物の中に、弥生、古代等 SD4 に先行する時期の遺物が見られるのは、SD4 が古代の遺物包含層を掘り込んでおり、SD4A の壁上部が古代の遺物包含層であるからに他ならない。

SD4B は、A の南東端より直角に北に 6.8 m 延び、さらに直角に西方に屈曲して 9.2 m 延びる。幅 0.8~1.6 m、深さ 17.0cm を測る。埋土は濃茶色粘質土単層一層で、遺物はほとんど見られない。SD4B は、SD4A の南辺にあって升形を造り出している。なお、SD4A・B 共に空堀であったとみてよからう。

SD5 は、調査区南端から N-30°-E に 5.6 m 伸び、SD4 と切り合っているが、先後関係は不明である。幅 50~60cm、断面は U 字形をなし、埋土は茶褐色粘質土単層一層で、遺物は見

られない。床面南端の標高は13.37m、北端の標高は13.24mを測り、南から北に流れていたものである。

SD 6は、SD 3の南端にある。SD 3を切っているが、大部分SD 3と重なっている。長さ6.4m、幅1.2m、深さ10~15cmを測る。埋土は茶灰色単純一層で、遺物は伊万里(270)・備前播鉢(271)が出土している。

SD 7は、調査区東部にあり、N-23°-Eで直走しSD 9・SD 12を切っている。長さ37.6m・幅30cm・深さ20~30cmを測り、断面は箱形を呈す。埋土は茶灰色粘土の単純一層で、遺物は、備前播鉢(272)・明染付(274)・青磁(275)が出土している。

SD 8は、調査区東部にあり、SD 9を切っている。水溜状に広がった南端部からN-24°-Eに17.6m伸び調査区外に出ている。幅0.6~1.3m・深さ10~20cmを測る。床面はU字形を呈し、床面のレベルは南端で標高13.46m、北端で13.5mを測る。埋土は黒褐色砂質土が詰まっており、南から北に向かって流れていた排水的な溝と考えられる。出土遺物は、青磁(276)が出土している。

SD 9は、調査区の北東端にあり、SD 8・7・12と切り合う。N-63°-Wで西方に28.8m走った後、南へ直角に屈曲し10.4m程延びる。幅0.8~1.8m・深さ20~26cmを測り、断面はU字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、出土遺物は埋土中より土師器(278~281)・瓦器鍋(282~285)が出土している。

SD 10・11は、調査区中央部にある。SD 10は、SD 4とSD 3に直交し、N-65°-Wで11.6m延びる。西端で南にカーブしSD 11と切り合っているが、先後関係は不明である。幅50~60cm・深さ7~20cm、断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、瓦器高坏(286)が出土している。SD 11は、SD 3に直交する。N-65°-Wで長さ9m延び、幅80cm、深さ10~15cm、断面はU字形をなす。埋土は、黒褐色粘質土単純一層で、土師器鍋(287)が出土している。

SD 12は、調査区東部にある。N-20°-Eで27m走り、調査区外に出ている。SD 7に切られており、北端でSD 9を切っている。幅1.3m、深さ10~30cm、断面はU字形を呈す。床面南端の標高は13.49m、北端は13.36mを測る。埋土は茶褐色粘質土単純一層で埋土中より、土師器釜(291)・備前(288・292)・唐津碗(290)・青磁碗(289)・石臼(304・305)が出土している。

第2節 遺物

1. 縄文時代～弥生時代

ST1 (Fig 23-9~14) 9は壺底部である。平底の厚い底部で、外面は叩きの後、縦方向のハケ調整を施す。内面はハケ調整後、丁寧なヘラ磨きを施す。一部に黒斑が見られる。10は鉢である。底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部に到る。口唇部は面をなす。内外面に右下りのハケ調整をなす。11は高杯である。内面に絞り目があり、脚頭部内面には径7mm前後の棒状工具による穿孔がある。また中位内面には径8mmの孔を外から内へ穿つ。12, 13は甕である。12の口縁部は丸く外反し、内面に横方向のハケ調整が見られる。胴部外面は全面叩きの後、木理の細い原体によるハケ調整を施す。胴部内面には右下りの荒いハケ調整後、右上りのヘラ削りを頸部直下まで施す。上胴部に黒斑が見られ、また中位以下はススけている。13の外面は全面叩きを施した後、木理の細い原体で縦方向のハケ調整をなす。下胴部と底部に黒斑が見られる。全面ススけて部分的に紅く変色している。以上の他に土器底部(14)がある。

ST4 (Fig 23-24-15~26) 15は壺である。口縁部はラップ状に外反し、端部は丸くおさまる。内外面ともハケ調整があったと思われるが、器表の剝離が激しく十分な観察はできない。16は鉢である。外面は叩き調整、内面は右下りのハケ調整を施す。口唇部は面をなす。17~26は甕である。口縁部が丸く外反するもの(21)と、稜をもって「く」の字状に外反するもの(17~20, 22, 25)がある。口唇部は強いナデをもって凹状の面を持つ。外面は、共通して全面叩き調整を施し、口縁部を叩き出す技法が17, 18, 20, 22において顕著である。17, 20~22, 24, 25は、ハケ調整を行い、叩き目を消している。その範囲は、17が胴部上半から口縁部まで、21が上胴部から口縁部まで、及び下胴部、20, 22, 24, 25が下胴部である。なお24は、外底に叩き目が残る。内面は、ほとんどが右下りのハケ調整を施し、17, 21, 22, 24においては、指頭による強いナデ調整が見られた。また口縁部内面にハケ調整をなすもの(17, 18, 20~22)もある。他にススの付着するもの(18, 20, 21)、黒斑のあるもの(24, 26)、一部紅く変色するもの(20)などが観察できる。

SK24 (Fig 24-27) 精製の深鉢である。上胴部で内側に短く屈曲し、口縁部は直線的に外方に立ち上がる。口唇部は水平な面をなす。内外面に全面横方向のヘラ磨きを施すが、内面は下地に横位の条痕が残る。暗茶色の色調に全面ススがかかっており、また丹痕が2カ所確認できる。

SK2 (Fig 24-26-28~31, 50, 51) 28は壺である。内外面共に木理の細いハケ調整を施す。内面は部分的にヘラ磨きを行う。底部及び下胴部外面に黒斑が見られる。29~31は甕である。29は口縁部外面に指頭圧痕がある。口唇部は面をなす。外面は右上りで細い叩き調整、内面は極めて荒いハケ調整を施す。30の外面は粗雑な縦方向のハケ調整、内面は外面より木理の荒いハケ調整を施す。31の外面は叩き調整をなすが、部分的にハケにより消している。また

底部外面も叩き調整を行う。底部内面は指頭で強く円形にナデをなす。胴部内面は板状工具によるナデ調整が観察できる。底部及び下胴部の一部に黒斑がある。50は砥石である。長さ20.8 cm、幅12.5 cm、厚さ3.5 cm、重量1,530 gを測る。不正四辺形を呈する扁平礫で、表面のみを砥面として使用する。中央部が僅かに凹んでいる。石質は砂岩である。51は叩石である。長さ5.6 cm、幅8.7 cm、厚さ3.9 cm、重量490 gを測る。河原石を利用したもので、表面は滑らかな面をもつ。片面の半分が斜めに剝離し、剝離部分の端部に僅かな使用痕が見られる。石質は砂岩である。

SK6 (Fig 24-32, 33) 32は壺頸部である。胎土は0.5~1 mm程の砂粒を多く含む薄手の土器である。頸部下端に列点文が認められ、頸部外面には棒状工具による縦方向の太い沈線が走る。33は壺胴部である。外面は右下りのハケ調整後、丁寧なヘラ磨きを施す。また3条のヘラ描き沈線を有す。内面は木理の細い原体によるハケ調整後、部分的にヘラ磨きを施す。

SK37 (Fig 24-34, 35) 34は壺である。幅1.5 cmの粘土帯貼付口縁を有し、口縁部外面は櫛描流水文を4帯認める。内面は縦方向のナデ調整を施す。35は甕である。口唇部はハケ状原体による刻目が施文されるが、全周はしない。外面は縦方向のハケ調整後、2条のヘラ描き沈線が走る。また口縁部外面上部はナデ調整を施す。内面はヘラ磨きを行う。

SK43 (Fig 24-36, 37) 36, 37は共に壺である。36は口縁部に幅2.1 cmの粘土帯を貼付し、指頭で押圧している。上胴部外面は縦方向のハケ目を下地に、全面ナデ調整を施す。また部分的にヘラ磨きをなす。口唇部はハケ状原体による刻目を有す。口縁部内面及び上胴部内面は横、右下りのハケ調整を施す。指頭圧痕が顕著である。37の外面にはハケ調整が僅かに見られる。内面には指頭圧痕がある。

SK48 (Fig 25-38~43) 38~40は壺である。38の頸部外面は縦方向のハケ調整後、棒状工具による太い沈線を施す。口縁部外面は横方向のナデ調整をなす。内面は横方向にハケ調整の後、ナデ調整で消している。39は口縁部外面に横方向の強いナデ調整を施し、ハケ目が消えている。頸部外面にはハケ調整後、断面カマボコ状の3条の沈線が走る。40は胴部体面に右下りのハケ調整後、横方向のヘラ磨きを行う。また3条の沈線を認める。41は甕である。口縁部は如意形に外反し、口唇部には刻目を施す。頸部外面には、4~5条のヘラ描き沈線を配す。口縁部内外面は横方向の強いナデ、胴部外面は縦及び右下りのハケ、内面は木理の細い原体による横及び縦方向のハケ調整が観察できる。42は鉢である。口縁部は短く外反し、内側に肥厚する。口唇部は広い面をなす。頸部外面は縦方向のハケ調整後、横方向にナデ消しをする。以上の他に土器底部(43)がある。

P4 (Fig 25-44~46) 44~46いずれも壺である。44は肩の張った上胴部に外反する頸部が付く。頸部外面に縦方向のハケ調整後、10条以上のヘラ描き沈線を施す。さらに3段にわたって列点文を配す。またハケ調整は胴部外面まで及ぶ。45の口縁部は大きく外反し、口唇部は面をなす。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整を施す。46は大型の壺で、外面は下胴部ま

で縦方向のヘラ磨きをかける。また胴部下半に擦痕のようなナデが見られる。底部は接合部で剝離しているが、ヘラによる圧痕が残る。内面は木理の細い原体によるナデ調整をなす。擬口縁を認める。

P1 (Fig 25-47, 48) 47, 48共に壺である。47は口縁部に幅 2 cm の粘土帯を貼付し、指頭で押圧している。また縦方向にハケ調整を施し、部分的に横方向にナデ消す。内面は口縁部にハケ調整、頸部に縦方向の指頭によるナデがある。48は球形の胴部に長い頸部を有する。口縁部は外反し、頸、胴部に 6 帯の櫛描簾状文を配し、端部は末端扇形状をなす。ハケ調整は、口縁部外面に縦方向、口縁部及び頸部内面に横方向へ施される。胴部内面は指ナデが顕著である。

P5 (Fig 25 - 49) 49は小型の鉢である。丸味を帯びた平底の底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部に到る。外面は縦位の亀裂が多く走り、調整観察は不可能である。内面は右下りのやや荒いハケ調整が見られる。

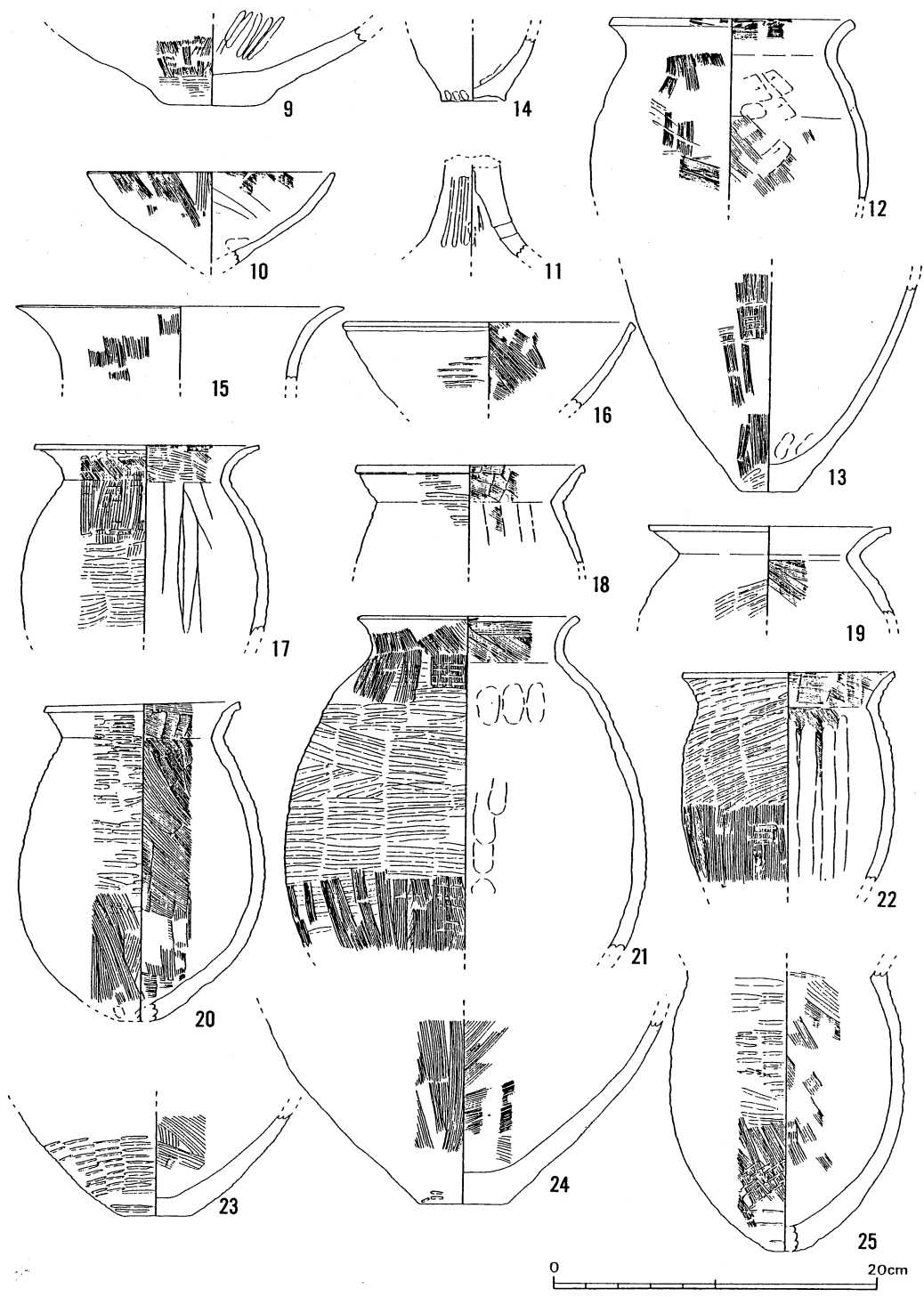


Fig 23. ST 1. 4 出土遺物実測図 (ST 1 : 9~14 ST 4 : 15~25)

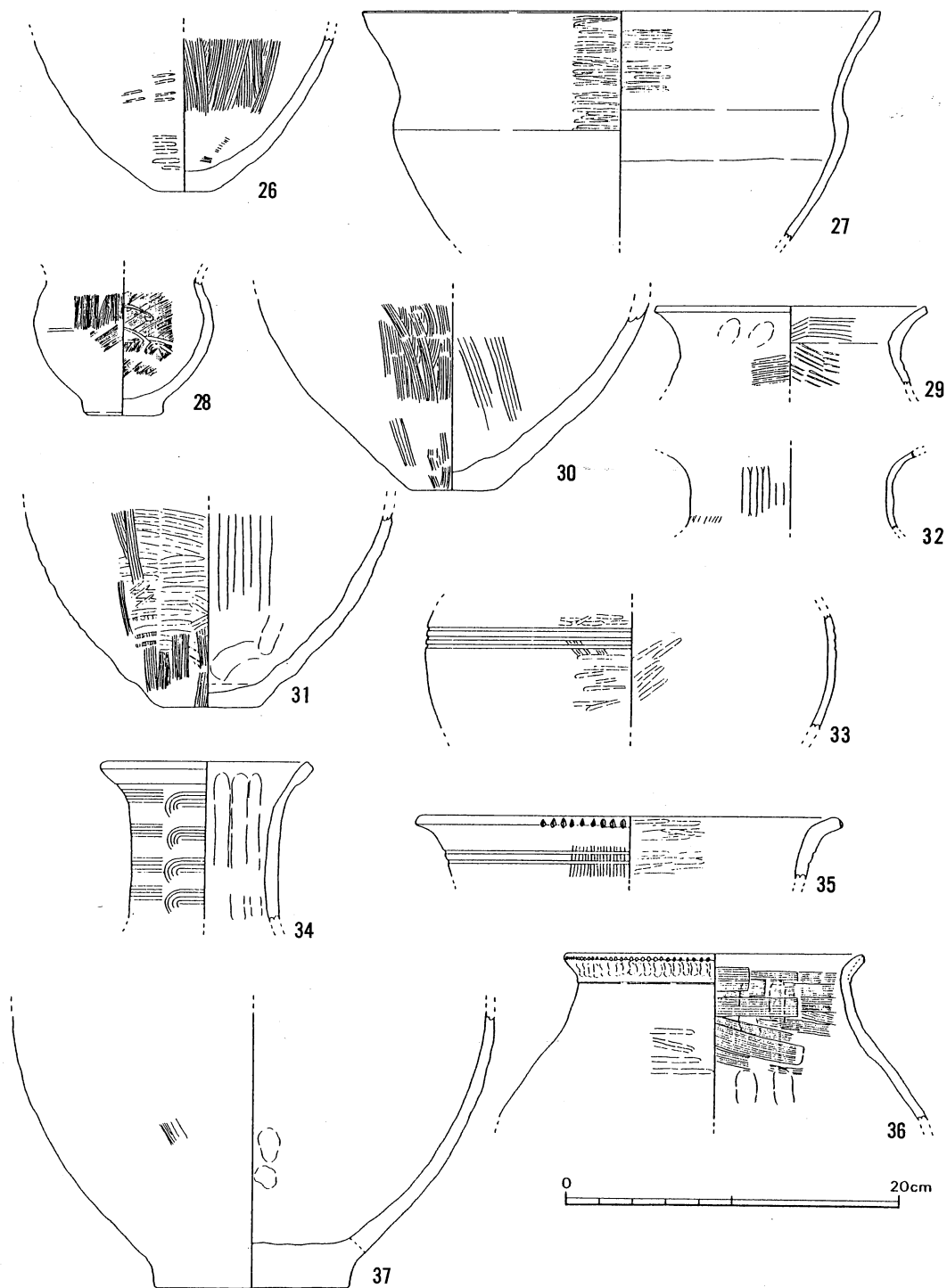


Fig 24 ST 4・SK 2・6・24・37・43出土遺物実測図
 (ST 4 : 26 SK 2 : 28~31、SK 6 : 32・33)
 S T 24 : 27 SK 37 : 34・35 SK 43 : 36・37)

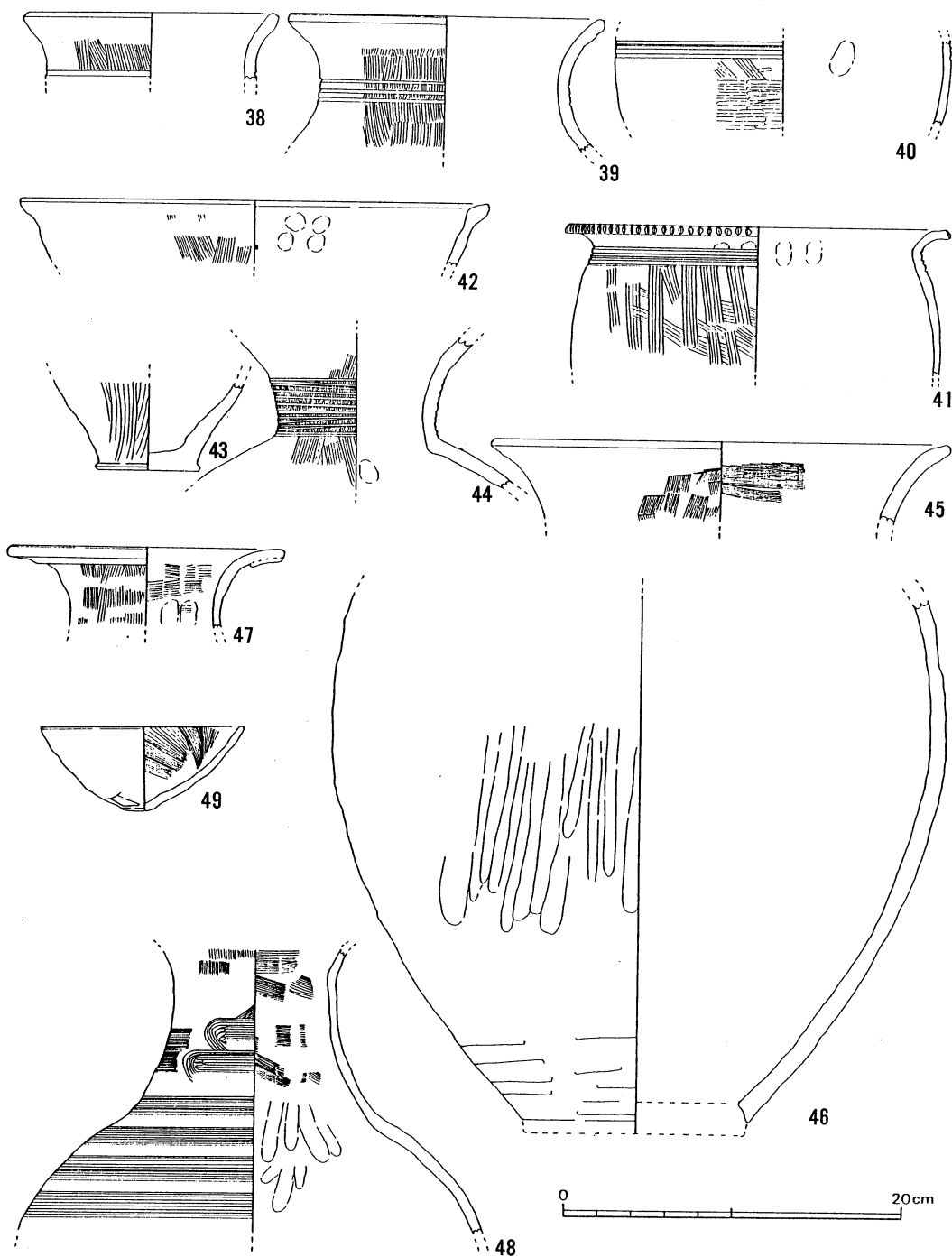


Fig 25 SK48、P1・P4・P5 出土遺物実測図
 (SK48:38~43、P1:47・48、P4:44~46、P5:49)

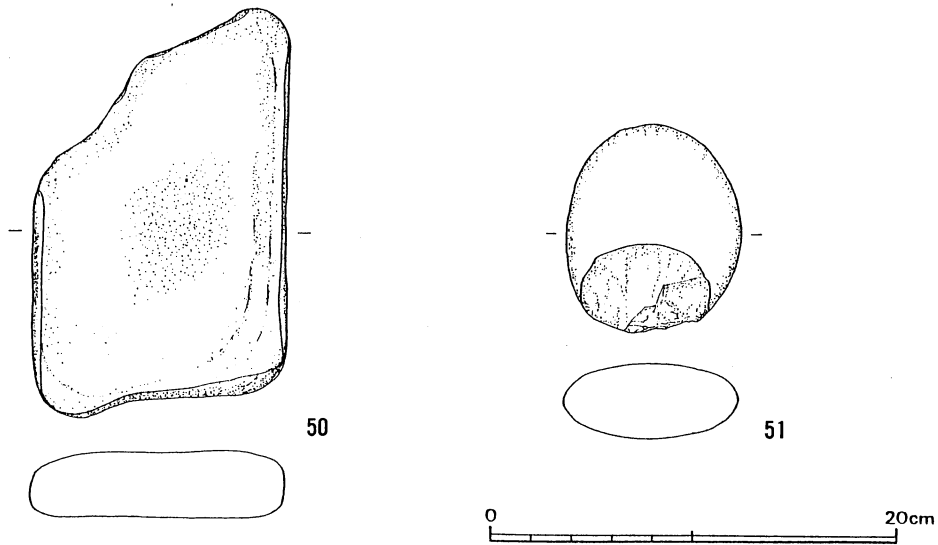


Fig 26 SK 2 出土遺物実測図

2. 古 代

今回の調査で出土した古代の遺物には、土器、土製品、石製品がある。以下、各遺構から出土した遺物の概要を述べることにする。なお須恵器杯の蓋については口径によって蓋Ⅰ（11.6～16.0 cm）、蓋Ⅱ（19.0～23.0 cm）とに便宜上分類した。

掘立柱建物

SB 1（Fig 27-53, 64）53は、土師器で底部を欠損している。半球状の体部を有し、外面にクロロ目を残す。口縁部は外反し、口唇部を丸くおきめる。64はゆるやかに外反する須恵器壺の口縁部である。

SB 2（Fig 27-55）55は、須恵器蓋Ⅰである。頂部は僅かに凹むが欠損している。口縁部外面は、外傾する面をなし、端部は丸くおさめる。なお他に土師器片（132）が出土している。

SB 3（Fig 27-62, 65, 66, Fig 30-133, 135）62は、土師器高台付盤である。体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部は僅かに内側に屈曲する。口唇部は丸味をおびた面をなす。全面ヨコ方向のヘラ磨き調整を施す。65は、土師器羽釜である。僅かに内傾して立ち上がり口縁部に到る。口唇部は丸く収める。鏝は断面長方形の大きなものである。胴部外面以外横方向のナデ調整を施す。66は、土師器甕である。口縁部内面は横方向のハケ調整の後に、内・外面に横方向の強いナデ調整を施す。口唇部はナデにより凹む。なお他に石鏃（133）、砥石（135）が出土している。

SB 5（Fig 27-54）54は、須恵器壺の蓋である。口縁部は下方へ長く張り出し、内・外面とも横ナデ調整が施され、内・外面ともに黝黒色の自然釉を持つ。

SB 6（Fig 27-60）60は、須恵器杯である。僅かに内湾して立ち上がり口縁部に到る。

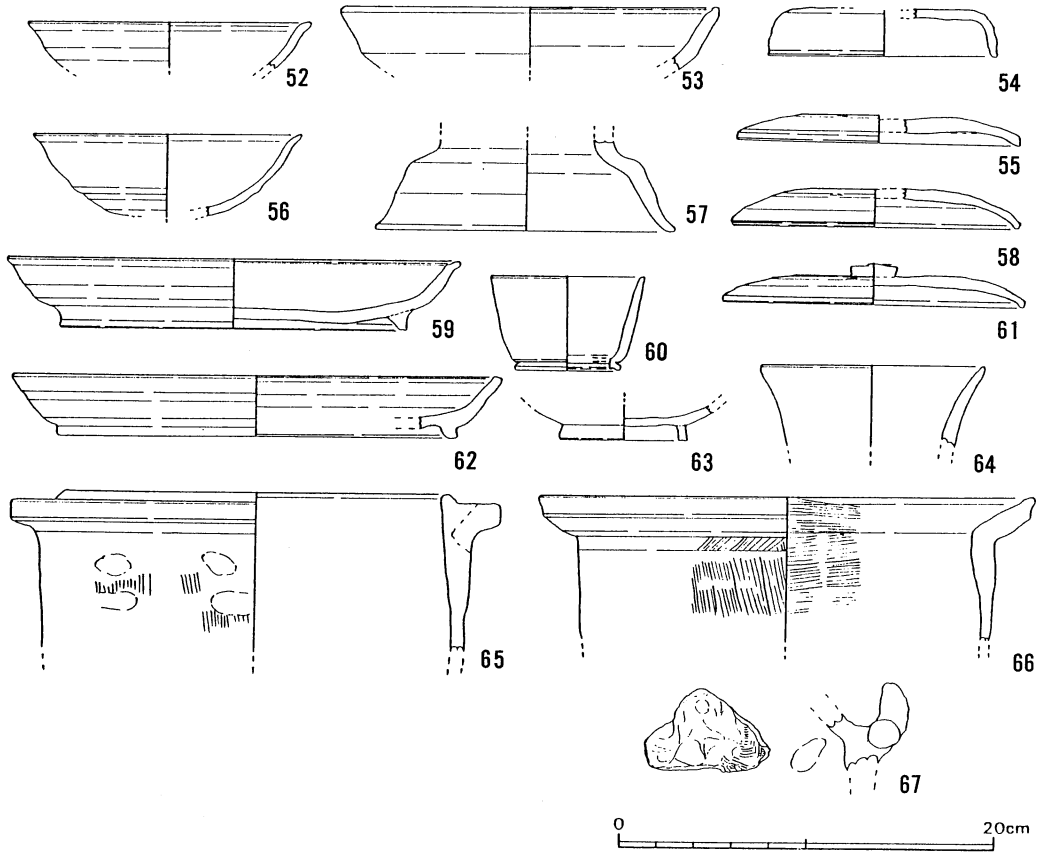


Fig 27 SB1~3・5・6・8 ST3・SA2 (SB1: 53, 64, SB2: 55, SB3: 62・65・89・133・135
 出土遺物実測図 (SB5: 54, SB6: 60, SB8: 254, SA2: 52・56・63
 ST3: 58, 59, 61, 67)

口唇部は丸くおさめる。底部には、小さな高台が付く。内・外面ともに横ナデ調整が施され、外面に緑色の自然釉を持つ。

SB 8 (Fig 27- 57) 57 は、ハの字状に開き、端部はやや外反する土師器器台とみられる。

堅穴住居

ST 3 (Fig 27-58, 59, 61, 67) 58, 61 は、須恵器蓋Ⅱである。58の端部外面は僅かに凹状をなす。頂部外面は左から右方向のヘラ削りが施され、内面の端部は強い横ナデ調整であるが、他は不定方向のナデ調整を施す。61は、僅かに中央が高い扁平なつまみをもつ。外面頂部は左から右方向のヘラ削りの後、内・外面共に丁寧な横ナデ調整が施されている。59は、土師器高台付盤である。体部は直線的に外方に立ち上がる。口縁端部をつまんで横ナデ調整を施し、内・外表面は全面丁寧なヘラ磨きを施す。67は、土師器甕の把手である。

柵 列

SA2 (Fig 27-52, 56, 63) 52, 56共に土師器椀である。半球状の体部を有し、口縁部は外反し口唇部は丸くおさめる。体部外面にロクロ目を残す。63は、土師器高台付の底部である。高台は外方に張り出し気味に付き、畳付けは僅かに凹状をなし、内外面は強い横ナデ調整が施されている。底部外面もナデられているが糸切痕を認める。

土 壙

SK10 (Fig 28-68) 68は、土師器高台付椀である。高台は太く外方に張り出し断面は三角状を呈す。畳付けは幅広い。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。外面には僅かにロクロ目がみられる。焼成は良好で、色調は黄白色を呈し、胎土は精選された粘土で砂粒を含まない。

SK50 (Fig 28-69~99) 69~74は須恵器杯である。69~73は、底部より丸味をもって立ち上がる。70は、僅かに内湾気味に立ち上がり、底部外面に粘土帯の単位を認める。71は、底部にヘラ切り痕を認める。すべて体部内・外面は横ナデ調整を施し、口唇部は丸くおさめる。74は、貼付高台を有し、張り出しは少ない。底部から丸味をもって外方に直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。底部外面には左から右方向のヘラ削りを認める。立ち上がりの内、外面は横ナデ調整を施し、体部には一部自然釉がかかる。

75~85は須恵器蓋である。蓋Ⅰ(75~78)は、いずれも丸みをもった頂部をもち、口唇部は丸くおさめる。内面は不定方向のナデ調整を施し、頂部上面をヘラ削りの後、横ナデ調整を施しているもの(75, 78)とヘラ削りのままのもの(76, 77)とがある。蓋Ⅱ(79~86)は、頂部が水平で平坦面になりつまみを有しないもの(79)と扁平で中心がやや高いつまみを有するもの(80)、環状のつまみを有するもの(84, 85)とがある。79, 82は口縁部が僅かに屈曲する。80, 84は口唇部は丸くおさめる。81は端部が僅かに凹む。82は口縁内面に段を有す。83は端部が面をなす。頂部上面をヘラ削りの後、横ナデ調整を施したもの(80, 81, 83, 84)とヘラ削りのままのもの(79, 82)とがある。86は、皿の蓋と考えられる。口縁部が僅かに屈曲する。頂部外縁はヘラ削りのままで、口縁部内・外面は横ナデ調整が施されている。

87, 88は土師器蓋である。87は、丸みをもった頂部をもち、扁平の中心がやや高いつまみを有する。横ナデの後、全面にヘラ磨きが施されている。88は、頂部から僅かに内湾気味に下降し口縁部に到る。端部は丸みを帯びた面をなす。口縁内面には段を有す。全面丁寧なヘラ磨き調整を施すが、頂部外面の一部には、下地のヘラ削りが認められる。89は、須恵器高台付底部である。高台は、外方への張り出しは少なく、畳付けは、僅かに凹む。底部外面はヘラ削りのままである。内面は不定方向のナデ調整を施す。90は、土師器皿である。口縁部は、外反気味で、端部はつまみ上げた後、横ナデ調整が施され、体部は全面横ナデの後ヘラ磨きが施されている。91は、土師器高杯である。脚端部は欠損している。口縁内面は、段状を呈す。口縁端部をつまみ上げて、強い横ナデ調整を施す。内・外面共全面ヘラ磨きが施されている。92は、須恵器高

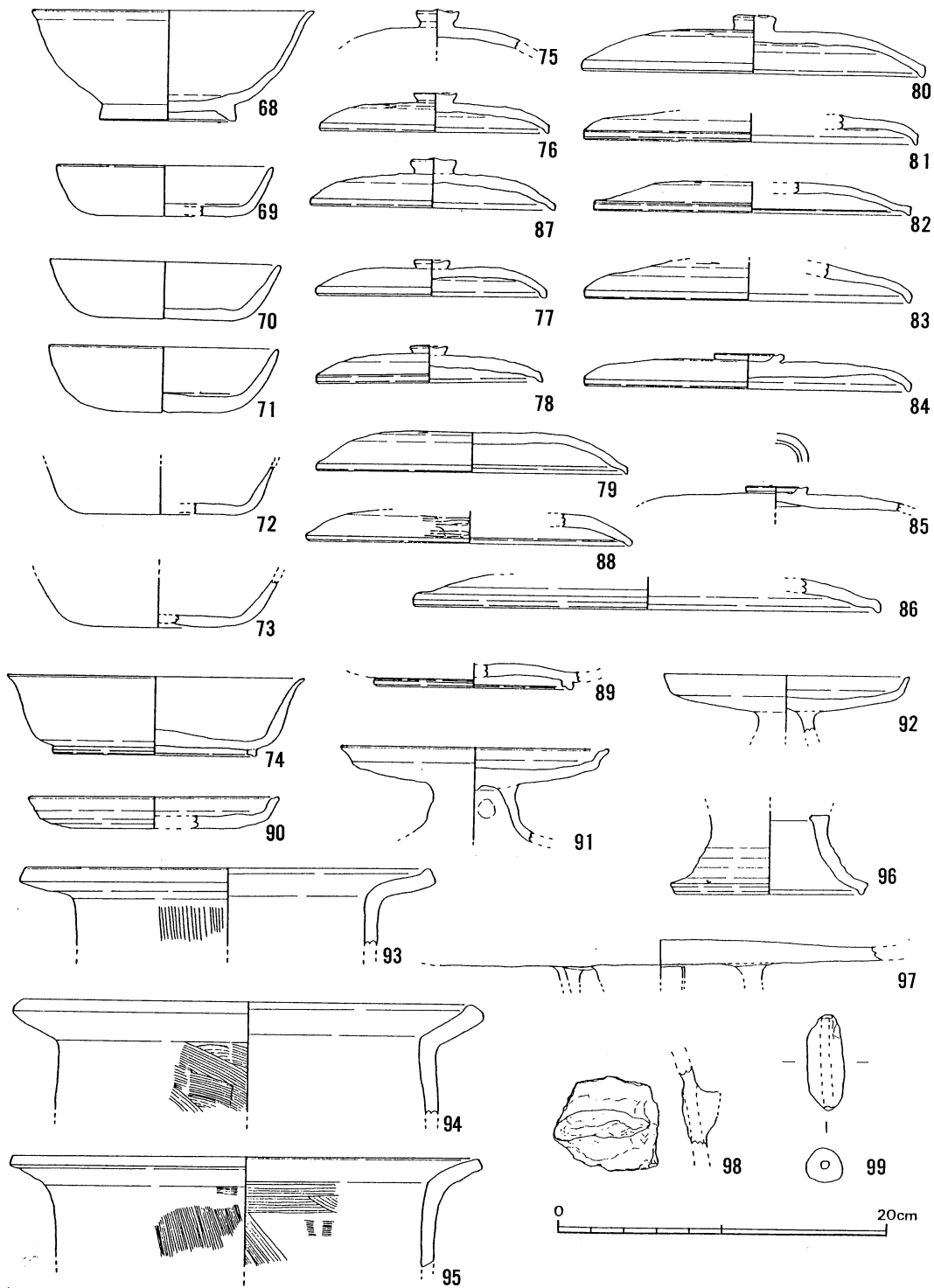


Fig 28 SK 10・50 出土遺物実測図 (SK 10:68 SK 50:69~99)

杯である。脚を欠損している。滑らかな底部から直線的に外方に立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。底部外面にヘラ削りを認める。96は、土師器の脚部と考えられる。杯部との接合部で破損している。脚端部は面をなし、内面は段を有す。内・外面共強い横ナデ調整が施されている。93～95は、土師器甕である。「く」の字状に強く広がる口縁部を有し、内面に稜をもつ。93、94は、上端部が上に肥厚している。95は、擬口縁である。93～95共に口縁部内・外面に強い横ナデ調整が施される。94の体部外面は、右下り横方向のハケ調整が施され、95の体部外面は、上端が右下がり横方向に、それより下は右下り縦方向のハケ調整が施されている。97は、土師器台付盤である。脚部の大部分と口縁部を欠損している。5カ所の透かしが見られる。全面にヘラ磨を施す。以上の外、土師器把手(98)、土師器土錘(99)が出土している。

溝

SD2 (Fig 29・30-100~134) 100～106は、土師器高台付底部である。100、103～106はベタ高台を有す。100、105、106は高台外面に静止糸切り痕を認める。101は、高台の高さ2.5cmを測り、下端は外反、端部は凹状をなす。102は高台断面三角形を呈し、高台内面の剝離が著しい。104、105は内面にロクロ目を認める。105は外底及び外面に火ダスキを認め、陶質的な堅微な焼き上がりである。106はロクロ水引き成形を認める。107は、土師器杯である。底部から外反気味に立ち上がり、口縁下で内側に僅かに屈曲する。口唇部は丸くおさめる。底部はヘラ切りと考えられる。108は、土師器高台付杯である。底部から直線的に立ち上がり、高台内面は凹状を呈す。内・外面共丁寧なナデ調整を施す。109は、土師器皿である。底部から直線的に立ち上がり口縁部に到る。端部は僅かに外方に肥厚する。内・外面共に横ナデ調整を施す。110、111は、土師器椀である。底部を欠損している。直線的に立ち上がり口縁部に到る。110は口唇部が僅かに外反する。111は口唇部を丸くおさめる。110・111共に外面にはロクロ目が顕著である。110は、内面にナデ調整を施す。112は、土師器高台付椀である。高台を欠損している。底部から直線的に立ち上がり、胴部中位で強く内湾する。口縁部は外反し、口唇部は丸くおさめる。113は、須恵器高台付椀である。高台は外方に張り出し、端部は面をなす。底部外面にヘラ切り痕を認める。内面にロクロ目が顕著であり、火ダスキが認められる。内・外面共に横ナデ調整を施す。114は、須恵器椀である。底部を欠損している。内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部内面は内傾する面を有す。115は、灰釉陶器である。僅かに外方に張り出すしっかりした高台を有し、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸くおさめる。釉は、内・外面共に下半までかかる。116は、須恵器椀と考えられる。底部を欠損している。底部立ち上がり部分は、ヘラ削りにより面をなす。口唇部は凹状を呈し、僅かに内面に肥厚する。体部外面に2条の弱い凹線が走る。内・外面共に横ナデ調整を施す。117は、須恵器蓋Ⅱである。頂部を欠損している。口縁部は一坦水平に折り曲げ端部を下方につまみ出す。端部内・外面は横ナデ調整を施す。外面には自然釉が残る。118は、土師器甕である。「く」の字状に強く広がる口縁部を有し、内面に稜を有す。口唇部

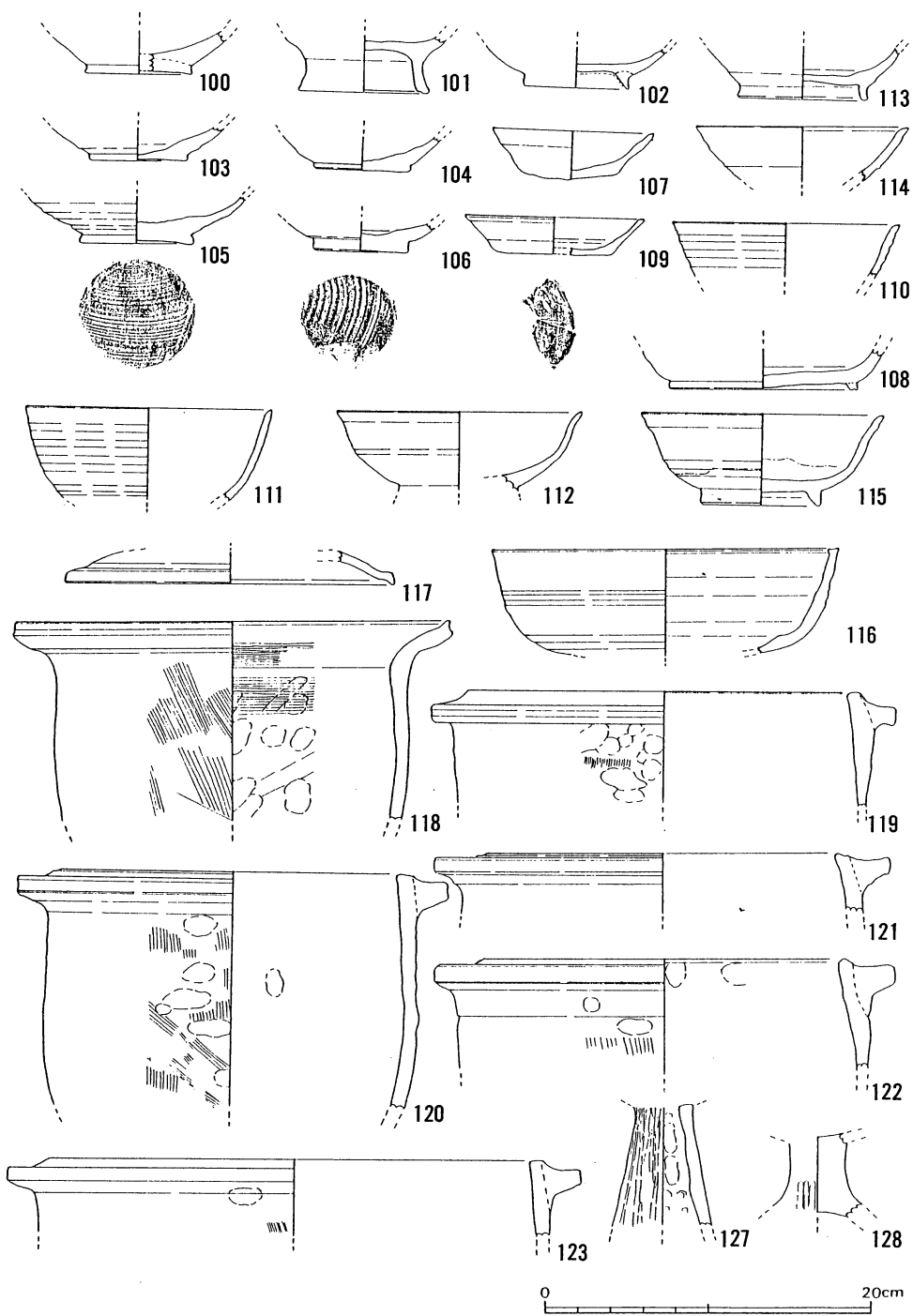


Fig 29 SD 2 出土遺物実測図

ヨコ方向の強いナデ調整が施され僅かに凹む。口縁部内・外面共に横ナデ調整を施す。体部外面縦、胴部上半横方向のハケ調整を施す。119～126は、土師器羽釜である。119は、口縁端部から垂れ気味に鍔が付く。120は、口縁端部に併行して鍔が付く。121は、鍔は大きく張り出し端部は僅かに肥厚する。口縁部は内湾して終る。122は、口唇部は丸くおさめ、やや下がったところに太い鍔が付く。123は、口縁端部に断面台形を呈する鍔を有す。124は、鍔の端部を丸くおさめる。125は、口縁端部より少し下がったところに鍔が付き、上方に反り上がっている。126は、断面長方形のしっかりした鍔が口縁端部につく。119～126のすべての鍔の上・下、口唇部は横方向の強いナデ調整を施す。鍔の接合部には指頭圧痕を認める。

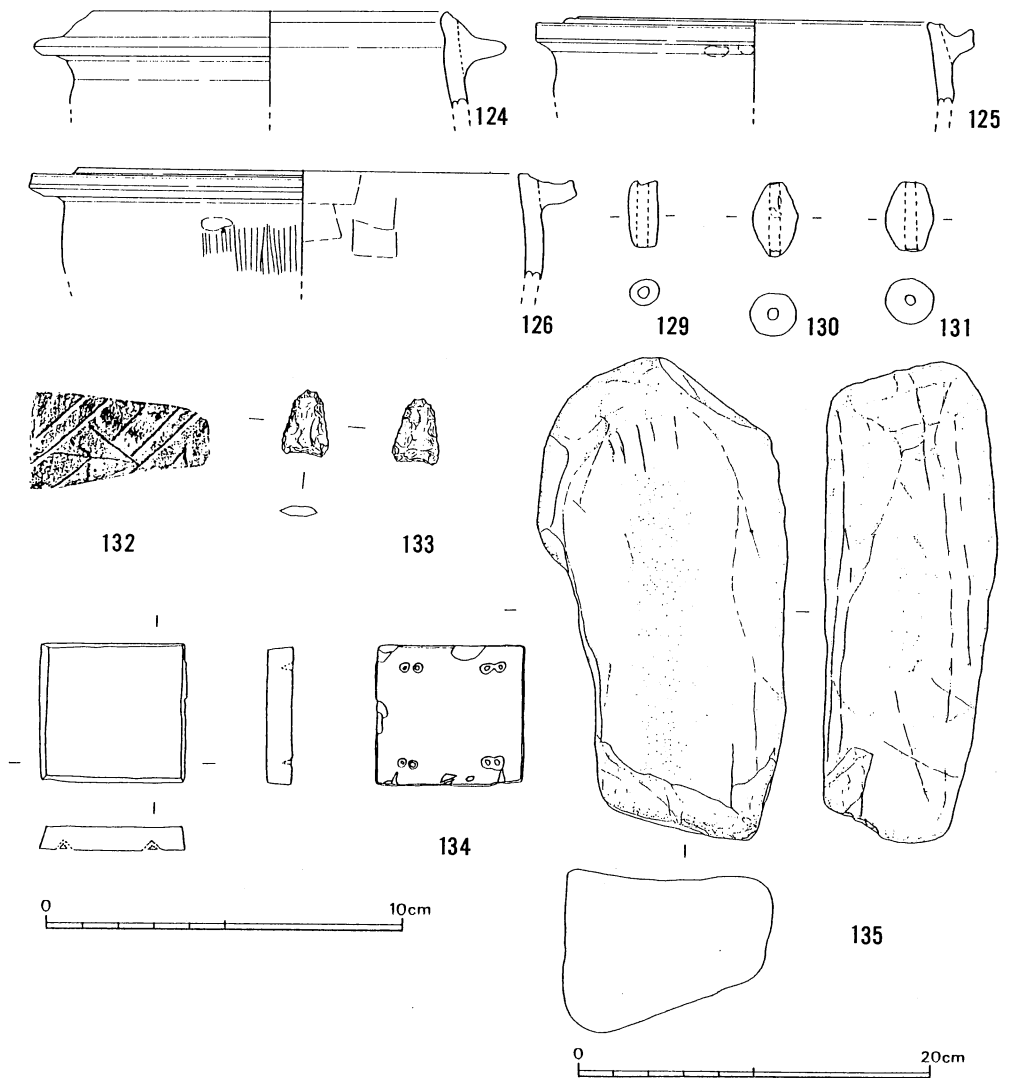


Fig 30 SB3、SD2 出土遺物実測図 (SB2 : 132、SB3 : 133、135、SD2 : 124～134)

120は、外面胴部は縦及び右下りのハケ調整を施し、ハケ調整後に指頭圧痕が顕著である。126は、外面に荒いハケを施す。127、128は、土師器高杯脚である。128は、外面を丁寧にはら磨きを施す。129～131は、土師器土錘である。

134は、石鈔（巡方）である。平面形は、正方形に近い。大きさは、上場4.0×3.85cm、下場4.1×4.05cm、厚さ7.05mm。断面台形を呈す。表面と4辺は良く磨かれており、裏面の稜は軽い面トリが施されている。裏面は、他所に比べ磨きが粗い。裏面の四隅に2孔を1対とする潜り孔があいている。

3. 中・近世

(1) 遺物の種類と器種

今次調査で出土した中・近世の出土遺物の種類は、土師器・瓦質土器・輸入陶磁器・備前・唐津・伊万里の土器・陶磁器と少量の石臼・鉄鍬である。⁽¹⁾

器種は、椀・杯・皿・高杯・壺・甕・播鉢・羽釜・鍋等を挙げることができる。ここでは、最も出土量の多い土師器について示す。土師器は、器形の深いものから椀・杯・皿と呼称することができるが、これらの器種名（形式）は、厳密に分類すると不都合を生じることが多い。従って「土師の形式が何であるかということよりも様式から出発した方がよい」という立場から、形態・製作手法の違いによって、以下のような型式分類を行う。⁽²⁾

A類：細く扁平化した高台を有する底部から、内湾気味に立ち上がる。口縁部は、直立し端部は丸くおさめる。

B類：内外面にロクロ目を残し、底部糸切り技法によるもの。底部から直線的に立ち上がり口縁部に至るものをB1類、口縁部が外反するものをB2類、小型で器高の低いものをB3a、小型で器高の高いものをB3bとする。

C類：未ロクロ成形で、A・B類よりも器高が低いタイプ。C1類 — 平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内・外面は、極めて丁寧な横方向のナデ調整。

C2類 — 丸底風の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部に到る。底部内面は、一定方向のナデ調整・体部内面は丁寧な横方向のナデ調整を行うが外面のナデは弱い。口縁部内・外面は、横方向の強いナデ調整を施す。C3類 — 体部上位で口縁部が内側に屈曲して立ち上がる。内・外面のナデ調整は、C2類よりも弱くなるが、口縁部内外面の横方向のナデは強い。C4類 — 口縁部が外反する。体部の調整はC3類と同様であるが、外反する口縁部は内・外面をおさえて強く横方向にナデる。C5類 — 小型のもの。

D類：C類と同じく未ロクロ成形であるが、C類よりも大振りである。調整は、口縁部内外面のみ横方向のナデを施すが、他の部分は未調整で指頭圧痕が著しく残る。D1類 —

口縁部が直立または内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。D2類—口縁部が外反する。

E類：比較的器高が高い。底部から強くカーブして立ち上がり、口縁部は短く外反する。内面にヘラ磨きを施す。

(2) 中・近世出土遺物

掘立柱建物

SB21 (Fig 31-136・137) 136は、土師器椀である。口縁部がわずかに外反するもので、古代のSK10・SD2と同時期の所産と考えられる。137は土師器杯でB1類である。

SB24 (Fig 31-138) 土師器鍋である。胴部以下は欠損しているが、断面三角形の鏝を有し、口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は内傾する面をなす。口縁部内・外面は横方向のナデ調整を行い、鏝以下はススけている。

SB32 (Fig 31-139~144) 140~143は、土師器皿である。140・141はD1類、142・143はD2類、139・144は土師器杯である。139はB3b・144はB1類である。

SB30 (Fig 31-145) 土師器皿で、D1類に属する。

SB52 (Fig 31-154) 白磁の口禿椀である。体部中位以下を欠損しているが、口縁部はわずかに外反する。胎土はやや粗く灰白色に発色する。

SB55 (Fig 31-146) 土師器皿で、D2類に属する。

SB56 (Fig 31-147・148) 147は土師器皿でD2類、148は土師器杯でB類に属する。

SB57 (Fig 31-149) 土師器皿で、D1類に属する。

SB58 (Fig 31-150~153) すべて土師器皿である。150・152・153はC2類、151はC3類に属する。

土 壙

SK11 (Fig 32・33・38-155~187) 155は土師器椀でA類、156~163・184は土師器杯で、156~163はB2類、184はB3aに属する。164~183は、土師器皿である。164~172・174はC2類、173・175~177はB3類、178~183はC4類に属する。185は、青磁椀口縁部である。外面は明瞭に稜の入った蓮弁文を配し、口縁端部は尖り気味におさめる。胎土は極めて精緻で、釉は青濁色で厚くかかっている。186は、青磁椀高台部である。細長く伸びる高台で、畳付けは極めて狭いが面取りをしている。釉調・胎土は、185と同様であるが、畳付け部分は露出し赤く発色する。187は、玉縁状口縁を有する白磁椀で外面に沈線を一条配する。本遺構出土の資料は、良好な一括資料であるため、次章で別に考察を加える。

SK12 (Fig 5・33-6、188~190) 188は土師器皿でC5類、189は土師器杯の底部である。190は、青磁椀で外面には蓮弁文を有す。蓮弁は重複しており鑄も中心を通過していない。191は瓦質羽釜で、頸部に断面台形の鏝がめぐる。口縁部は、僅かに外反し端部は水平な面を

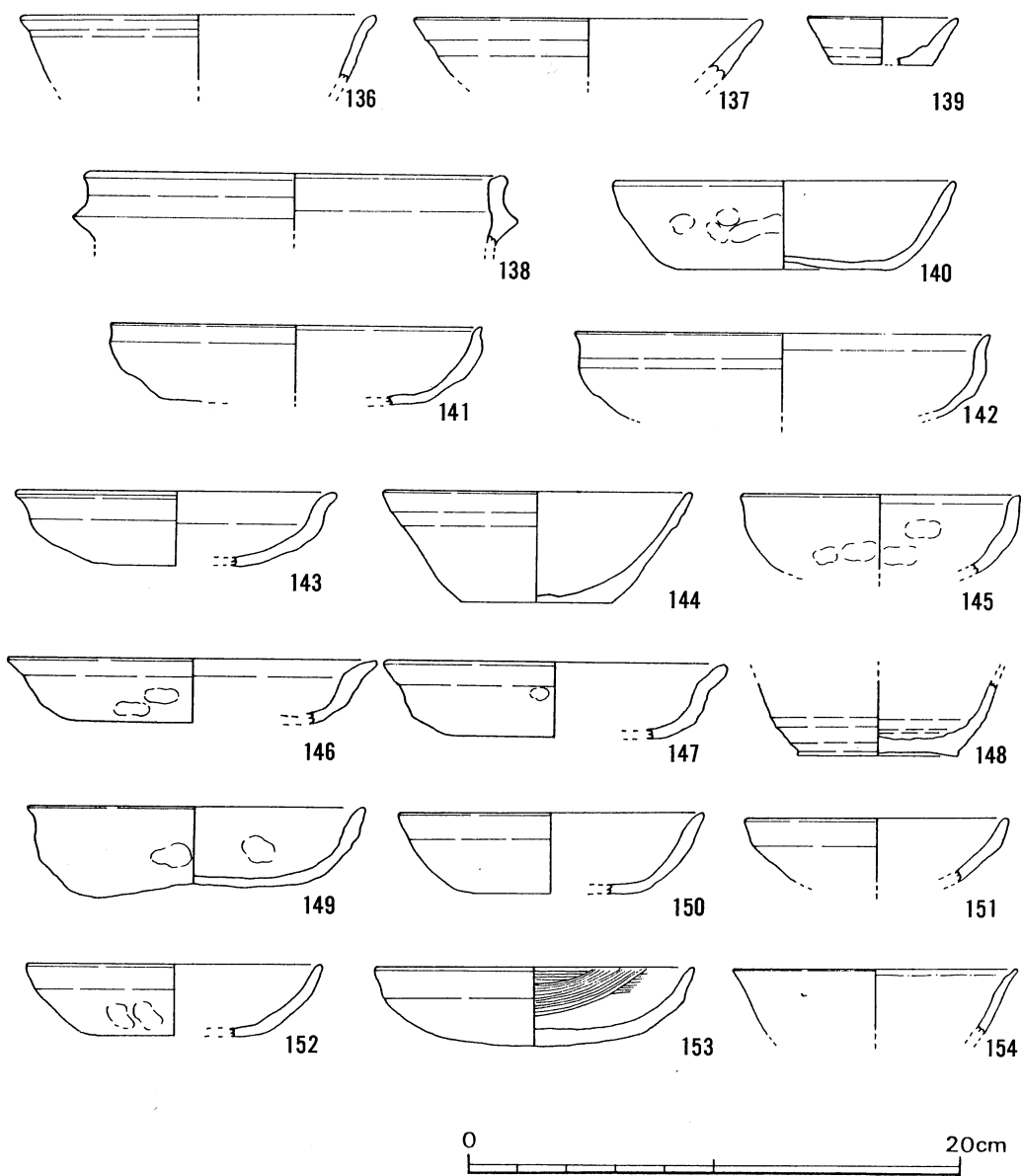


Fig 31 SB 21・24・32・30・52・55～58 出土遺物実測図

なす。6は瓦質の甕で口径44cmを測る。口縁部は外反し端部は幅広い水平な面をなす。口縁部内面には浅い段を有す。内外面横方向のナデ調整を施す。

SK15 (Fig 33・38-192~197) 192~197は土師器杯で、192はB1類、193・196はB2類、194・195はB3a類に属する。

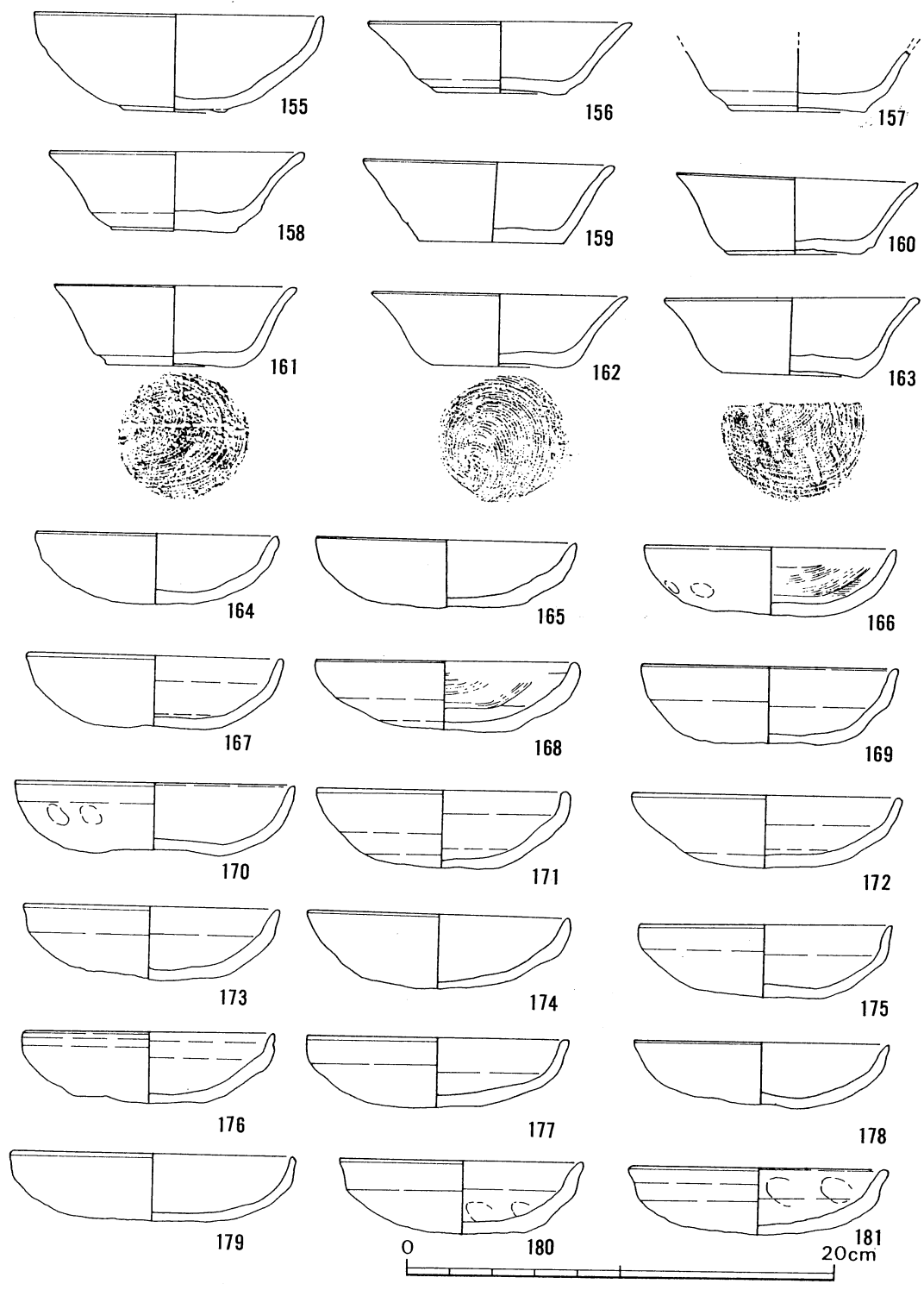


Fig 32 SK 11 出土遺物実測図

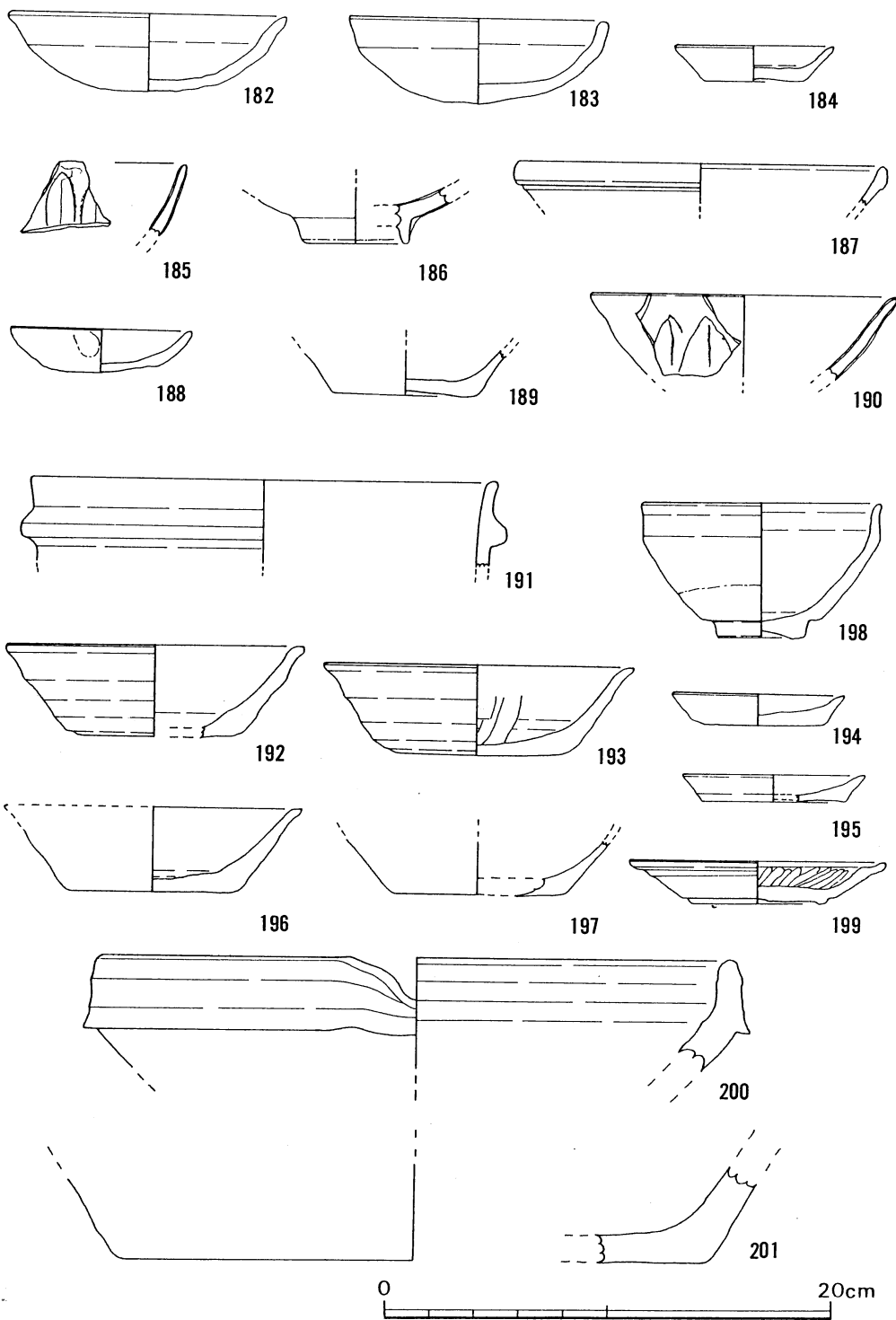


Fig 33 SK 11・12・15・29・49・55 出土遺物実測図

SK29 (Fig 33 - 198) 瀬戸天目茶碗である。内反高台で幅広い高台脇をへて内湾気味に立ち上がる。体部上端で僅かに内側に屈曲し、口縁部は外反する。胎土は粗く黄白色を呈す。釉は黒褐色で体部下半にまでかかる。

SK49 (Fig 33 - 200, 201) 200は備前播鉢である。口縁部は僅かに内傾して立ち上がり、端部は丸く収める。201は備前甕底部で、底径 26.5cmを測る。

SK55 (Fig 33 - 199) 瀬戸菊皿である。口径 11.6cm、器高 2.0cmを測る。内面の花卉は42枚で、丸ノミで彫り込んでいる。胎土は黄白色、釉は黄緑色に発色する。

SD1 (Fig 34・35・39-202~233 306) 202~210は土師器杯である。202、204、206~208はB1類、209、210はB3b類に属する。211~223は土師器皿である。211~216はD1類、217~223はD2類である。224・225は瓦質三足鍋の脚部、226・227は口縁部である。

226は内湾して立ち上がり、端部は内傾する面をなす。口縁部下に幅 1.5cmの扁平な突帯を貼付している。227は内湾して立ち上がり端部で上方に屈曲し、端面は横方向のナデにより凹状をなす。断面に外傾する粘土帯接合部を観察することができる。両者共灰白色に発色する。

228、229、230は青磁碗である。228は内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。外面に幅広い高鎬蓮弁がある。胎土は灰色でやや粗く、釉はくすんだ緑色をしている。230は直線的に立ち上がり、口縁部は短く外反し端部は水平な面をなす。内面には櫛目文が見られる。胎土は精緻で灰白色を呈し、釉は透明度のある薄緑色に発色する。

229は直線的に立ち上がり口唇部は丸くおさめる。内面には片切りによる文様を配す。胎土は精緻で灰色、釉は僅かに濁った薄緑色である。232は、青磁碗底部である。高台は僅かに外向きに付き、畳付は内外面から斜めに面取り、中央部が稜をなす。外底は丁寧に削り取り平坦な面をなす。内底には線刻が見られる。胎土は精緻で淡灰色に発色、釉は透明度のある薄緑色で、高台外面にまでかかる。231は、京焼き系の碗である。底部から強いカーブを描いて立ち上がる。高台は断面台形を呈する削り出し高台で、内面に弱い段ができる。胎土は精緻で淡黄色。釉は白濁色で全面に貫入があり、高台脇 1cmあたりまでかかる。233は、須恵器壺である。口縁部は大きく外反し、端部外面を肥厚させ一条の凹線が走る。全面横ナデ調整を施し、内面に自然釉がかかっている。306は鉄鉢である。全長 5.2cm、全幅 4cm、重量 20.2gを測る。全面に錆がまわっているが原形をとどめている。

SD3 (Fig 35・39-234~239, 311) 234は、須恵器杯底部である。畳付けが凹状をなす高台を貼付し、底部外面には右から左への回転ヘラ削りが認められる。内面は丁寧にナデ調整を施す。235は、備前播鉢である。口径は24cmを測り、口縁部は内傾して立ち上がり外面に2条の沈線を配す。灰赤色に発色し、胎土には大粒の砂粒が見られない。内・外面に強いナデ調整を施す。236、239は、唐津碗である。236は二次的な火を受けて変色している。239は、厚い底部から内湾して立ち上がり口唇部は丸くおさめる。断面台形を呈す削り出し高台を有し、外底には兜巾が残る。胎土は精緻で灰色、下地に赤茶色の化粧がけを施した後鉄釉をかけてい

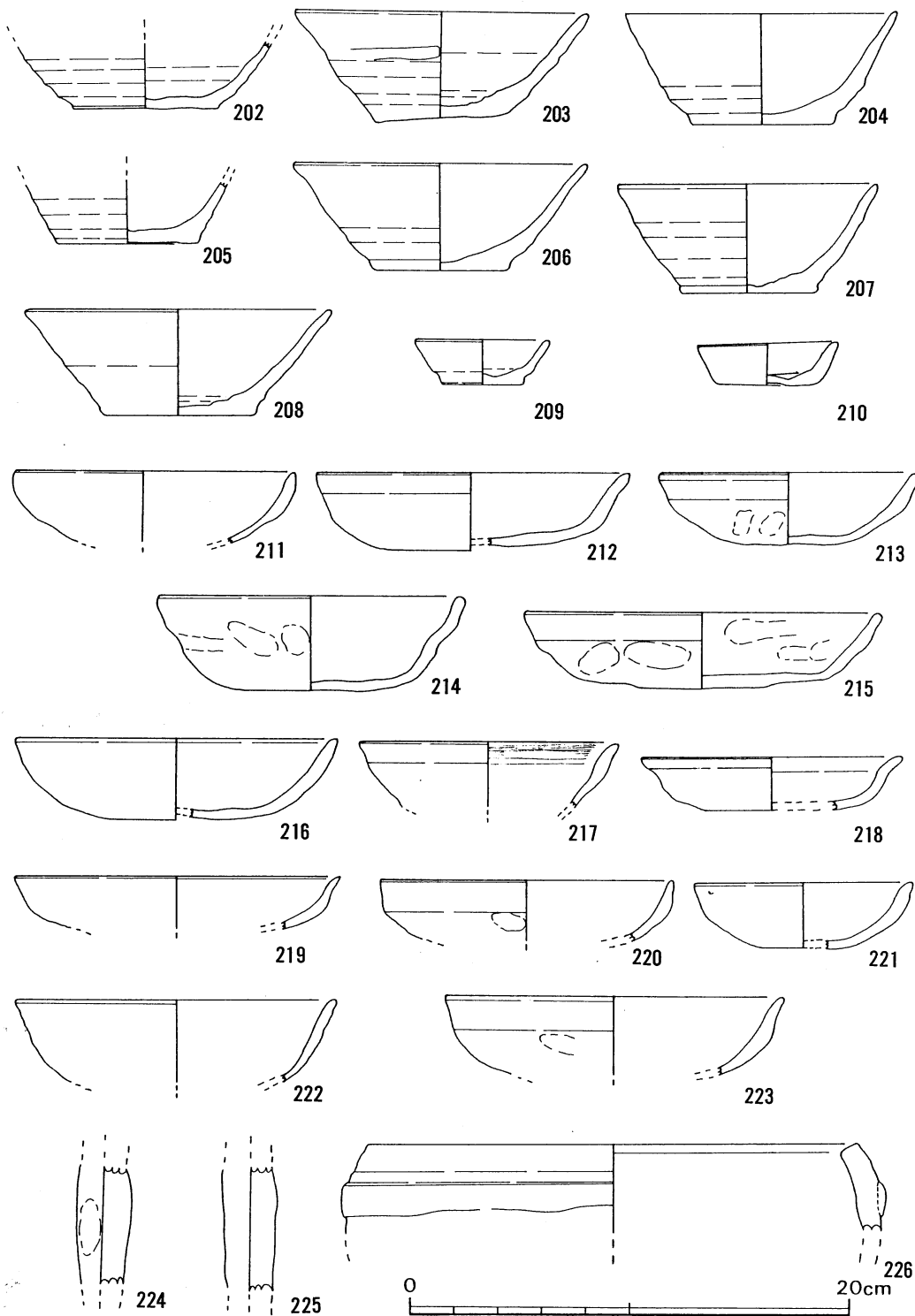


Fig 34 SD1 出土遺物実測図

る。238は、青磁椀底部である。底部外面及び高台内面は丁寧な削りを施し、畳付けは外縁部を斜めに削って面取っている。胎土は灰色堅緻。釉は透明度のある青緑色で高台外面までかかる。237は、弥生後期の甕である。311は石臼の上部である。直径約16cm、高さ7cm、上縁高2.2cm、上縁幅3cm、挽き手穴は断面台形を呈し径2.2cmを測る。主溝に対して副溝が4条付いている。使用により条線はかなり磨耗が激しい。

SD4 (Fig 35・36-240~269) 240~246は、土師器杯である。240はB1類、241はB2類、242~244はB3b類に属する。247~257は、土師器皿である。247はC1類、248~252はD1類、253~256はD2類、257はE類である。258~260は土師器脚部であり、全面横方向のナデ調整で仕上げている。261は、土師器皿である。内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し端部は再び内側に屈曲する。精選された胎土で内外面には丁寧なヘラ磨きを施す。262は、弥生土器鉢である。内湾気味に立ち上がり口唇部は水平な面をなす。内面はハケ調整。263は須恵器横瓶の口縁部と考えられる。なめらかに外反し口唇部は丸くおさめ、全面横ナデ調整で仕上げる。264・269は、須恵器壺である。264は底部で、断面台形を呈する高台が底部外縁端に付く。269は頸部で外面上位に1条の沈線が巡る。265・266は青磁椀、268は白磁椀底部である。265は内面に2条の沈線による区分線と飛雲文の一部が認められる。森田勉氏分類による椀I類-4-aに該当する。266は底部である。胎土は灰色でやや粗く露体部は黄褐色に発色。黄緑色の釉で高台外面にまでかかる。268は、幅広い削り出し高台を有し、胎土は白色精緻である。釉は透明度のある白色で高台脇にまでせまる。267は弥生後期の甕で、水平に近く屈曲する口縁端部を上方に摘み上げ横後方に強くナデている。

SD6 (Fig 37-270 271) 270は伊万里椀で、271は備前挿鉢である。271は底部で7条1単位の条線が見られるが、使用による磨耗は条線を消すほどである。

SD7 (Fig 37-272~275) 272は、備前挿鉢底部である。内面に8条1単位の条線を配するが、磨耗によって一部消えている。273は須恵器蓋天井部である。274は、明染付碗である。内湾して立ち上がり口縁部は僅かに外反する。口縁部内面に幅広い界線を巡らし、外面には短波文を配す。221は、青磁皿である。厚い底部から内湾して立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。薄緑色の釉で全面施釉後、外底部を削り取っている。体部外面に蓮弁文、内面に魚文を印刻する。

SD8 (Fig 37、39-276、307) 276は、青白磁椀底部である。断面台形の高台を削り、高台脇は面を有す。釉は淡灰色で高台外面にまでかかる。畳付け、外底部の露胎部は赤く発色する。307は、弥生時代の石鉢で流れ込みである。

SD9 (Fig 37-277~285) 277~281は、土師器皿である。277はD1類、278~281はD2類である。282~284は、瓦質鍋である。すべて最大径を胴部中位に有する。口縁部は282が外反し、他は直立する。内外面に指頭圧痕が多く見られる。285は、瓦質羽釜である。内湾気味に立ち上がり口縁部に至り、口唇部は凹状を呈する。口縁部外面には断面台形の罫が

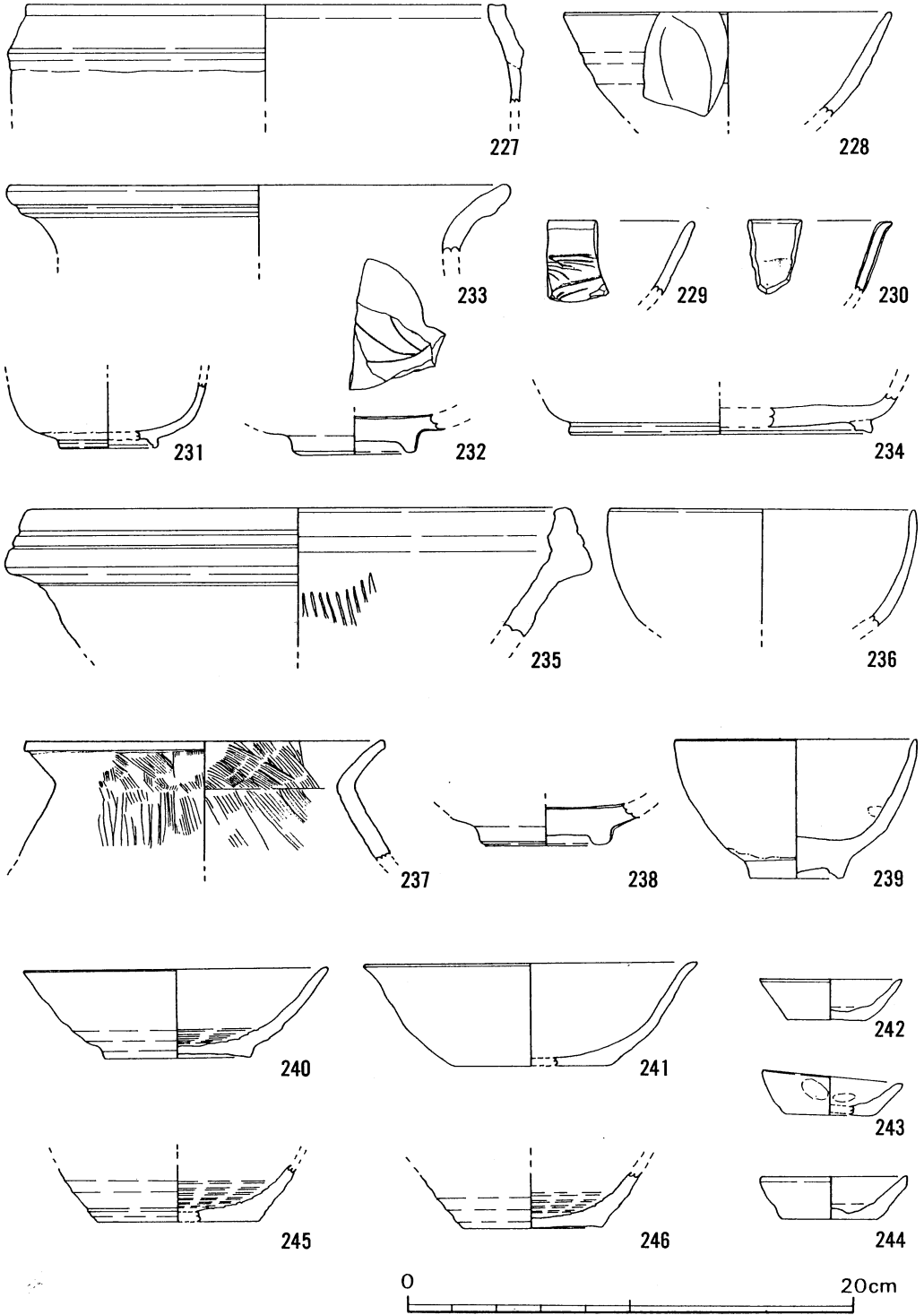


Fig 35 SD1·3·4 出土遺物実測図

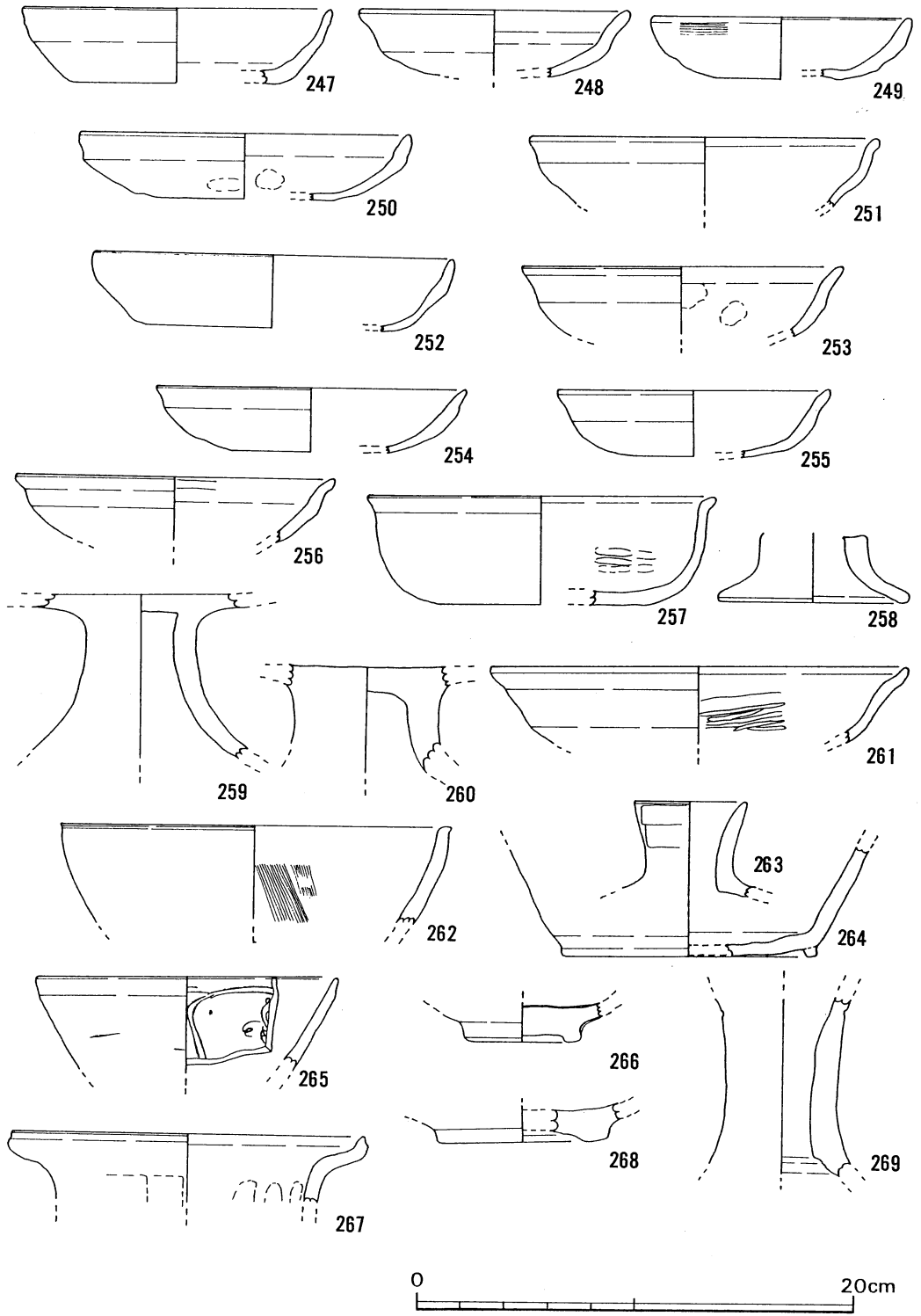


Fig 36 SD 4 出土遺物実測図

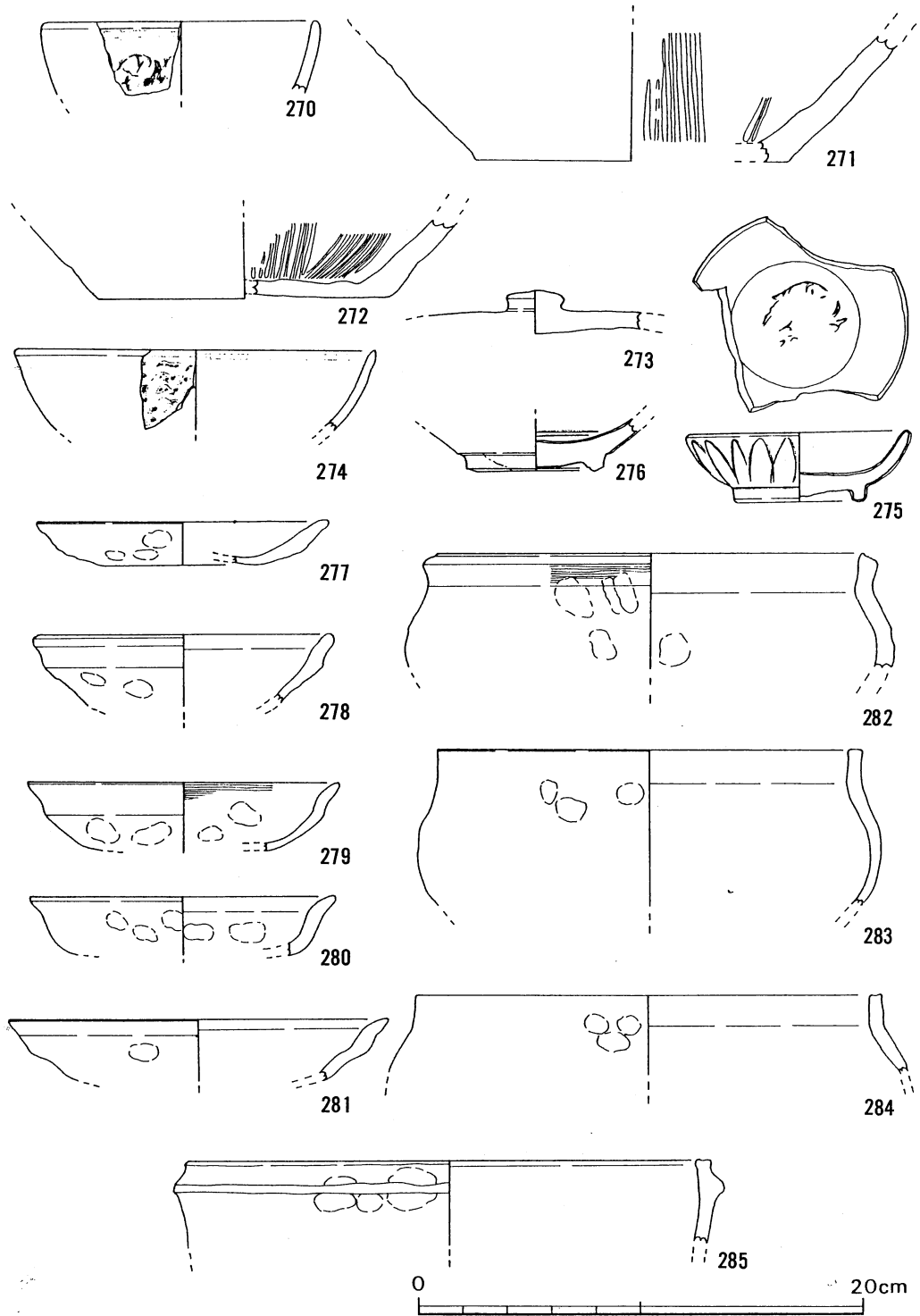


Fig 37 SD6~9出土遺物実測図

巡る。鏝の上下には指頭圧痕が顕著に見られる。

SD10 (Fig 38-286) 瓦器高杯である。全面横方向のナデ調整で仕上げる。

SD11 (Fig 38-287) 土師器鍋である。内湾して立ち上がりそのまま口縁部に到り、口唇部は丸くおさめる。口縁下に紐巾の突帯を巡らす。突帯の上下及び下胴部外面には著しい指頭圧痕が見られる。

SD12 (Fig 38・29-288~292 304 305) 288は、備前壺である。肩の張った上胴部から頸が僅かに外方に傾き直線的に立ち上がり、口縁部は丸縁状を呈す。292は、備前甕底部である。外面はハケ調整後削っている(左←右)。289は青磁椀である。外面に丸ノミによる細蓮弁を配す。二次的な火を受け変色している。290は唐津椀底部である。断面三角の削り出し高台を有し畳付けは丸くおさめる。白濁色の長石釉が高台部までかかっており、見込みは蛇目に削り取っている。291は土師器羽釜である。水平に突き出た鏝を有す。胴部下半は横方向に削った後丁寧にナデで仕上げる。外面底部付近に格子目の圧痕が見られる。304と305は砂岩製の石臼である。前者は、4分の1程度の破損品であるが、法量を復元すると直径28cm、高さ4cm、芯穴の径約4cmを測る。主溝に対して副溝が3条付き、上面は使用のためかなり磨耗が見られる。後者は、ほぼ半分が欠損している。直径29cm、高さ4.8cm、芯穴の径5cmを測る。主溝に対して4条の副溝が付いている。前者と同様に磨耗が著しい。

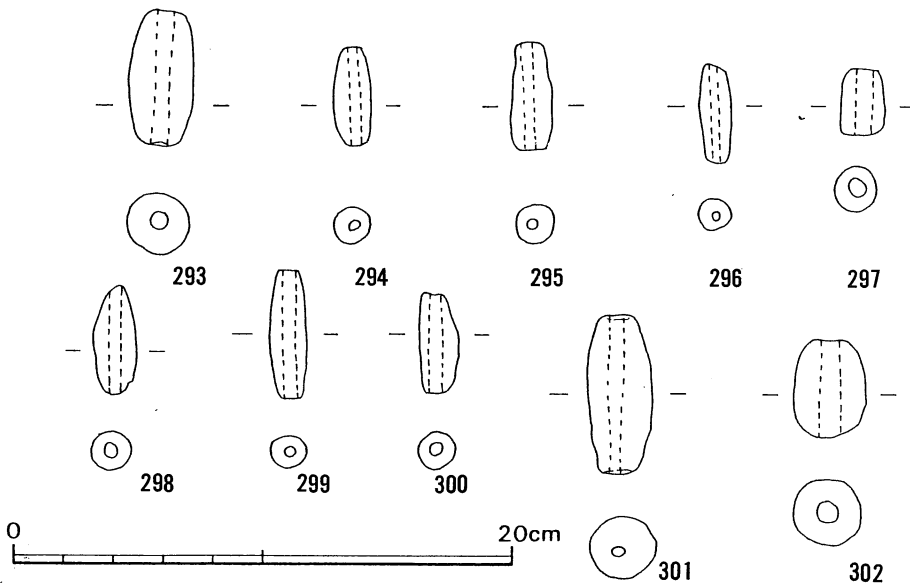
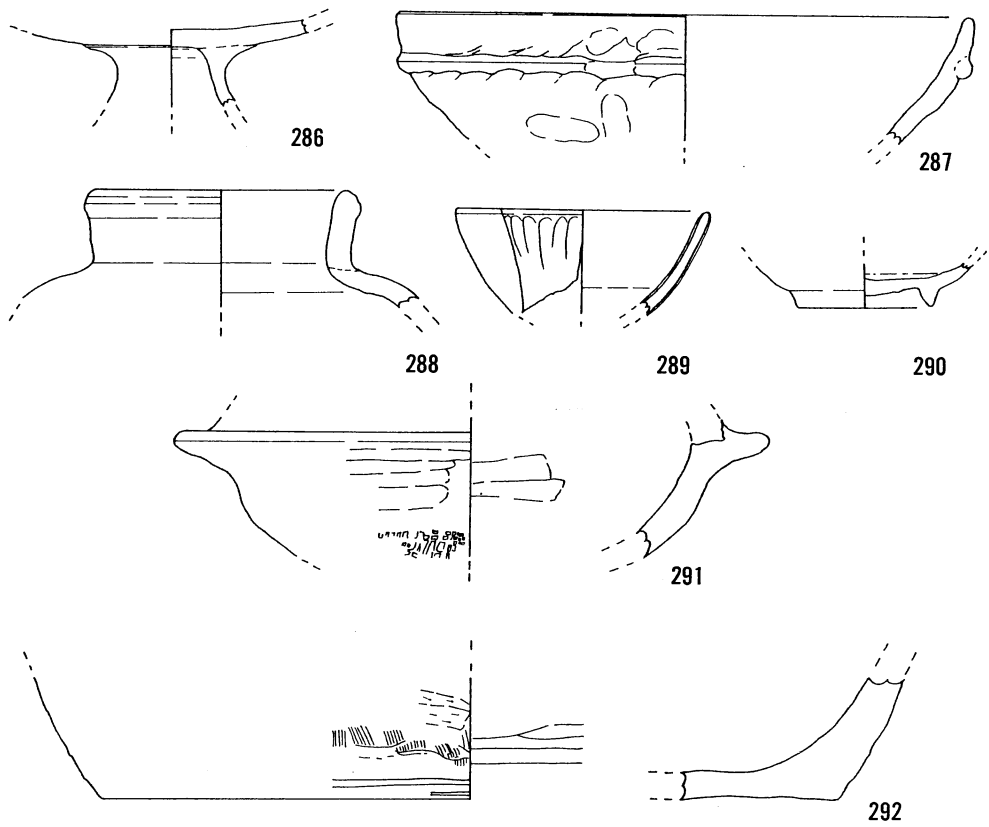


Fig38 SD10~12、SK11・15及び包含層出土遺物実測図

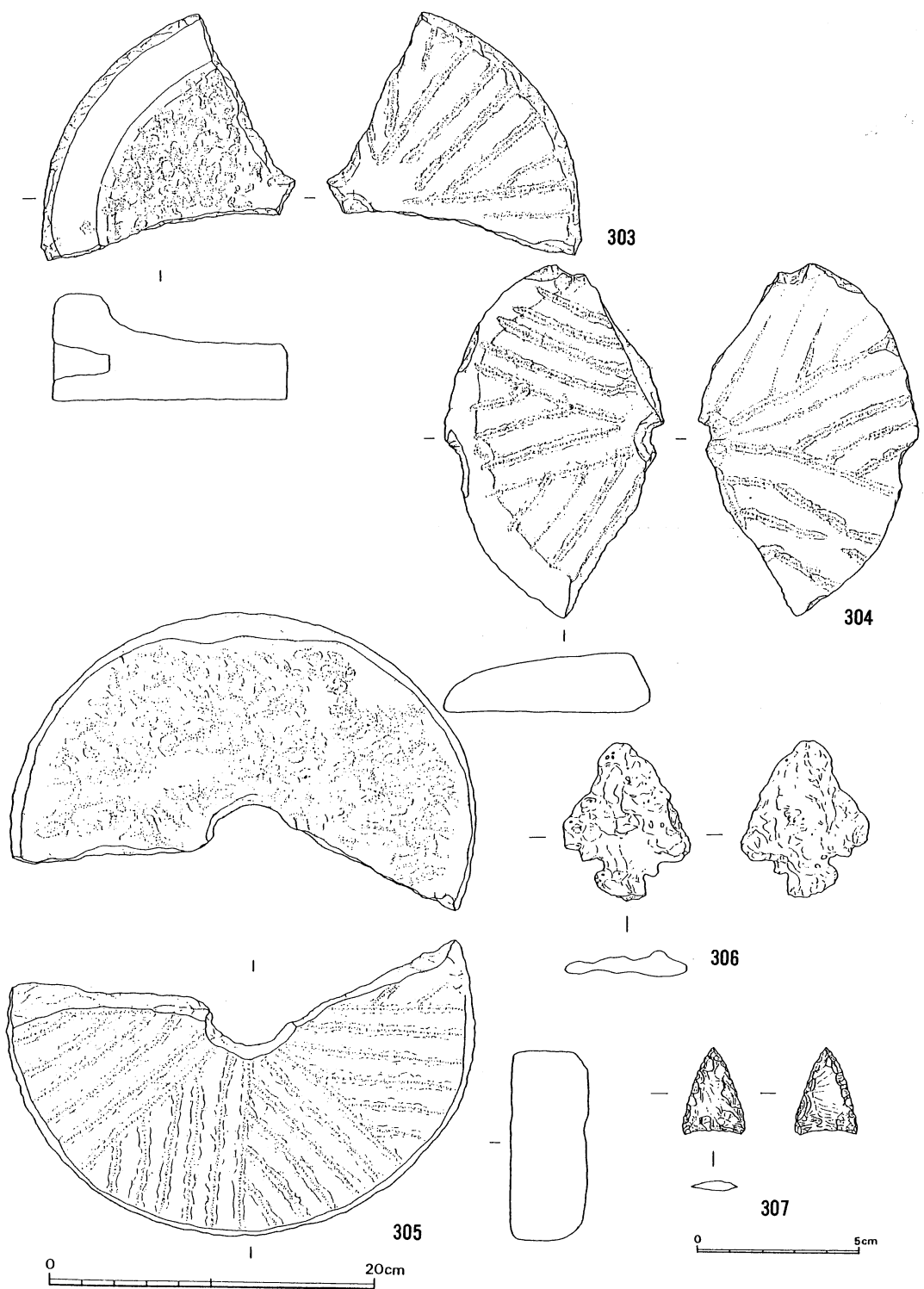


Fig 39 SD 1・3・8・12出土遺物実測図
 (SD 1 : 306、SD 3 : 303、SD 8 : 307、SD 12 : 304・305)

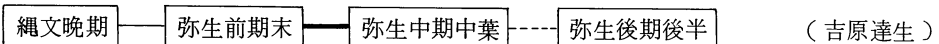
第Ⅵ章 総 括

第 1 節 縄文時代～弥生時代

県東部における縄文時代の遺跡は極めて少ない。晩期の遺跡としては、美良布・八反坪遺跡⁽³⁾⁽⁴⁾などが知られているにすぎない。この遺跡は、晩期前半の黒土 BI に比定されるものであるが、今調査での SK24 から出土した縄文土器は、晩期終末に位置づけられるものである。県東部においては初めての発見であり、しかも貯蔵穴とみられる遺構からの検出という点で、注目されるものである。また今次の調査では、SK48、P4 のように弥生前期末の遺構が検出され、それは、いわゆる遠賀川式系の土器のみで占められたものであり、在地性の強い土器を多く出土した下分遠崎遺跡⁽⁵⁾の様相とは異なるものである。この両者における土器様相の差異は、いかなる背景に帰因するのか、周辺地域の弥生社会成立の問題を追求する上で興味深いものである。

以後、弥生中期中葉までの遺構、遺物は数少ないものの生活の営みが見られる。しかし、凹線文の盛行する中期後葉になると、急速にその痕跡は途絶えてしまう。下分遠崎遺跡をはじめ他の周辺地域の遺跡も、これと同じような様相を示す。そして後期後半にいたって集落が再び出現する。それを語るものは、ST1・ST2・ST4 の堅穴住居であり、特に ST4 からは多量の土器が出土している。住居のプランは円形から方形へと変化し、また土器は全面に叩き目技法を持つ、いわゆるヒビノキⅡ式⁽⁶⁾の様相を呈す。器種としては甕が多く、ST4 内の北東部に集中して見られた。出土状況から何らかの形で一括廃棄したものと考えられる。

最後に、以上の変遷を簡単に図式化すると下記ようになる。今後このような事例と資料の増加によって、本地域の弥生社会の構造を、より明らかにすることができよう。



第 2 節 古 代

1. 遺 物

(1) 土 器

諸遺構から多量の土器が検出しているが、ここでは、比較的まとまって出土をみた SK50・SD2 の土器を取り上げて、各遺構ごとに若干の比較検討を行いたい。

SK50 は、土師器蓋・高杯・甕・盤・須恵器杯・蓋・高杯が見られる。土師器と須恵器の割合は、2 : 3 である。高杯はすべて短脚のものである。甕は、口縁部が「く」字に外反するもので、口縁端部上端を若干肥厚させるものと肥厚させないものがある。須恵器杯は、高台付のものと無高台のものがあり、その比率はほぼ 1 : 1 である。また後者は、口径 13.2cm ~ 14cm の間に、器高は 3.2cm ~ 4.1cm の間に納まる。蓋は、先述のように口径によって二種類に分けることができるが、つまみも擬宝珠形のものと同環状のものがあり、前者が圧倒的に多い。

SD2 は、土師器杯・椀・甕・羽釜、須恵器杯・椀・鉢・灰釉陶器が出土している。この他

弥生土器等が少量流れ込んでいる。SD 2 出土土器でまず注目すべきことは、土師器の糸切り技法と羽釜の出現である。前者はロクロ水挽き手法で成形した極めて堅緻な焼成を有するものであり、次節で述べる土師器杯B類の初現である。これらとは別に粘土紐巻き上げ、ヘラ切りによるもの(107・109)も共件している。後者は、菅原正明氏の分類による撰津C2型⁽⁵⁾に属するものであり、本県では初出土である。土師器椀(101・102・112)は、しっかり外方に張り出す高台を有し、内湾して立ち上がった体部から口縁部が外反するものである。この種の椀の出土例は、あまり多く見られないが、大阪府長原遺跡TR26の土器溜、SK 023等から出土した「高台付土師器」などにその類例を求めることができ得るものである。灰釉陶器(115)は、美濃窯丸石2号に比定することができるものである。そしてこれらの時期は、撰津型の甕、また土師器椀、灰釉陶器から、10世紀代に比定され得るであろう。⁽⁶⁾

以上SK50とSD2の遺物について述べたが、両者の間には画然とした差が認められる。SK50の土器は、言うまでもなく8世紀代のもので、土師器・須恵器の共通器形に見られる互換性や規格性等から典型的な「律令制的土器様式」⁽⁷⁾をもつものである。これに対してSD2は、甕(118)に見られるように古いものを残すものの、「律令制的土器様式」を完全に脱却し、中世的な様式を示しているものである。

(2) 石 鈔

石鈔とは、束帯の袍(“ほう”または“うえのきぬ”⁽⁸⁾)の上にしめる革帯の装飾具のことであり、石鈔を飾った革帯が石鈔帯(石帯)である。また、石鈔の標準の数は鈔具と鉞尾の間に12鈔⁽⁹⁾が考えられる。「石鈔帯には玉石帯、瑪瑙帯のような5位以上のものと、6位以下の雑石腰帯の別がある。6位以下の鈔帯については『延喜式』彈正台の条に『烏犀帯』がみえ、『日本後紀』弘仁元年9月条に『雑石腰帯』がある。」⁽¹⁰⁾SD-2から出土した石鈔は石質からみて「雑石腰帯」に属する。『日本後紀』延暦15(796)年に銅鈔帯が禁じられて以降、平安時代には、その代りに白玉帯等各種の帯や雑石腰帯が用いられるが、大同2(807)年から弘仁元(810)年に至る4年間は雑石腰帯のみが禁止され銅鈔帯に復するが、弘仁元(810)年には、銅鈔帯の代りに雑石腰帯を使用することが確立した。⁽¹¹⁾本遺跡で出土した石鈔は、弘仁元年以降のものであり、『奈良国立文化財研究所学報第23冊』の石鈔の分類によれば、石鈔D Iに属すると考えられるものである。⁽¹²⁾

2. 遺 構

当遺跡で検出した古代の遺構は、堅穴住居1棟、掘立柱建物14棟、柵列2、土塋5基、溝1条である。建物の柱穴の切り合い関係、埋土、出土遺物等から、前後2時期に分けて考えることが可能である。前半期のものは、SB1、SB2、SB4、SB5、SB6、SE7、SB8、SB9、SB10、SB11、SB12、ST3、SA1、SK50、後半期のものは、SB3、SA2、SK10、SD2である。またSB13、SB14は重複関係にあるが、主軸方向からSB13は前半

期のものと考えられる。SB14、SK7、SK28、SK39は、前後どちらの時期に比定できるかは不明である。

前半期の掘立柱建物12棟のうち、南北棟の主軸はN-30.8°-E前後の方向に、東西棟の主軸はN-60.6°-W前後の方向となり、各々の建物は、主軸方向が平行及び直角となり規格性を持って整然と建てられている。柱穴の平面プランは、隅丸方形及び方形のものが多く、しかも一辺が、52.6~88.2cm前後の大きなものである。これらの前半期の建物群は、発掘されたその配置から下記の(ア)~(イ)の如く5群に分けて考えることができる。

- (ア) 建物群のほぼ中央に身舎の東面に廂を持つSB5があり、これが主屋と考えられる。そしてSB5の北側の柱筋を同一にして北にSB4が存し、南側にはほぼ直交してSB6が存す。
- (イ) 主屋の東北側に、SB5とほぼ同規模をもつSB2が存す。SB2の西面に約2.88m隔ててSA1が平行して存する。これは柵とするよりも、目隠し塀と判断した方が合理的である。さらにSB2の北側にはほぼ直交してSB1、SB13が南側の柱筋を同一にして直線上に並ぶ。
- (ウ) SB7、SB8、SB9は、南北の柱筋をほぼ同一にして直線上に並ぶ倉庫群と考えられる。これらの建物は、他の同時期の掘立柱建物に比べて面積が12.7~19.2mを測る規模の小さいものであり、SB8は正方形に近い平面プランを有する。これらの柱穴の検出面からの深さは5~13cmであり、中央の柱穴が検出されなかったのはすでに削平・破壊された結果とも考えられ、建築頭初はSB12のように総柱建物であった可能性もある。しかし、規模及び平面プランから考えて、中央柱欠如の建物であったとしても倉庫を否定するものではない。
- (エ) SB10、SB11は、建物群の南に位置する。
- (オ) SB12は、発見された唯一の総柱建物で倉庫と考えられ、他の建物群とは少し距離を隔てて存在する。

これらの掘立柱建物は一部の建替えも認めはされるが、長い期間における使用はなかったようである。また、屋根は薄板をならべた板屋根であったと考えてよからう。調査区内で井戸は発見できなかったが、谷の湧き水や川り流れから水を汲んでいたものと推定できる。このような掘立柱建物群に混在してある竪穴住居は県下では初めての検出であり、その背景の歴史を知る資料としても興味をそそるものである。SK50は、柱穴も存せず、しかも多量の土器片が検出されるところから土器捨て場と考えられる。以上の前半期の各遺構は先述した遺物から8世紀代に比定できるものである。

後半期の掘立柱建物で確認できたのはSB3のみである。氾濫等の自然的理由からか、何らかの政治的理由等からなのか不明であるが、調査区内では前半期の繁栄はみられない。しかし、調査区外に掘外柱建物群が存する可能性を残す。SB3の主軸方向は、前半期の建物であるSB4、SB5等とほぼ同様であり、遺物は数少ないものの生活の営みが見られることから前半期から後半期への移行過程を考える上で重要なものである。SK10は、土師器椀を単独出土した土墳墓と考えられる。SD2は、後半期の建物が多く出土しているが、溝の性格上何度も溝

さらえが繰り返されたとみてよい。そしてSD2の掘削された時期については、先述した前半期まで遡ると考えるべきであろう。このSD2より西に掘立柱建物は1棟も存在せず、これより東に集中している。このことからSD2は建物群を区画する性格をもつものと判断できる。又南端と北端の標高差が見られないことから流水の可能性は少ない。なお後半期の時期を出土遺物から推して10世代に比定できると考える。

掘立柱建物群は、東と南を丘陵に囲まれ、北は古香宗川が流れ、西には湿地帯が広がり、河川などの影響を受けにくい、しかも台風が頻繁に上陸する土佐にあって暴風雨から守られやすい丘陵縁辺部の微高地にある。南を正面に建物群は、一部調査区外に出るが約100m四方の正方形に近い空間に配置されているとみてよい。建物は主軸を真北から約30°西に振って建てられているが、立地条件に左右されてのことと考えられる。

以上のことから、前半期の掘立柱建物群は、墨書土器、硯、木簡等を検出できなかったことなどから地方官衙跡とは言えないまでも、時代は少し下がるが『倭名類聚鈔』に記載のある「大忍郷」の豪族の館である可能性が多分に強いといえることができるのではなかろうか。

SD2より検出された石鏝は、この種のものとしては四国で初めての検出であり、後半期の掘立柱建物に伴うと考えられる。従って、SB3も前半期の建物と同様に、古代地方行政に関係を持った有位の豪族の館として位置付けることができよう。

繁栄した前半期から衰退した後半期へと何が故に移行するのか等大きな問題を投じた本遺跡であるが、いずれにしても掘立柱建物群は律令国家における土佐の古代史を解明する上ではもちろん、全国的にも律令国家の実態を解明する上できわめて重要な意味をもつものと思われる。

(高橋 啓明)

第3節 中・近世

1. 遺物

ここでは、出土遺物の中で最も多かった土師器について、一括性の強い出土状況を示し、かつ量的にも比較的保障されているSK11とSD1床面出土のものを取り上げ、形態・器種構成等の観点から検討を行い、両者の諸特徴を明らかにしたい。共伴している青磁等からSK11は14世紀代に、SD1床面の土器は15世紀に比定できるものである。従って、両者の諸特徴と差違を示すことは、14～15世紀段階における土佐の供膳土器の変化を明らかにすることに他ならない。

SK11は、前章で行った分類によると椀、杯B1・B2・B3a類、皿C2・C3・C4・C5類から構成されており、個体数や比率は表-6のとおりである。退化した高台を持つ椀が1点見られる他は、杯と皿によって構成される。杯が16.2%、皿が82.9%で皿が圧倒的に多くを占めている。杯ではB2類が76%を占めており、B2の口径は11.4～12.2cmの間に、器高は3.4～4.2cmの間におさまっている。皿はC2類が48%、C4類が31%、C3類が19.5%を占めており、C2～C4類共に口径はほぼ11～13cmに、器高は3～4cmの間におさまる。杯B2・皿共に器高指

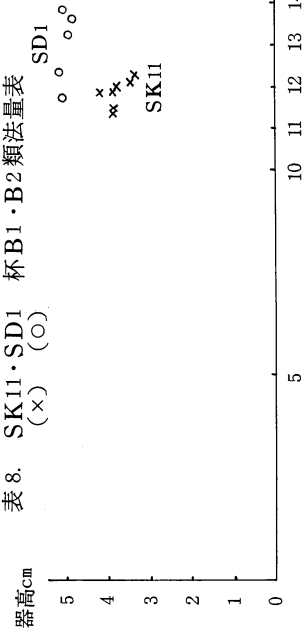


表 9. 皿 D1・D2 類法量表

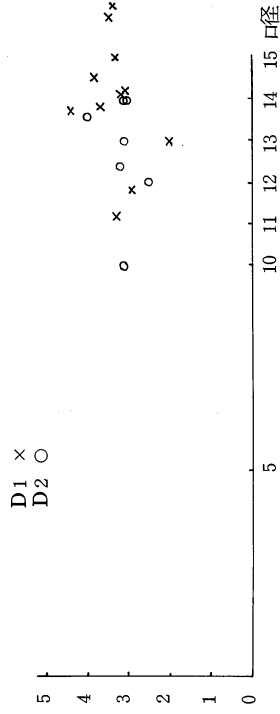
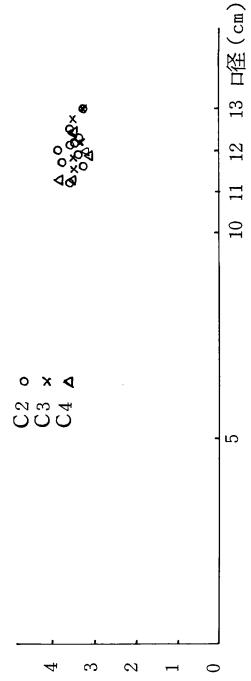


表 10. SK11 皿 C 類法量表



器種	型態	点数	型態別 %	器種別 %
碗	R2	13	76	0.9
	B3a	4	24	
	小計	17	100	
皿	C2	42	48	82.9
	C3	17	19.5	
	C4	27	31.0	
	C5	1	1	
	小計	87	100	
合計	105	100		

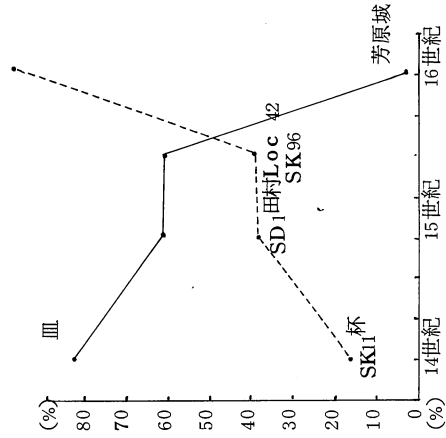
表 6. SK11 器種・器型別分類表

器種	型態	点数	型態別 %	器種別 %
杯	B1	8	80	38.5
	B36	2	20	
	小計	10	100	
	D1	6	37.5	
	D2	10	62.5	
小計	16	100	61.5	
合計	26	100		

表 5. SD1 床面出土器種・器型別分類表

器種・器形	個数	%
碗	1	0.9
杯 B1・2	13	12.4
杯 3a	4	4
C2	42	40.0
C3	17	16.2
C4	27	25.7
C5	1	0.9
合計	105	100.1

表 5. SK7 器種



図一 1 供膳具組成變化曲線

数は30を示し、法量は各土器間でばらつきが少ない。

SD1床面出土の土器は、杯B1・B3b類、皿D1・D2類から構成されており、個体数や比率は表-5のとおりである。杯が38.5%、皿が61.5%で、椀や皿C類は全く見られない。杯の中ではB1類が80%、皿ではD1類が37.5%、D2類が62.5%を占めている。杯B1類の器高は、4.9cm~5.2cmの間におさまっているが、口径は12.7cm~14.8cmとかなりのばらつきが見られる。器高指数は40を示す。皿D1類の口径は、11.2cm~16.4cm、器高は2cm~4.4cmを示し、D2類の口径は10cm~14cm、器高は2.5cmから4cmを示し、法量にばらつきが多く規格性に乏しい。

SK11とSD1床面出土の土師器を比較すると、SK11では、椀が残存しているがSD1では見られない。杯は、SK11ではB2類とB3a類からなり、口径・器高共に比較的規格性が保たれているが、SD1ではB1類とB3b類に変化しており、SK11の杯に比して規格性に乏しく、法量も増大する。両者における差違は、型態・法量のみならず色調・胎土も大きく異なっている。すなわち、SK11のそれが乳白色であるのに対して、SD1の杯は赤く発色している。皿は、SK11がすべて丁寧なつくりで規格性の強いC類であるのに対して、SD1の皿は、C類に比して口径が著しく大きく規格性が全く見られない。SK11は、共伴の青磁片等から14世紀に時期比定することができる。本県ではこの時期の良好な資料が欠如していたために、今後この方面の土器編年を進めていく上で重要な資料となるものである。SD1床面出土の資料は、形態等から15世紀に比定できるものであり、芳原城跡や田村遺跡群Loc42のSK96等の出土土器と比較することによって更に細かな時期設定を行うことが可能となる。ここでは、明応二年(1597)銘のある護符が出土して実年代を把むことができる芳原城出土の土器と比較する。芳原城跡から出土していて、当遺跡に見られないものとして、ロクロ成形の皿(皿B類)を挙げることができる。ロクロ成形の皿は、同じ15世紀に位置付けられている田村遺跡群Loc42のSK96・Loc43 SD1からは、出土していない。このことについて松田直則氏はロクロ成形による皿の出現を「16世紀前半頃からの土器生産」における画期として位置付けており、芳原城の例は、その初現とすることができる。⁽¹⁴⁾ 同氏はまた時代が降るにつれて杯の底径が細くなることを指摘しているが、Loc42のSK96では底径が5cm前後であるのに対して、SD1の例は6~7cmを測り古い様相を示している。従って、SK96に先行するタイプとすることができよう。今仮に15世紀の杯・皿の編年を古・中・新として表わすならば、SD1床→田村Loc42 SK96→芳原城跡とすることが可能である。三者における皿：杯の構成比を示すとSD1床が61.5%：38.5%、芳原城跡が2.5%：97.5%となり、時代が新しくなるにつれて、皿が減少し杯が増加している。これに14世紀のSK11の杯・皿をも加えて、変化をグラフ(供膳具組成変化曲線)に表わすと図-1のようになる。この変化のあり方は、供膳形態に現われた食生活様式の変化を表わすものであり、今後いかなる歴史的背景に生じた変化なのか追求しなければならない問題である。

2. 遺 構

今次調査で検出した中・近世の遺構は、掘立柱建物43棟・土壇15基・溝11条を数える。これらの遺構すべてについての所属年代や性格を明確にすることはできないが、出土遺物等によって、遺構の時期を示すと表6のようになり、十万遺跡の変遷の大略を把むことが可能となる。ここでは、中・近世検出遺構の全体の流れをⅠ期～Ⅳ期に分け、各期に展開した遺構の性格について若干の考察を加え、且つ諸画期を明らかにし、十万遺跡の歴史的な位置づけを行いたい。

表 11. 中・近世遺構変遷表

時期	14 世 紀	15 世 紀	16 世 紀	17 世 紀
		SA 3~6		
	SB 20. 21	SB 30. 52 58	SB 18 (A群) 22~29 31 32 (以上B群) 34~38 43~46 (以上C群) 40~42 47・48 (以上D群) 50~58 (以上E群) 39	SB 49 33
		SK 11 12 21 34 35	SK 10 29~31 49・53・55	
		SK 13~15・22 27・40・42 SD 1・4	SD 3・6・8・12	

Ⅰ期：SB 20・SB 21 を挙げるができる。SD 2 によって画されていた古代の遺構が完全に廃絶された後に出現した最初の中世遺構である。出土遺物が僅少なために詳細な時期決定は不可能であるが、SB 21 出土遺物からSK 10 に後出し、SK 11 に先行する時期のものである。SB 20・21 については、棟方向を共有し1間×3間の同規模の建物であること以外には具体的な事を明らかにすることができないが、後出する掘立柱建物に比べて一回り大きな柱穴であることから推定して一般農民の住居とは考え難い。さらに、平野の中にいわば単独で存在することから穀倉的なものを想定することが可能である。

Ⅱ期：SB 30・52・58、SK 11・12・21・34・35 を該当させることができる。SK 11・12 の一括出土遺物から、その時期を14世紀に求めることができる。Ⅰ期に比べて施設が増し、調査区の西にSB 30が東端にSB 52・58が建てられる。土壇は掘立柱建物との位置関係から。SK 11・12はSB 30にSK 21はSB 52に、SK 35はSB 58にそれぞれ付属する土器等の廃棄土壇と考えられる。SK 34は、平面形・規模等から見て性格の異なるものであろう。この時期は、大忍庄に百姓名が成立・発展していく時期であり、これらの諸遺構は中世前期荘園制下の景観の一環をなすものである。

Ⅲ期：この時期は、十万遺跡の最盛期として位置づけることができる。すなわち、掘立柱建物・土壇共に飛躍的にその数を増加させ、これらの遺構の多くは、SD 1・SD 2 によって二重

に囲繞される。

掘立柱建物は、西からA群～E群の5群から構成されている。A群はSD1の外に位置し、SB15～19の5棟が存在する。これらの中で確実に時期を決定できるものは、SB18だけであるが、他の建物もほぼ同時期か相前後する時期の建て替えと考えられる。B群は、C群と共にSD1とSD2の間にあり、その西半分位置する。まず先端に柵SA3があり、これから8mの空間を隔てて、SB22～29・31・32の掘立柱建物及びSK13～15が存在する。掘立柱建物では、出土遺物及び棟方向からSB23・SB32とSB24あるいはSB25が同時存在していたと考えられる。SB32は、3間×3間の規模を有し、B群において中心的な存在であり、SB24あるいはSB25はそれに付属する建物である。またSB23は1間×5間であり住居的な性格は考えられず、他の機能を想定しなければならない。SK13～15は、これらの建物に関連のあるゴミ捨場的な土壌であるが、SK15はSB32内に造られた屋敷内土壌の可能性もある。C群は、B群の東にあり掘立柱建物SB34～38・43～46がある。出土遺物や棟方向からSB36・43・46の3棟が同時存在している。前二者は住居と考えられるが、SB46は1間×3間であることから住居以外のものを考えなければならない。D群は、SD4に囲繞された中の西半部にある。SB40～42・47～48があるが、同時存在はSB40～42・47で、SB47が中心となる建物である。またSB47の西には、SA5が走っている。E群は、D群の東に位置し建物群の中では最も奥まったところであり、掘立柱建物はSB50～58の9棟を数え建物群の中では最も多い。土壌はSK22・27・51である。同時に存在した建物を抽出するとSB54・52・50(a群)とSB51・53・58(b群)を挙げることができるが、両群の先後関係は不明である。しかしながらa群においては、2間×4間の規模を有する大型住居のSB54と小規模のSB50・52が存在している。土壌は各建物に近接して存在しているところから、建物に付随的なものと考えられる。これらの他にSD4の西にSB39が単独で建っている。以上A～E群の掘立柱建物及び土壌について述べた。A群はSD1の外側にあつて、小規模な建物が繰り返して建てられている。B・C群はSD1に、D・E群は、SD1・4に囲繞されている。SD1は住居群を囲む外堀、SD4は内堀として位置付けることが可能で、SD4はSD1よりも規模が大きく、底には大小の河原石を敷いている。外堀りに囲繞せられる推定面積は5,000㎡(5反)を測る。

かかる諸遺構は、15世紀から16世紀にかけて全国的に出現を見るところのいわゆる方形館であり、その規模からすると「重濠複郭式屋敷城」とすることができる。B～E群は、各々1棟⁽¹⁶⁾の大型建物を核として2～3棟の小規模な建物で構成される。大・小両者における差違は、居住者間の階層差に起因するものに他ならない。さらに群の中でもその規模、占地によって序列化することが可能であり、最も中心的な群をE群に求めることができる。当方形館の存在した15世紀前葉は、大忍庄内において脇名の成立や名主層の小領主化の進行等に見られるように著しく在地勢力が強大化し、荘園制そのものを崩壊せしめる構造的変質を遂げる時期である。名主間相互においても山川氏のような「新興の武士的農民」の出現等、対立と矛盾が激化⁽¹⁸⁾

する時代であった。かかる緊張の中に方形館出現の歴史的背景を求めることができるのである。すなわち、領内の支配権と生産地代の収奪を維持、発展させるための軍事的色彩を濃厚に帯びた支配機構の拠点とすることができよう。この方形館を見降すことのできる周辺の人々には、東十萬城、十萬城等が点在するが、これら山城と如何なる関係があったのか、今後追求されるべき課題である。

すでに述べたように、外堀、内堀や館を構成する諸遺構は、15世紀前葉のうちにすべて廃絶される。しかしながら方形館の終焉が何に起因するのか直ちに明らかにすることはできないが、上記の緊迫した社会的状況を考慮に入れずにはおけない。

Ⅳ期：十萬遺跡の終末期として位置付けることができる。検出遺構は、掘立柱建物がS B 33・49の2棟、土壇がS K 16、29～31、49、53、55の7基、溝がS D 3、6、7、8、12等を挙げることができ、時期的には16世紀から17世紀前葉に求めることができる。Ⅲ期に比べて極端な減少であり、急激な衰退振りを見せている。土壇の中でS K 29、30、53は、床面及び埋土中に河原石が数個置かれており、田村遺跡群に見られた同様の遺構から墓壇と考えることができる。溝はⅢ期に見られた住居を囲繞するようなものとは全くその性格を異にする灌漑用水的なものと考えられる。以上のことからⅣ期は、小規模な掘立柱建物が散在し、一部に墓地が見られる田園と化し、閑散とした近世農村の景観を呈するに至る。

以上、中・近世における十萬遺跡の消長について述べた。Ⅰ期の実年代を明らかにすることはできないが、Ⅱ期を発展期、Ⅲ期を全盛期として位置付けることができる。わけてもⅢ期は一大画期をなすものである。この方形館については、田村遺跡群の事例や島田豊寿氏の諸研究、その他大忍庄についての先学の研究との比較検討や整合を図らねばならないが、後日に期したい。ともあれ、周辺地域における方形館の検出は、県下で初めてのものであり、中世後期の農村構造を復元する上で重要な資料となる。

(出原 恵三)

註

- (1) 従来は、平安時代までのものを土師器、鎌倉時代以降のものを土師質土器と呼称してきたが、土器の性格・形態において両者を明確に分別することができないので、ここでは中世に属するものも土師器と呼称する。
- (2) 小林行雄「弥生土器研究の前に」『考古学』第4巻第8号
- (3) 香北町教育委員会『高知県美良布遺跡発掘調査報告書』1970年
- (4) 岡本健児『高知県史考古編』1968年
- (5) 香我美町教育委員会『下分遠崎遺跡』1987年
- (6) 土佐山田町教育委員会『高知県ひびのき遺跡』1977年
- (7) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』1983年

- (8) 松田直則氏の教示による。
- (9) 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小村行雄博士古稀記念論文集
平凡社 1982年
- (10) 元井能『日本被服文化史』 光生館 1969年
- (11) 佐藤興治『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報23冊 1974年
- (12) 阿部義平「鈿帯の官位制について」『東北考古学の諸問題』1976年、斎藤忠編集『日本考古学論集』2. 1986年所収
- (13) 『倭名類聚鈔』によれば、土佐国には7郡43郷があり、さらに香美郡には安須・大忍・宗我・物部・深淵・山田・石村・田村の8郷があったことが記載されている。
- (14) 高知県教育委員会『芳原城跡発掘調査報告書』1984年
- (15) 松田直則「高知県における中世土器の様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ 日本中世土器研究会 1987年
- (16) 橋口定志「中世方形館を巡る諸問題」『歴史評論』1984年2月
- (17) 松本豊寿『城下町の歴史地理的研究』吉川弘文館 1967年
- (18) 山本大『高知県史古代・中世編』高知県 1971年

図

版



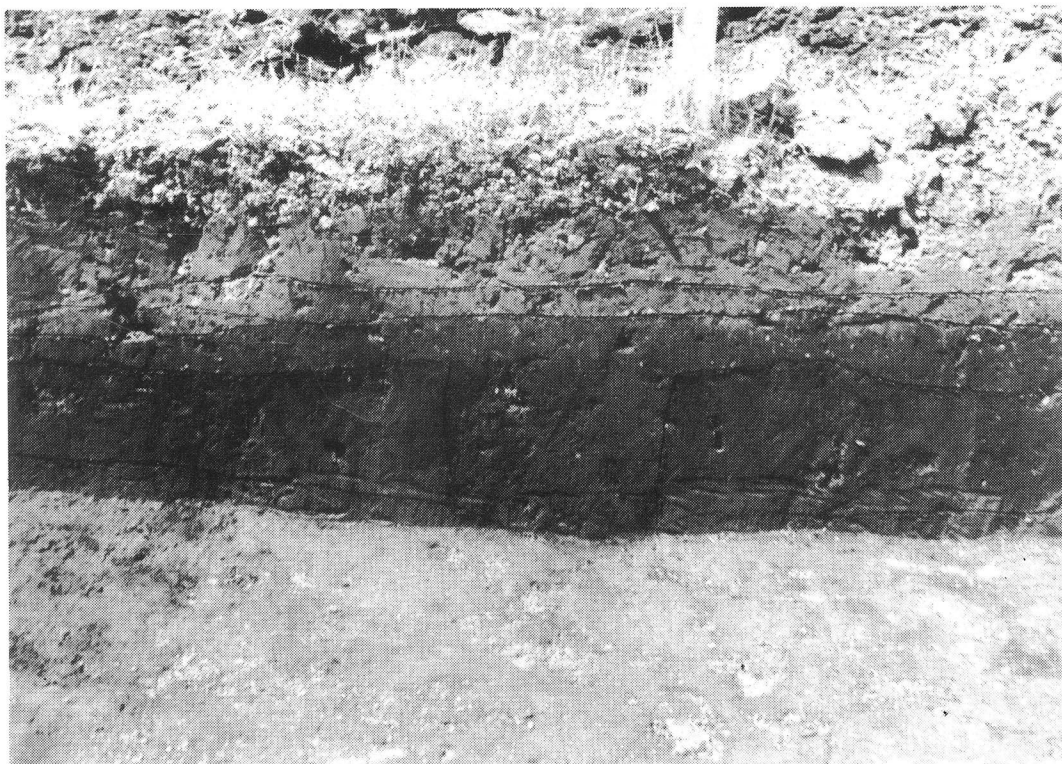
調査前全景（東南方向より）



同上（東方向より）



Aトレンチ 遺構検出状態



Aトレンチ 北壁セクション



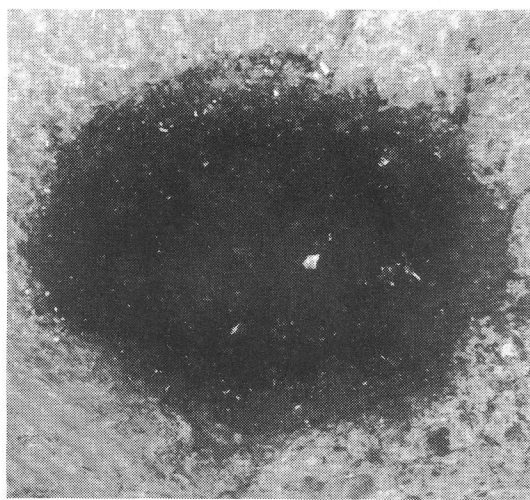
Aトレンチ 北壁セクション



SK 43 完 掘



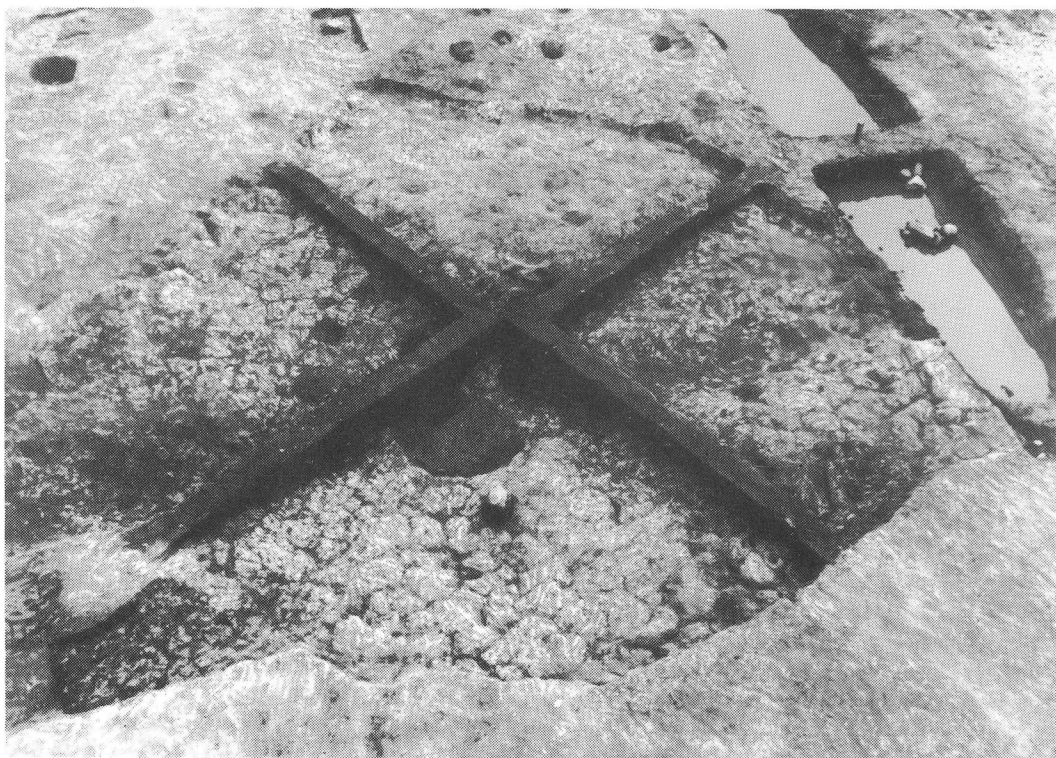
SK 24 完掘状態



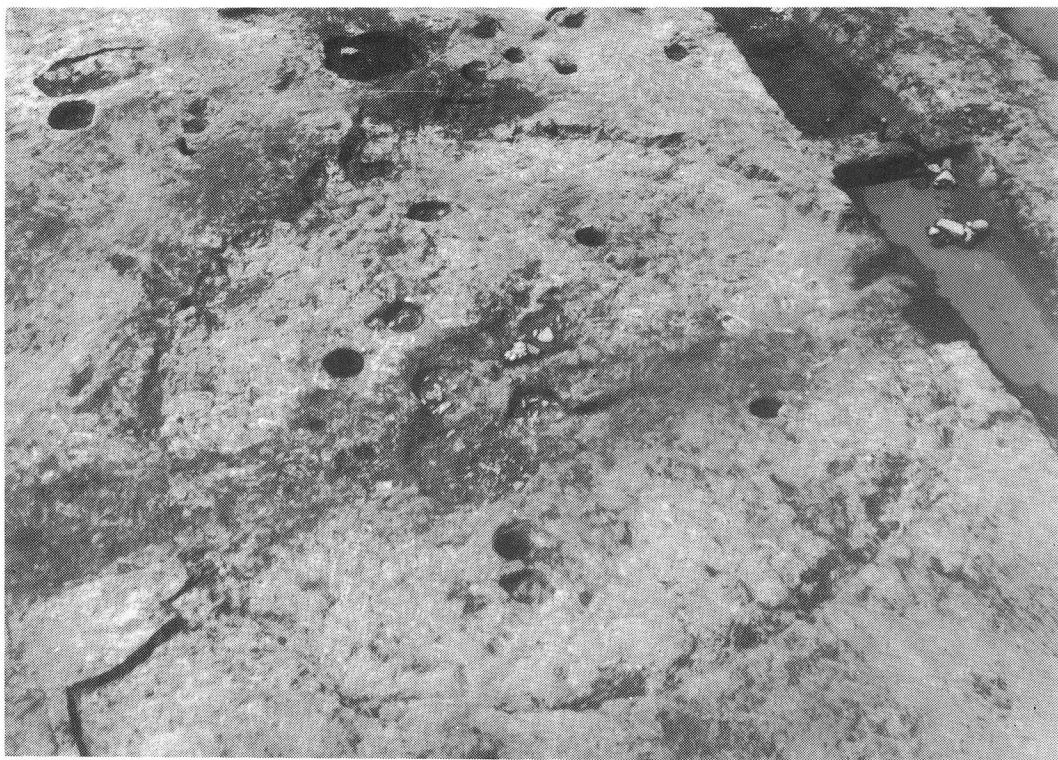
SK 24 検出状態



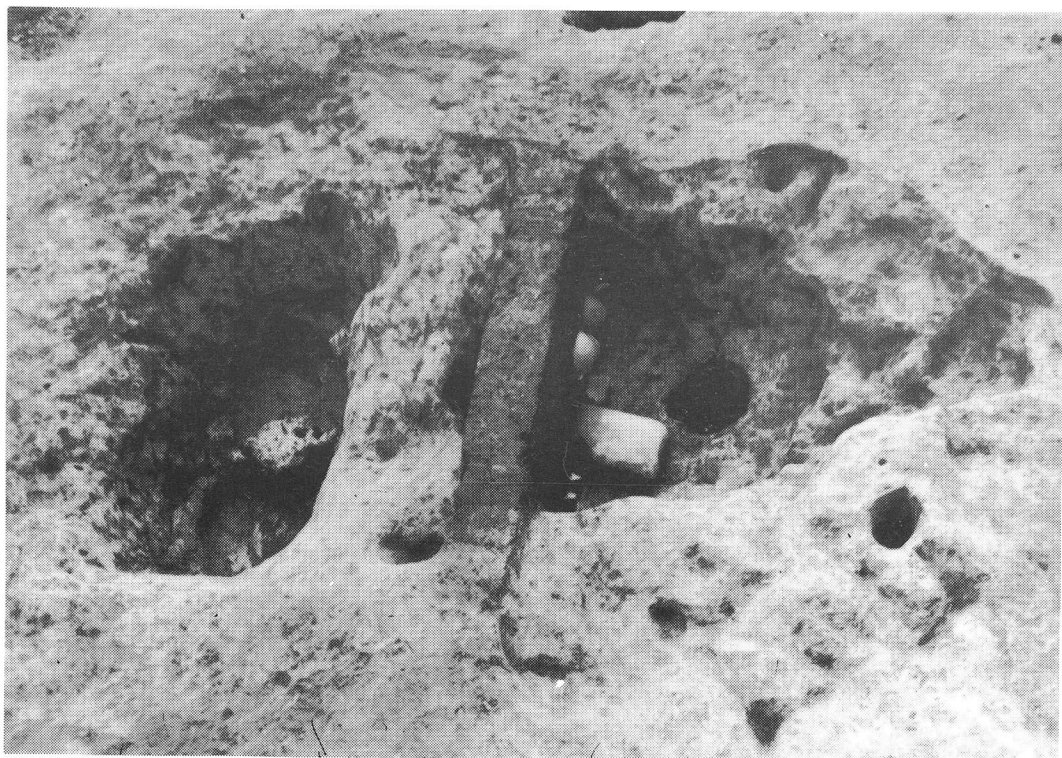
SK 24 縄文土器出土状態



ST 1 バンクセクション



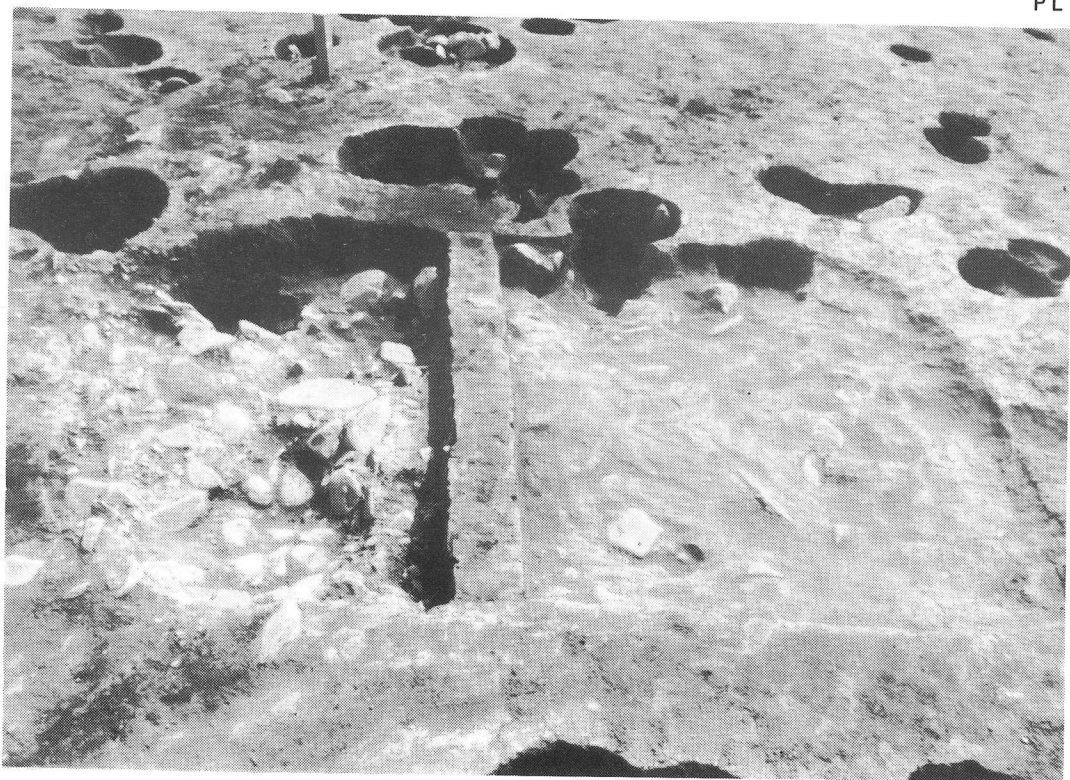
ST 1 完掘状態



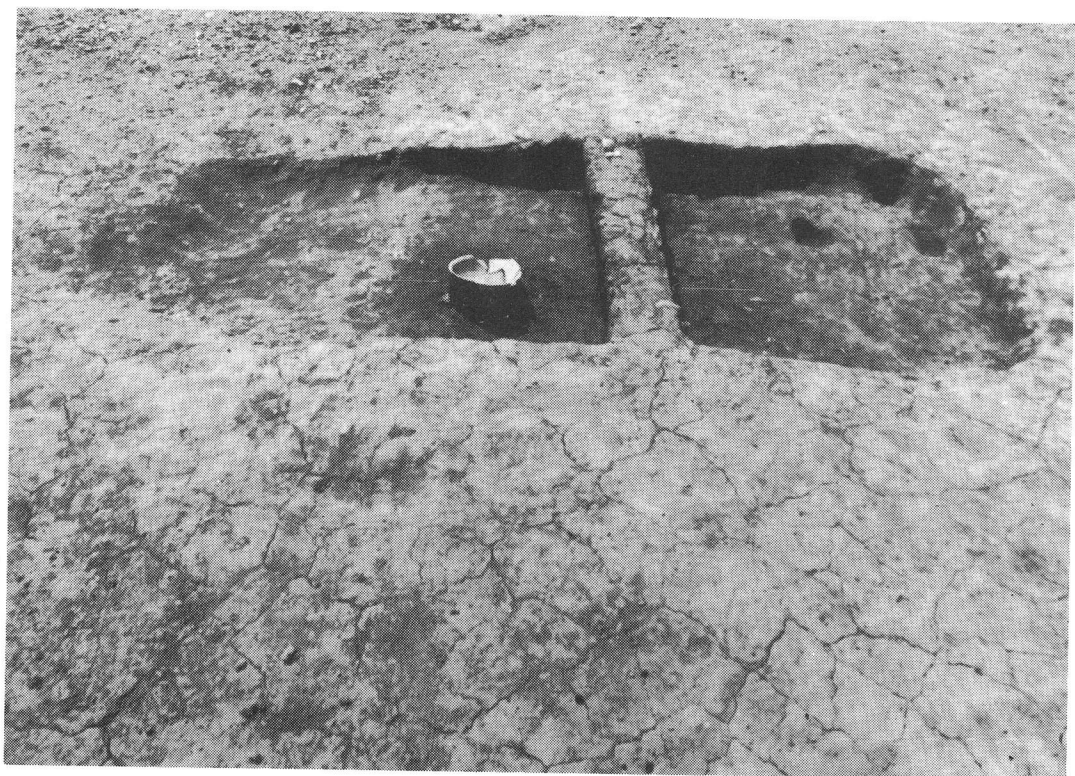
SK 2 完 掘 状 態



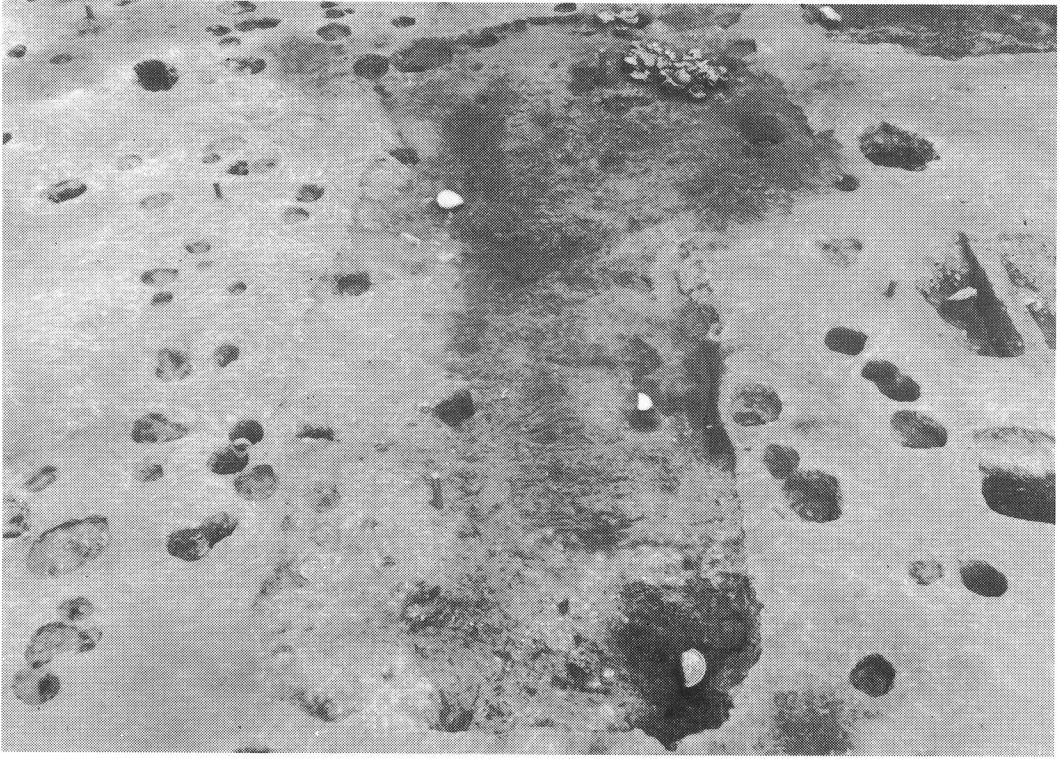
SK 2 土 器 ・ 石 器 出 土 状 況



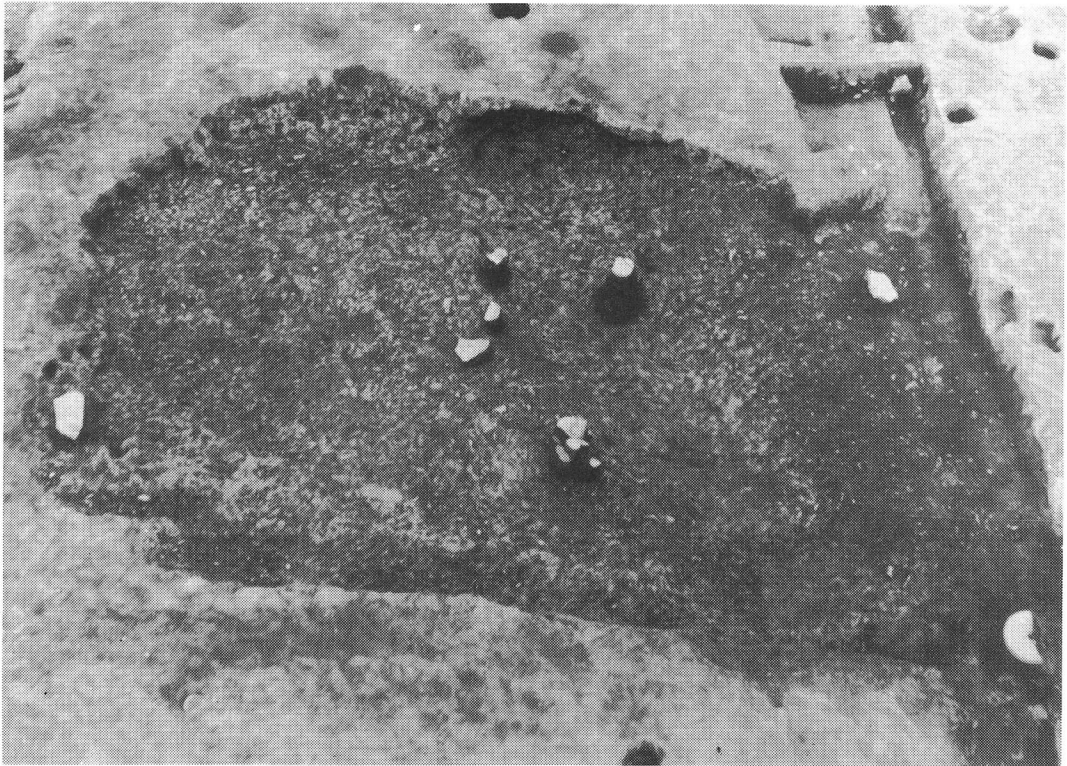
SK 1 完 掘 状 態



SK 10 完 掘 状 態



ST 3 • ST 4 完 掘 状 態



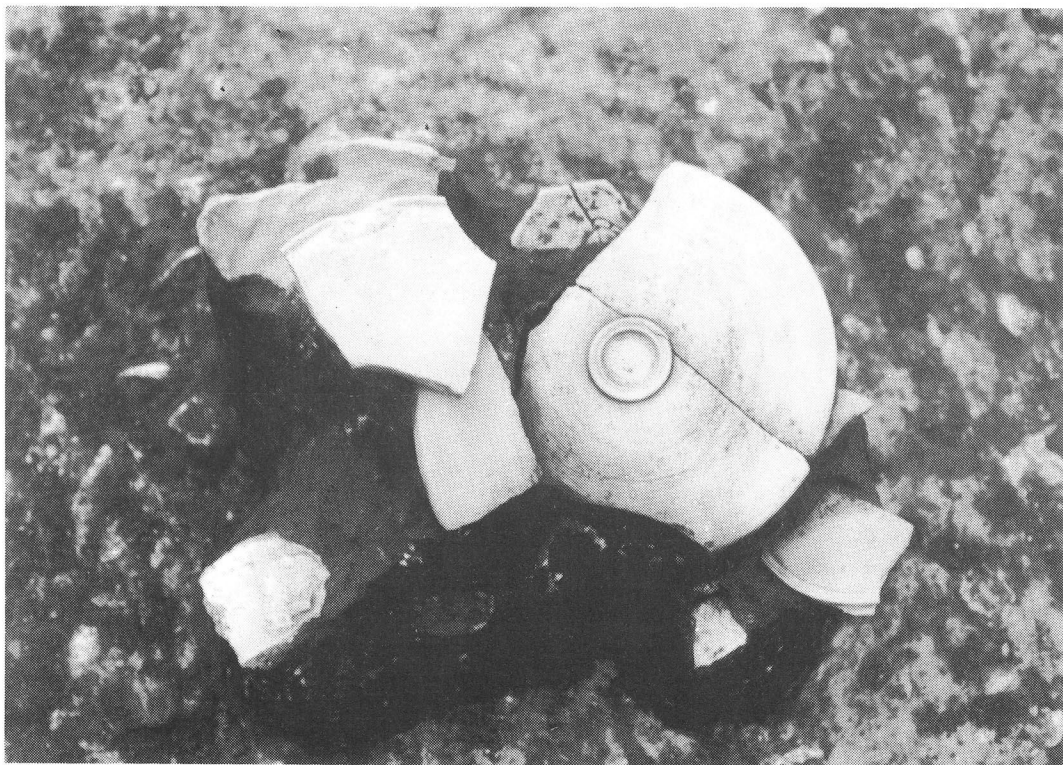
SK 50 完 掘 状 態



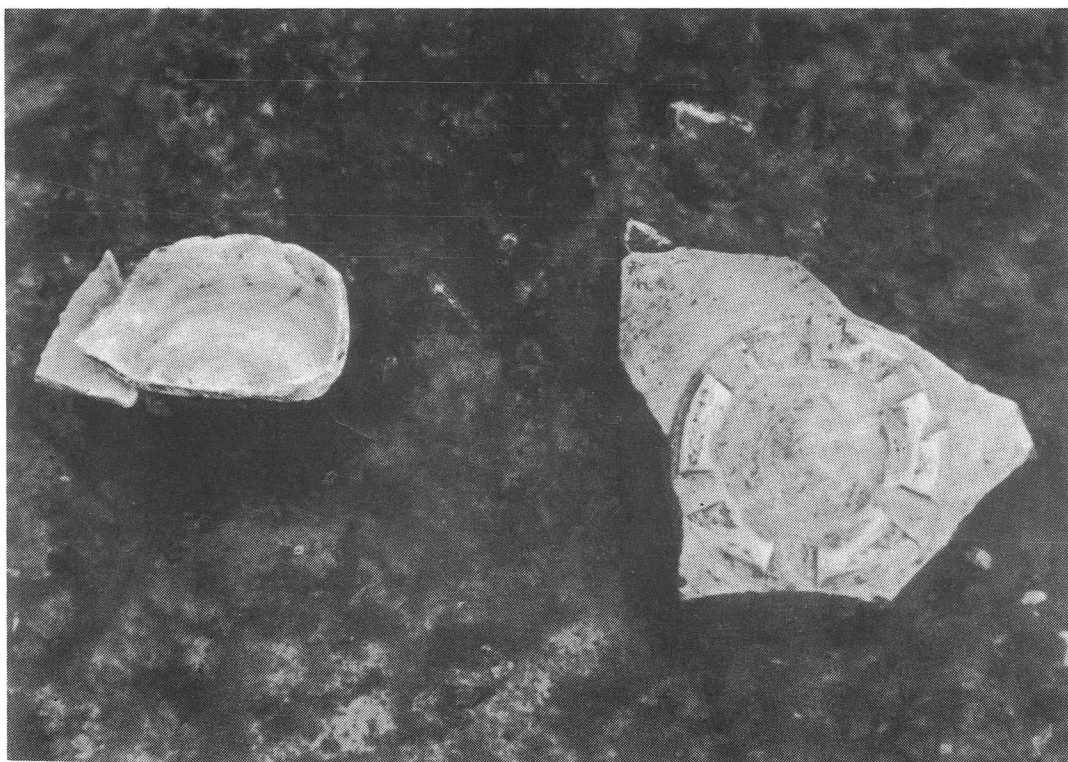
ST 4 土器出土状態



同 上



SK 50 土器出土狀態



同 上



SB 5 検出状況



SB 6 P 5 半截



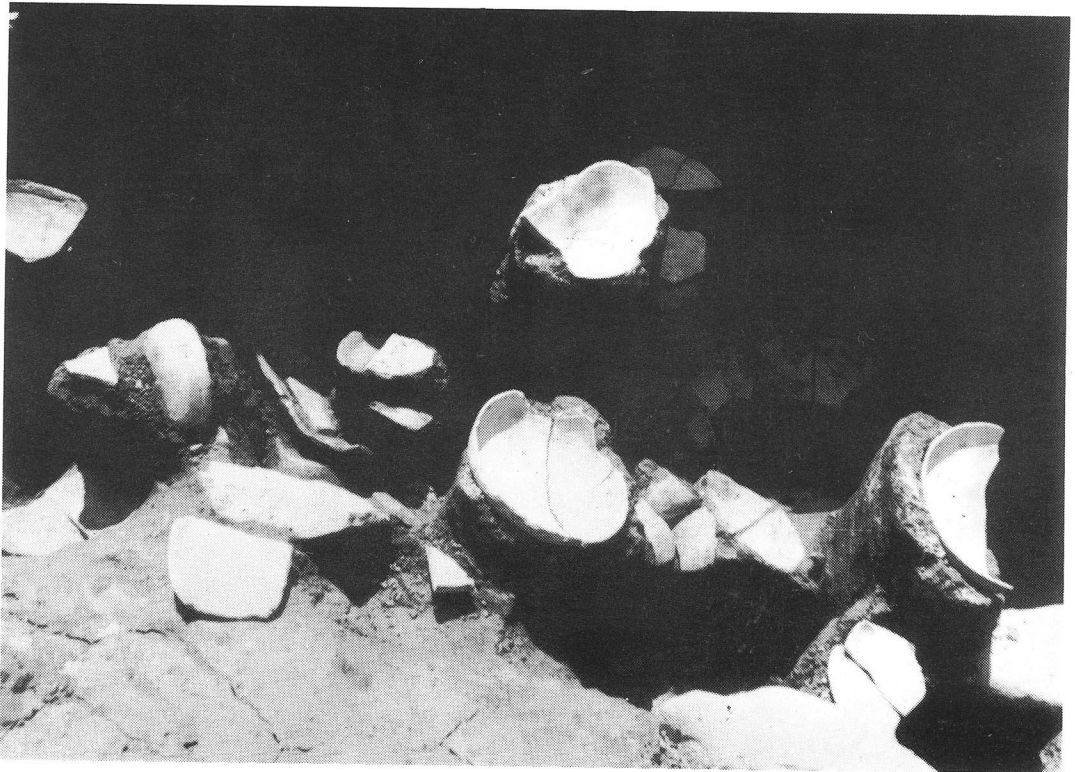
SK 11 土器出土状態



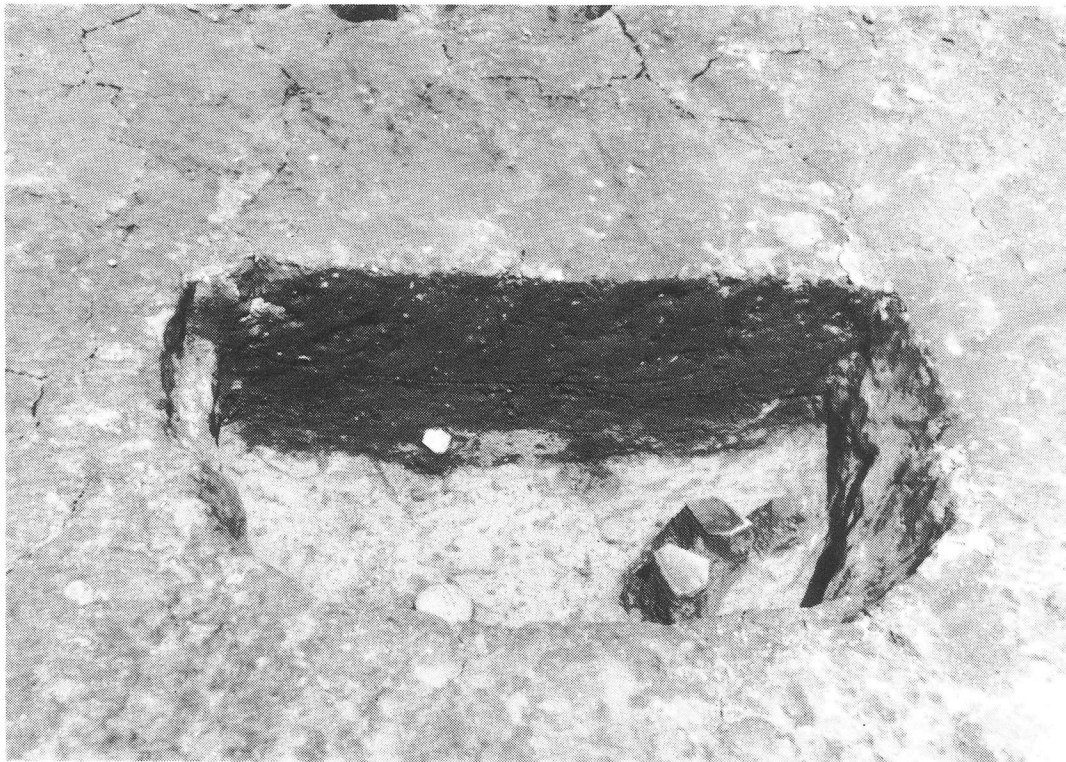
SK 11 西壁セクション



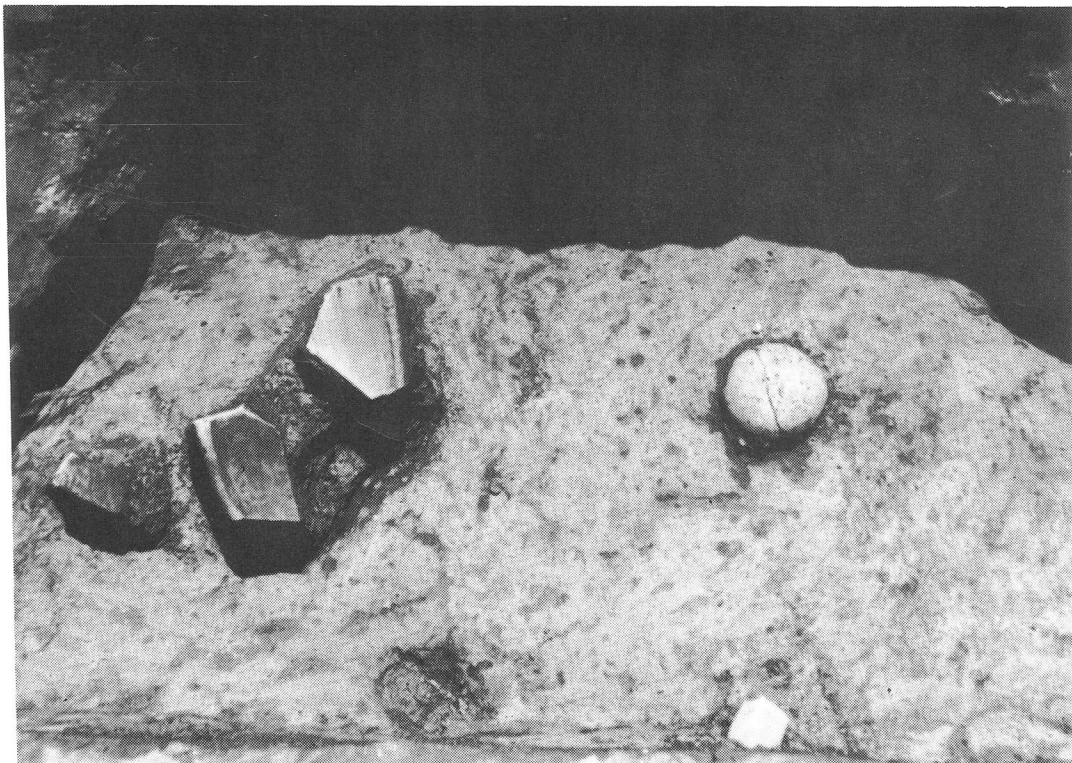
SK 11 土器出土状態



同 上



SK 12 西壁セクション



SK 12 土器出土状況



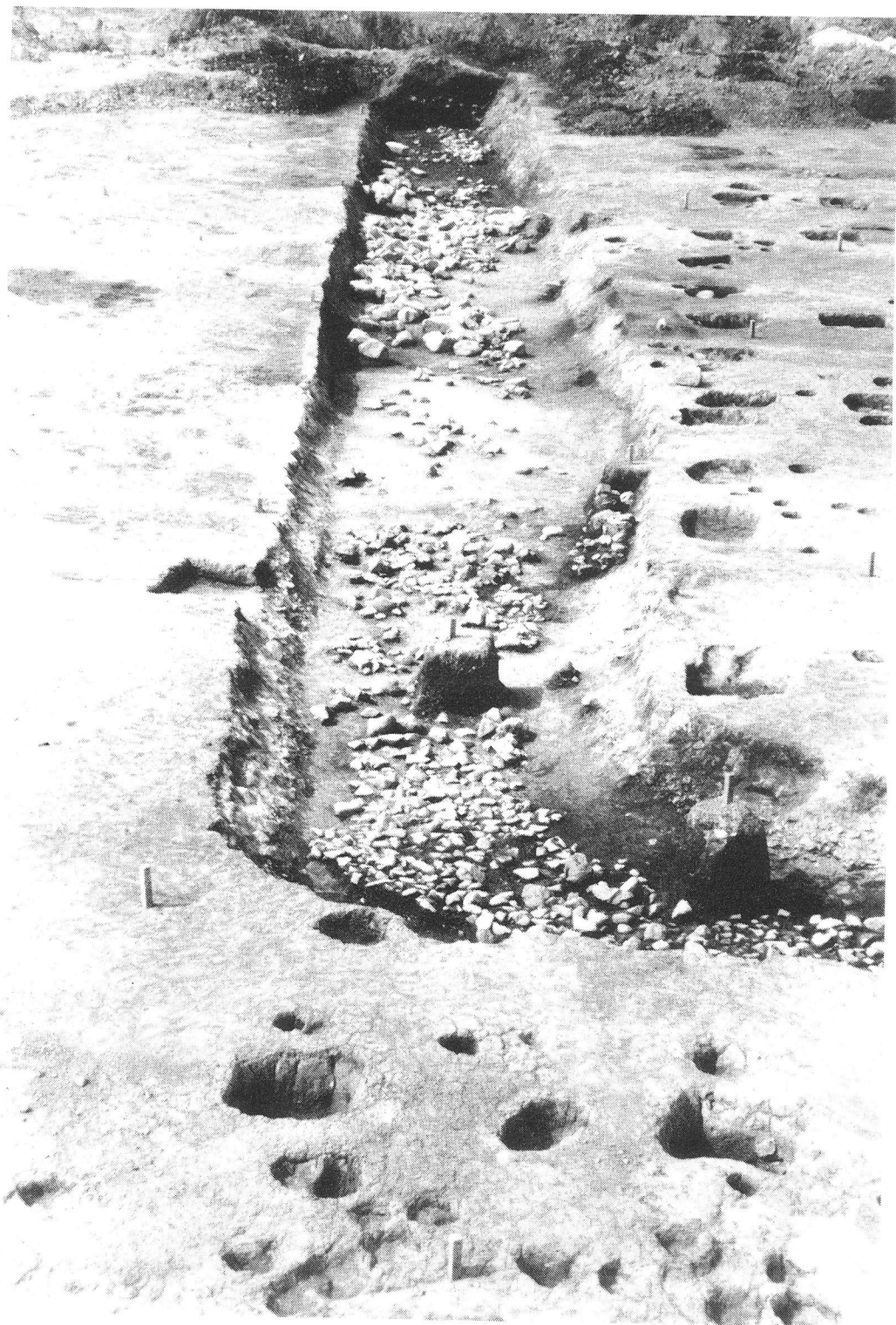
SK 15 土器出土状態



SB 58のP1 土器出土状態



SD 1 礫出土状態



SD 4-A 完 掘 状 態



SD 1 バンク(A-B)セクション



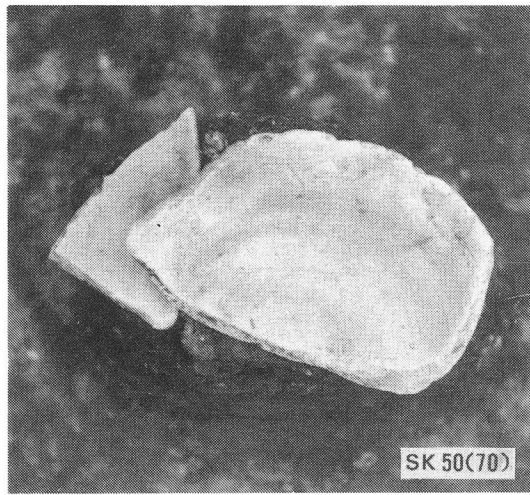
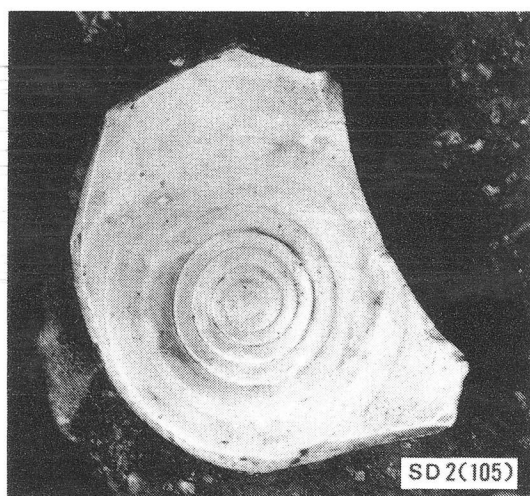
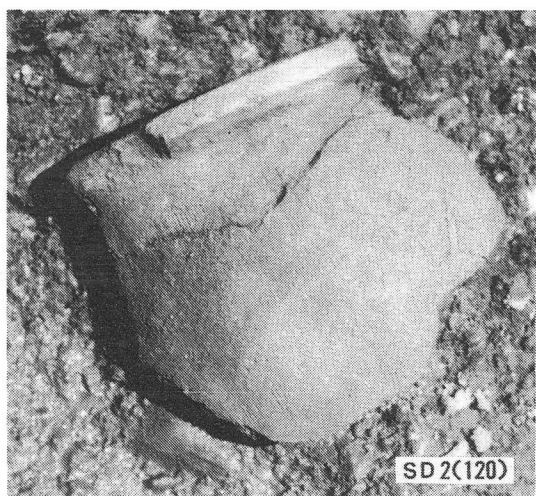
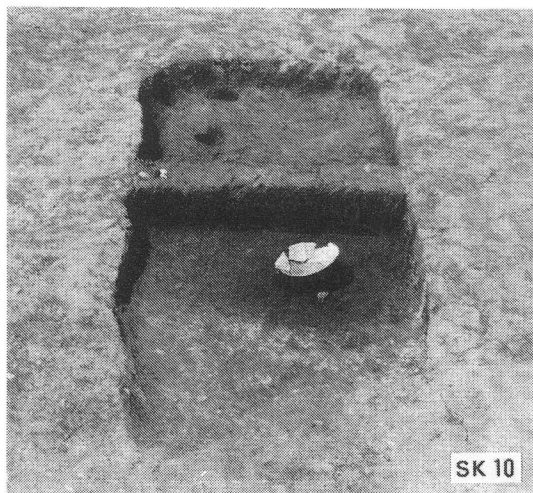
SD 1 バンク(C-D)セクション



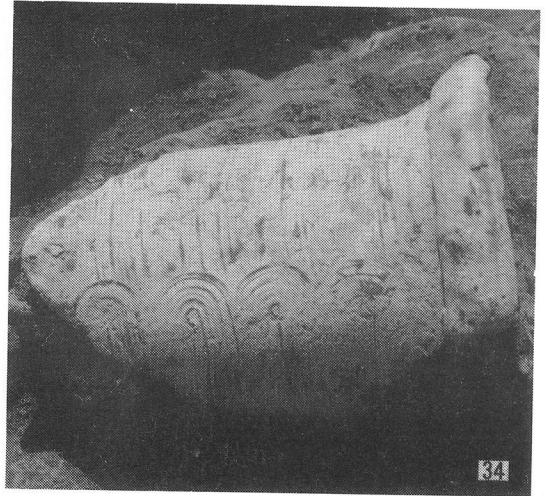
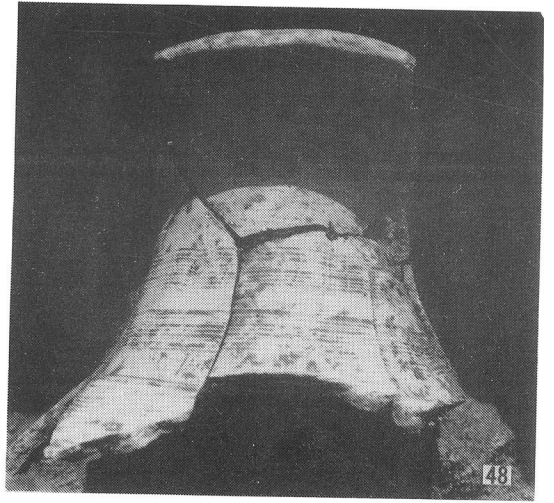
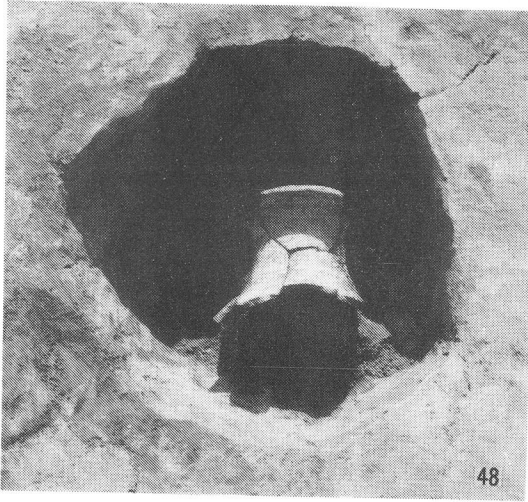
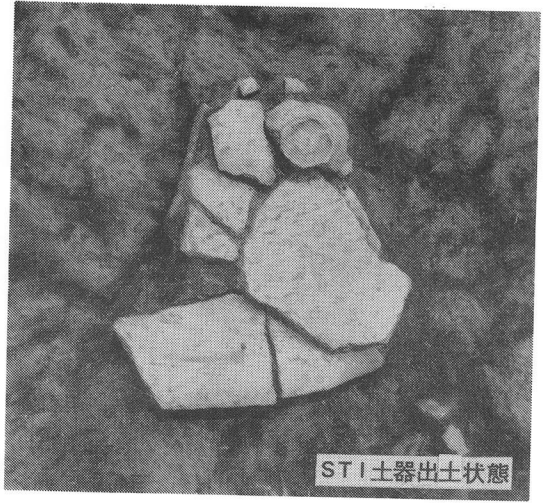
SD 1 遺物出土狀態



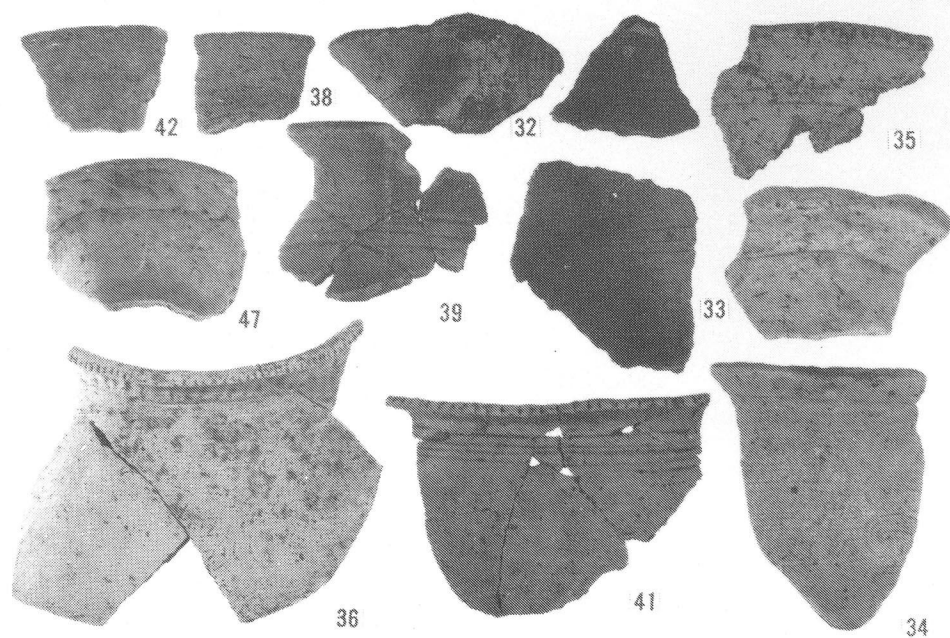
同 上



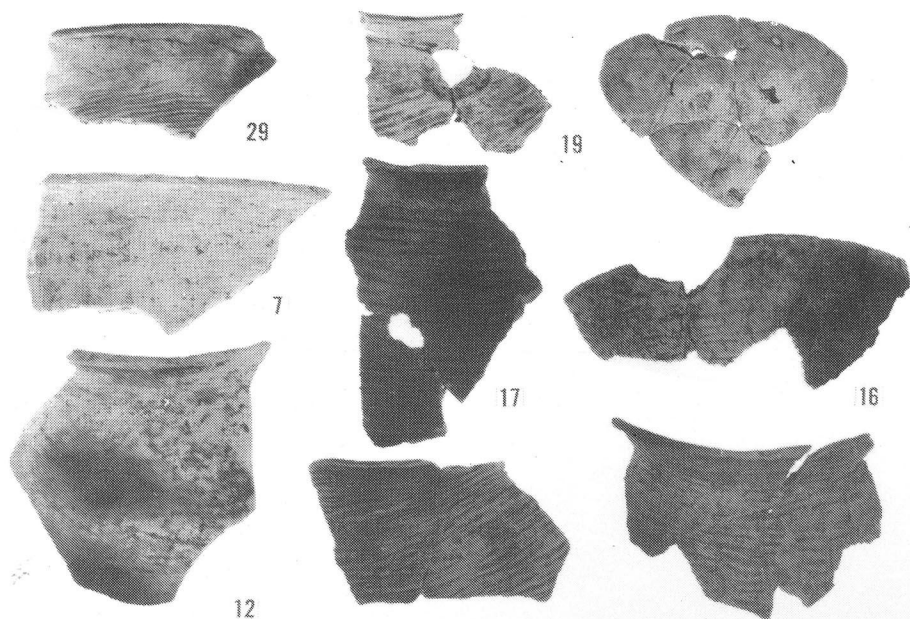
SK 10・SK 50・SD 2 遺物出土状態



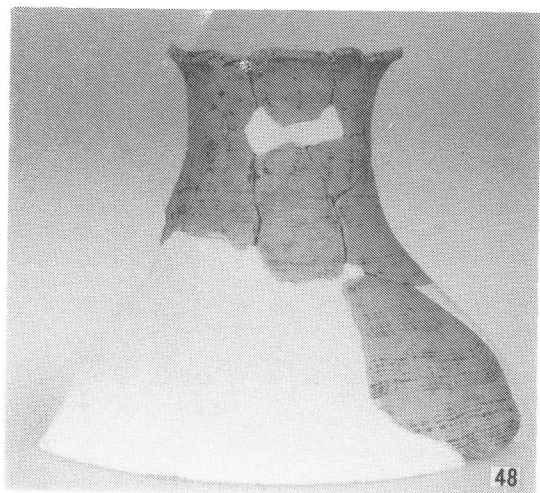
土壌セクション・遺物出土状況



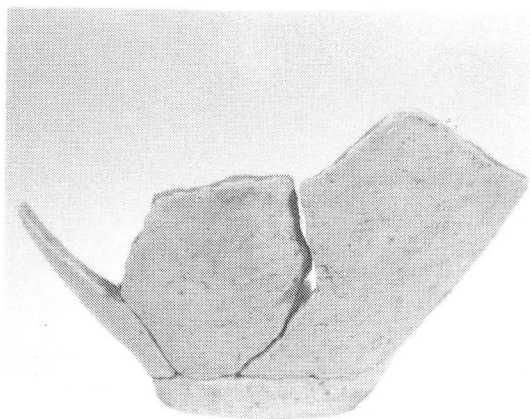
弥生前・中期土器



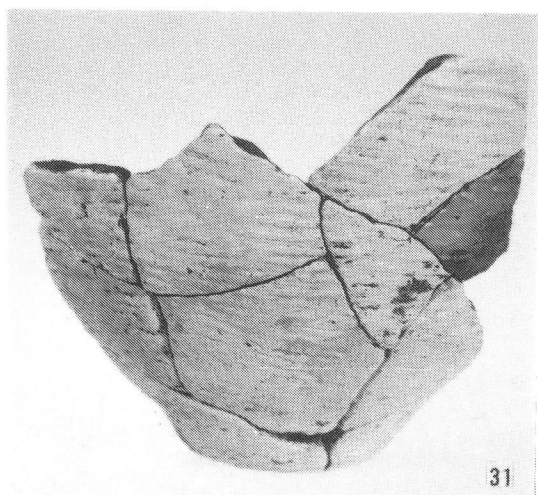
弥生後期土器



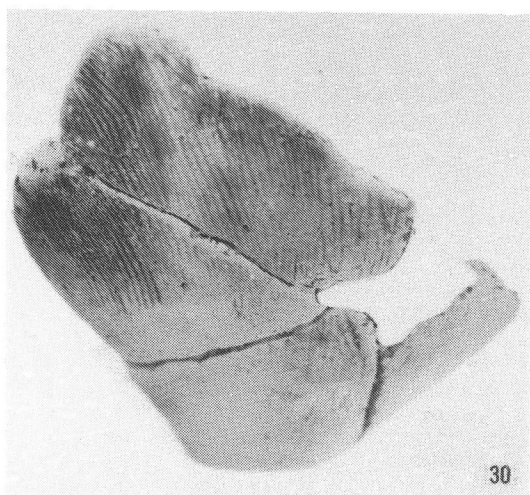
48



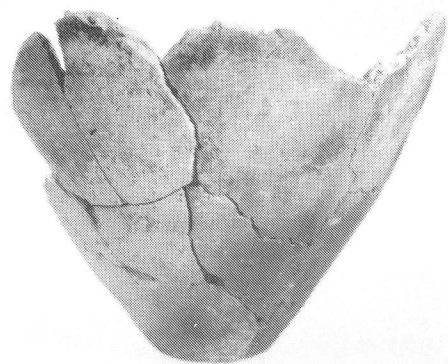
37



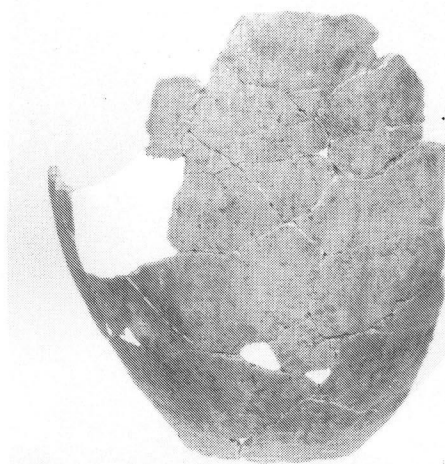
31



30

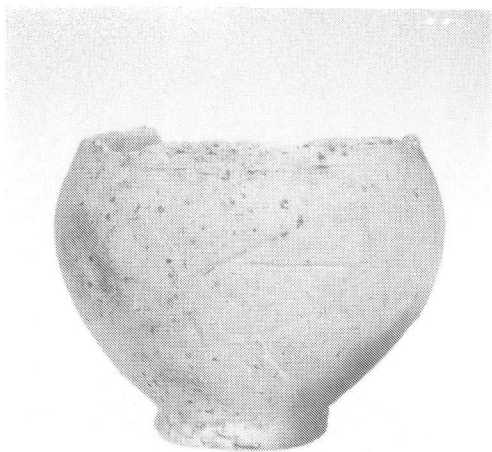


13

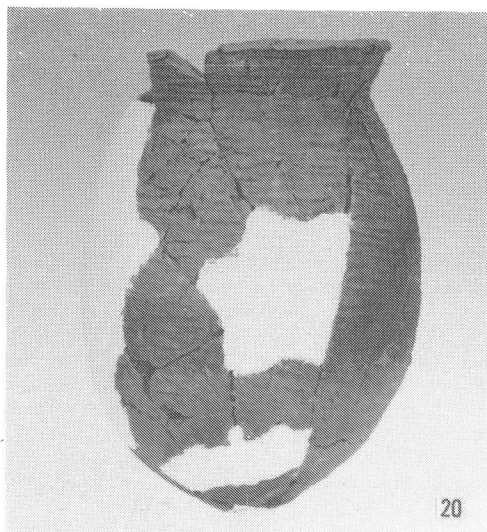


46

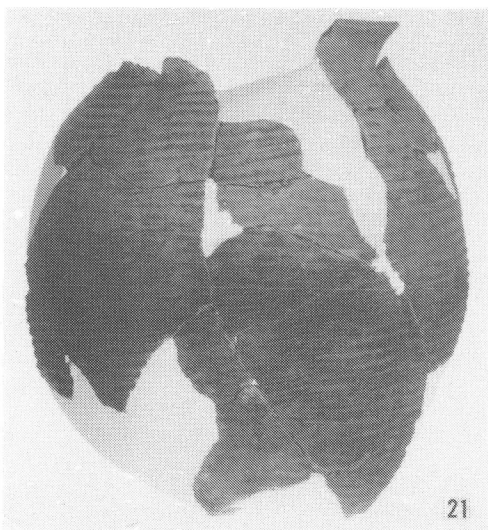
弥 生 土 器



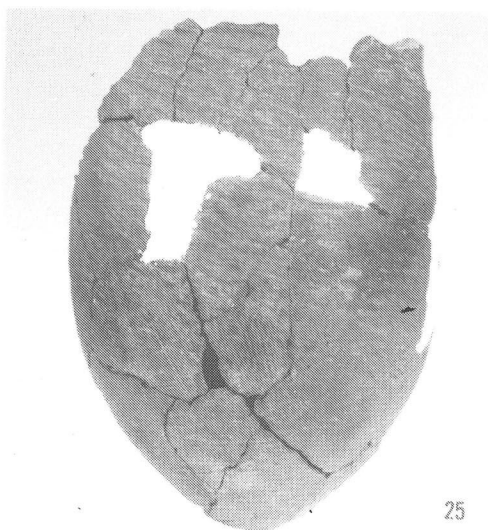
28



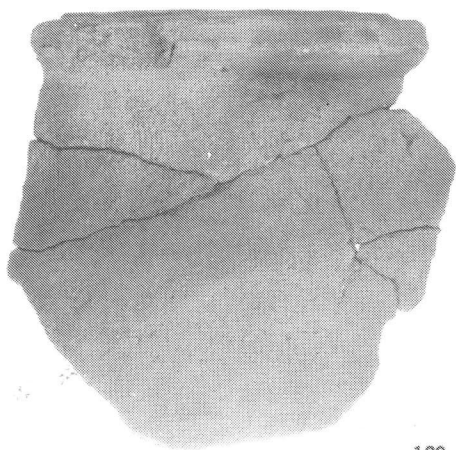
20



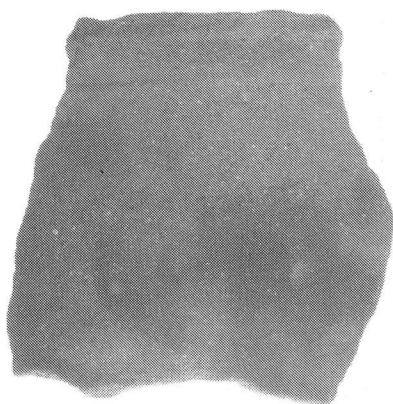
21



25

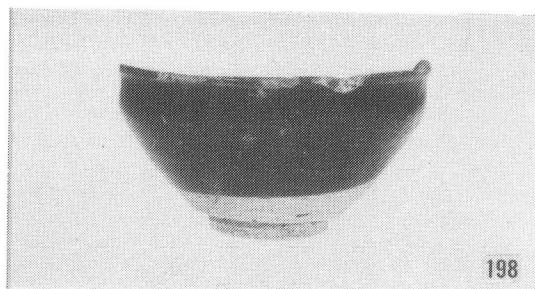
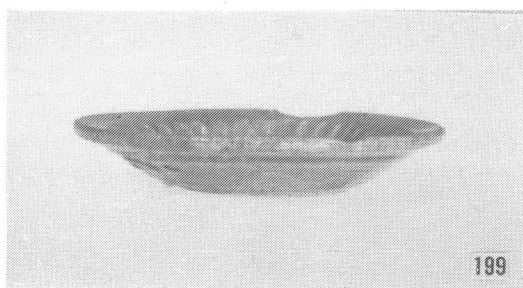
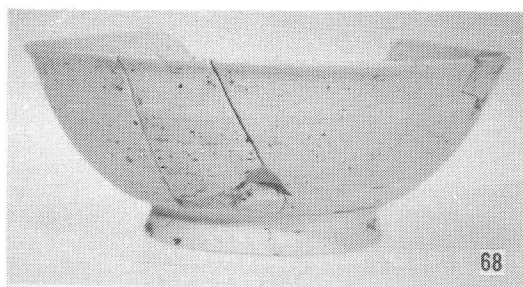
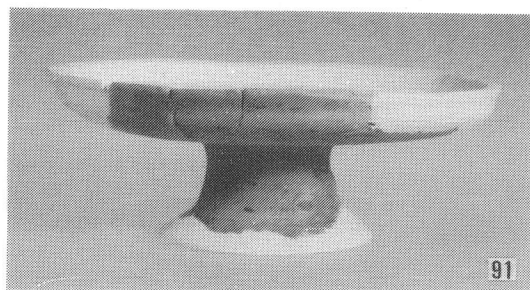
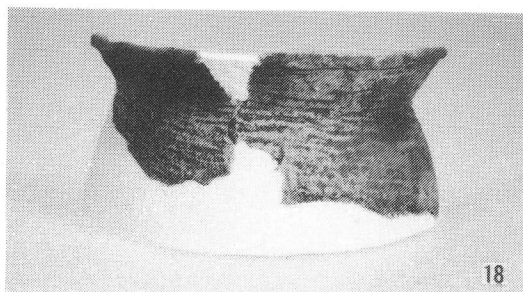
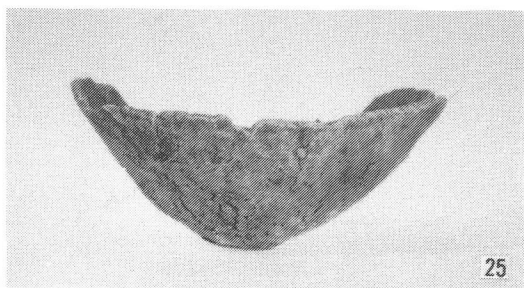
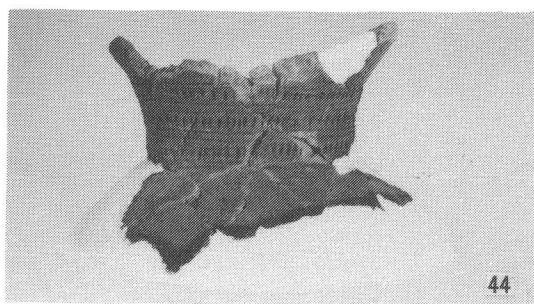


120

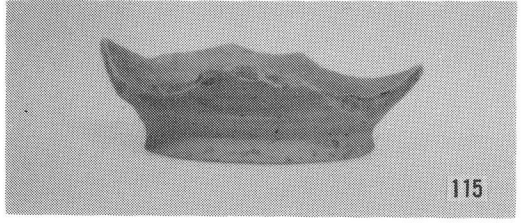
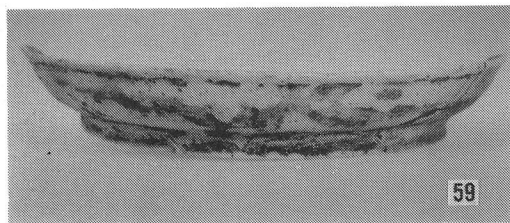
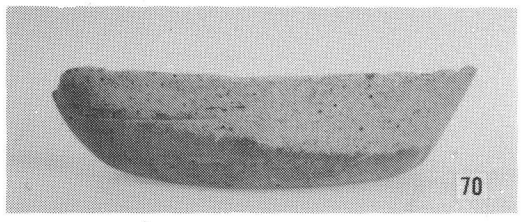
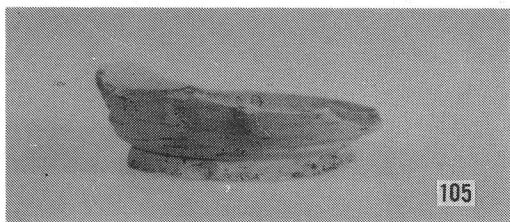
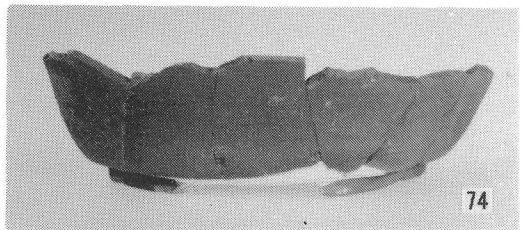
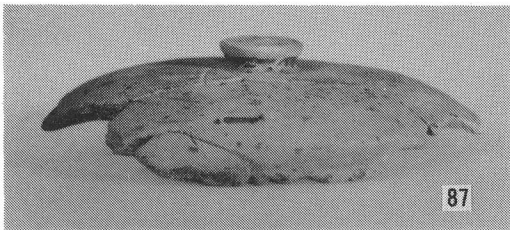
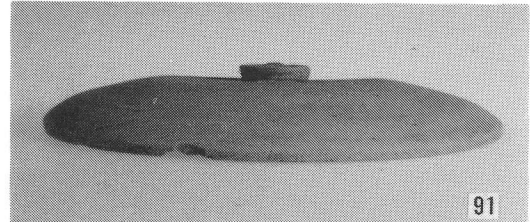
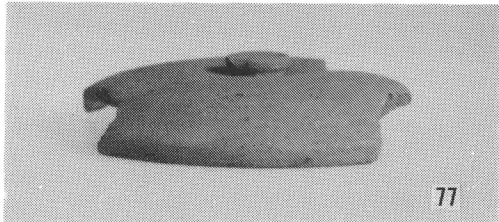
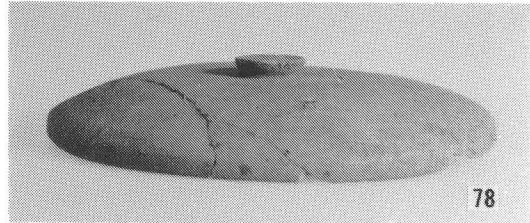
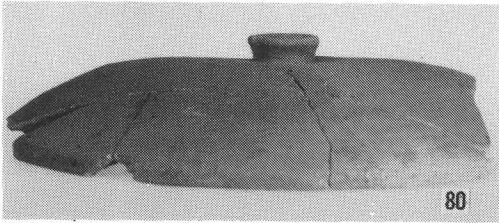
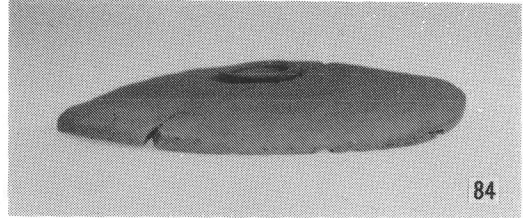
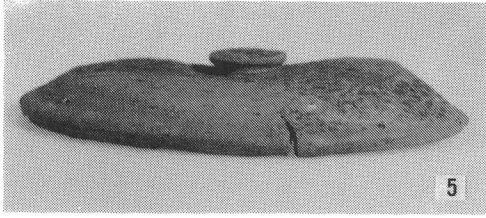


118

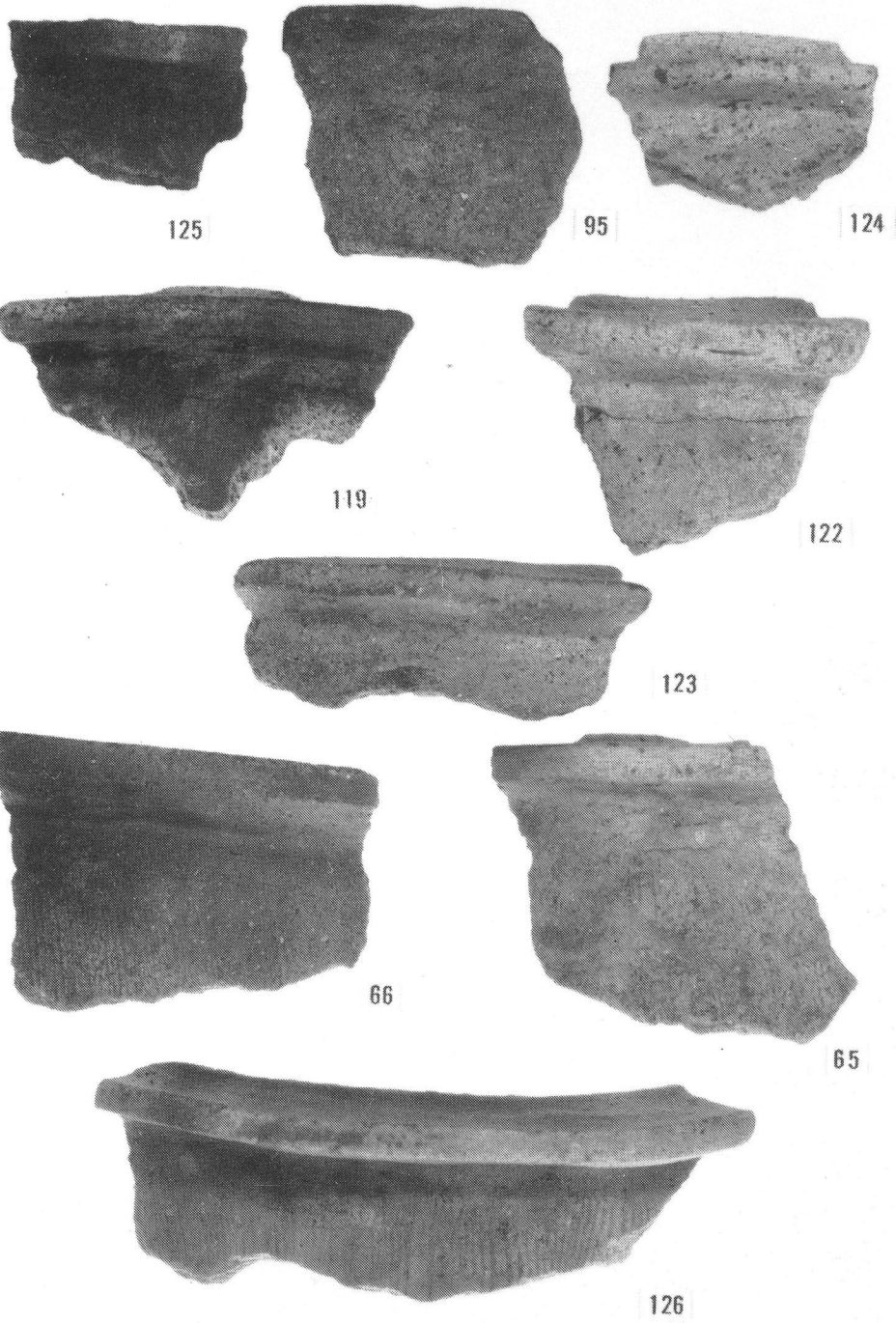
弥生 · 中世土器



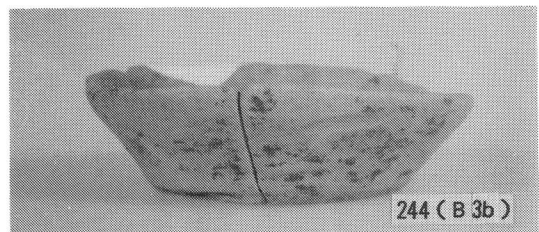
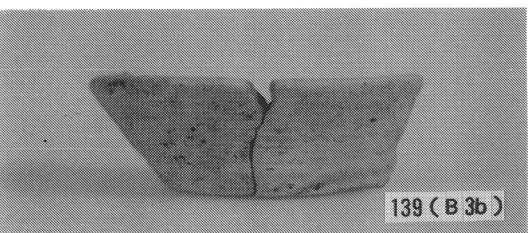
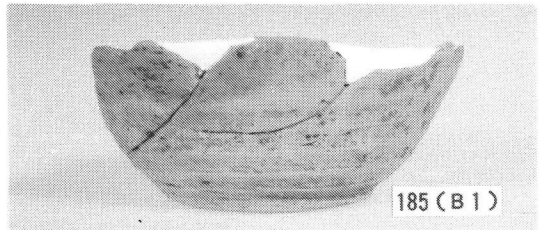
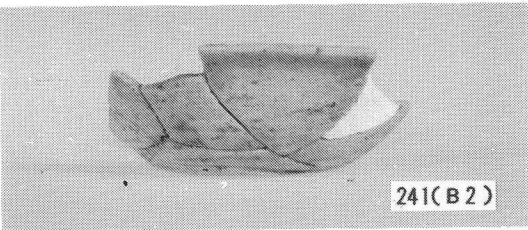
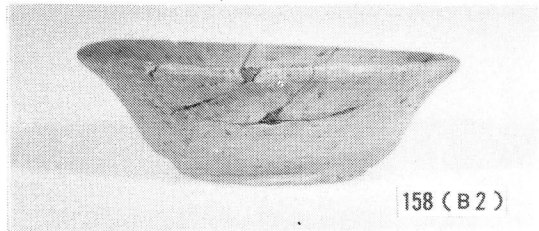
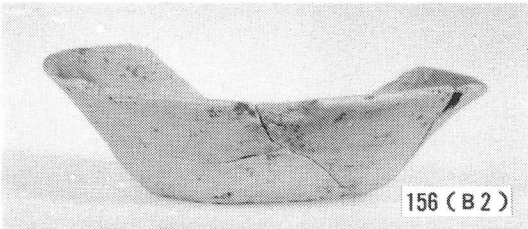
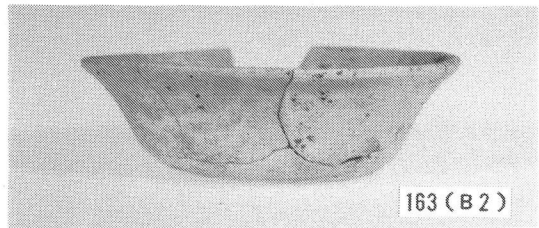
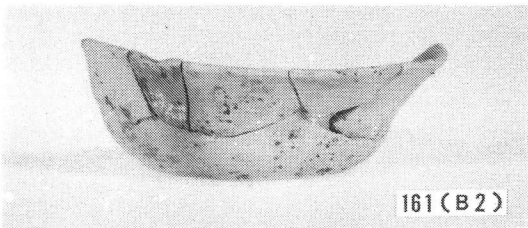
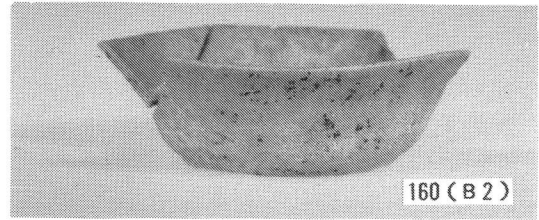
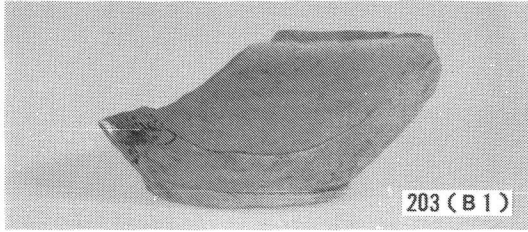
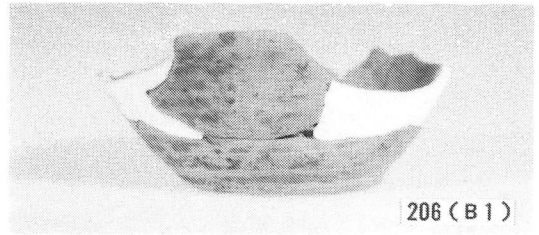
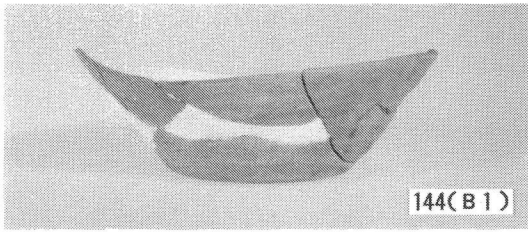
繩文・弥生・古代・近世 出土土器



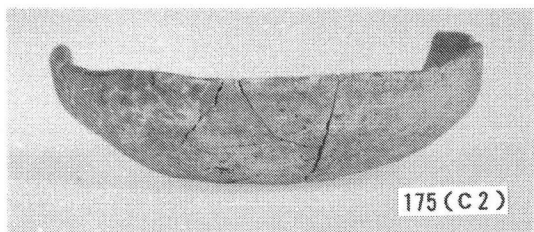
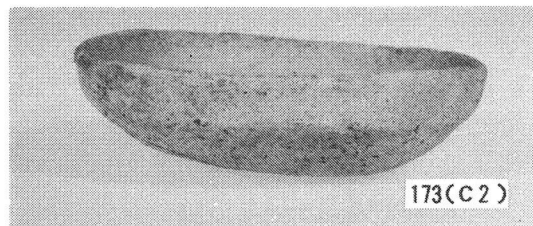
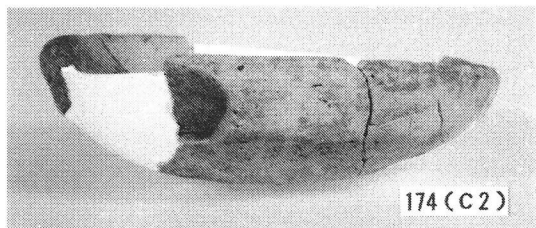
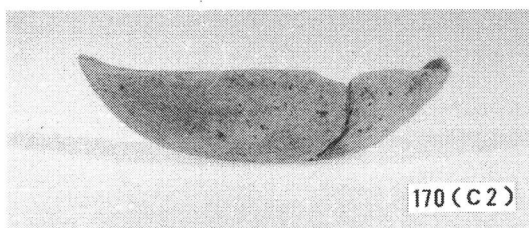
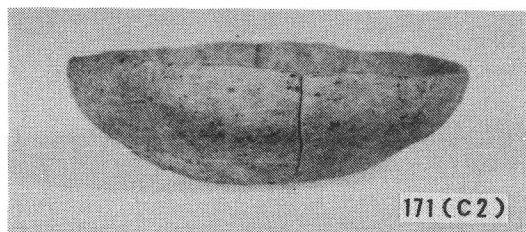
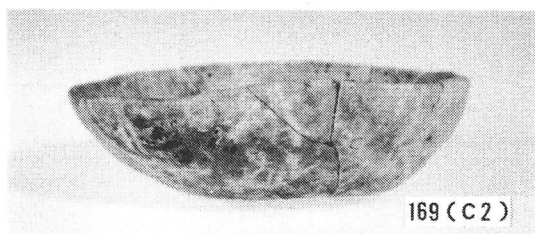
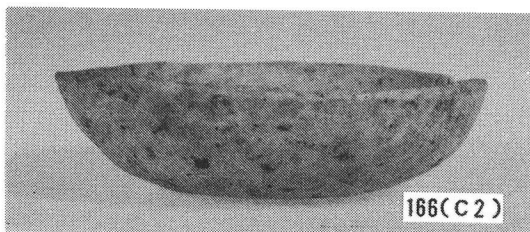
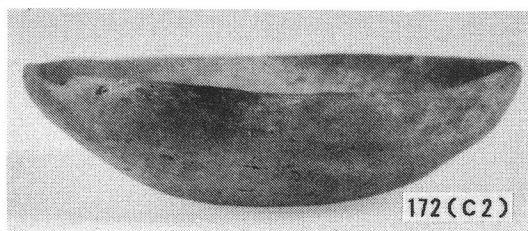
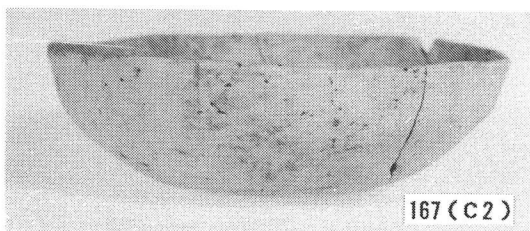
古代出土土器



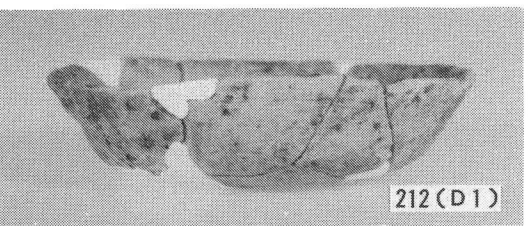
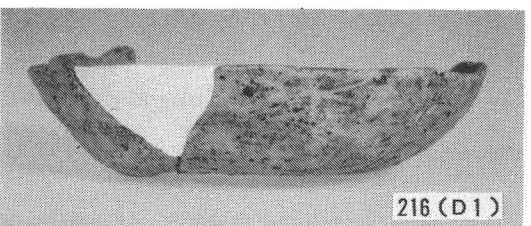
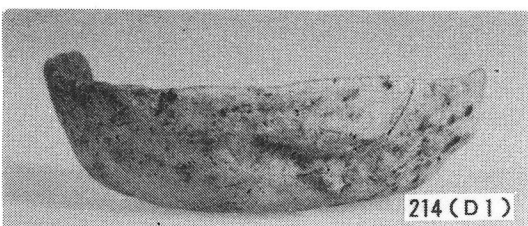
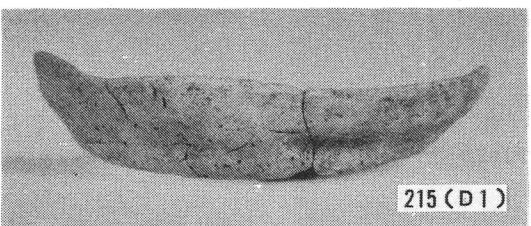
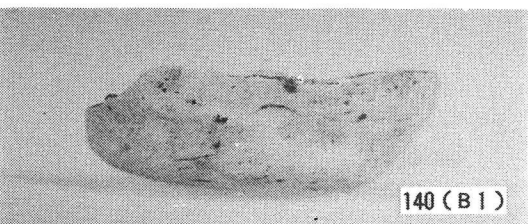
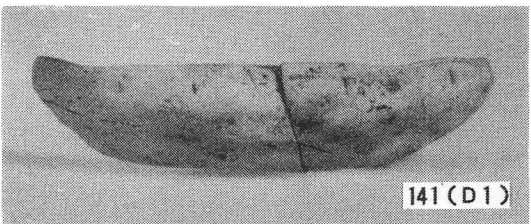
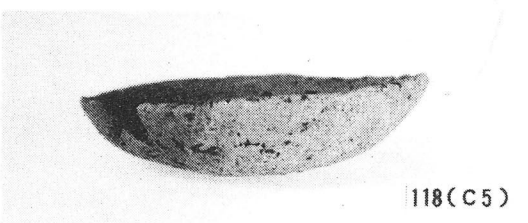
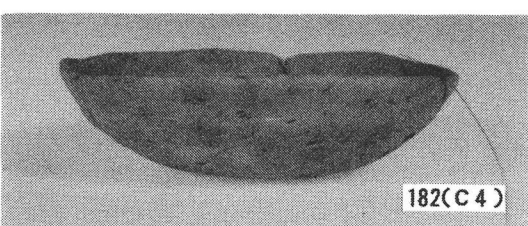
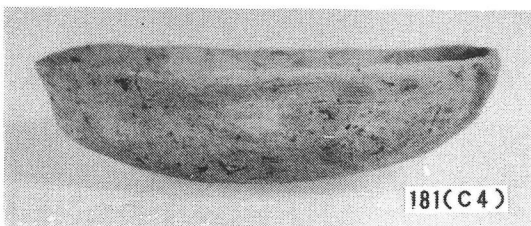
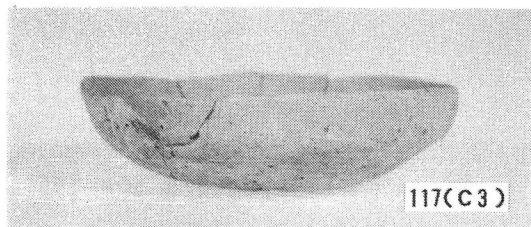
土 師 器 羽 釜



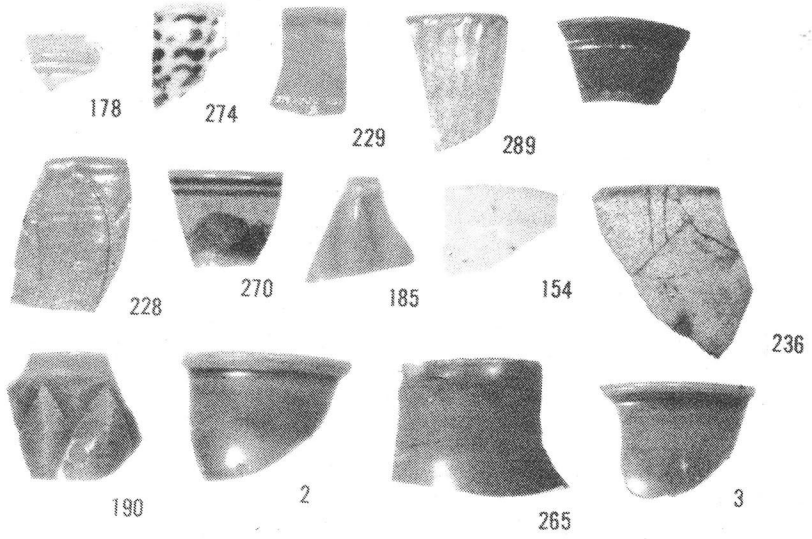
土師器杯 B₁・B₂・B_{3b} 類



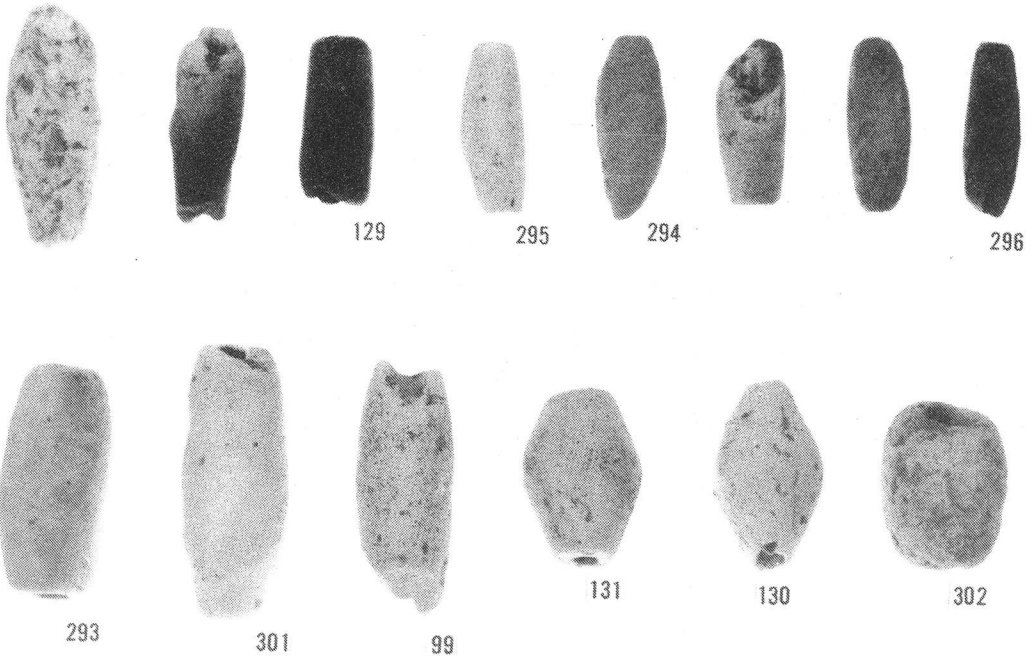
土師器皿 C₁・C₃ 類



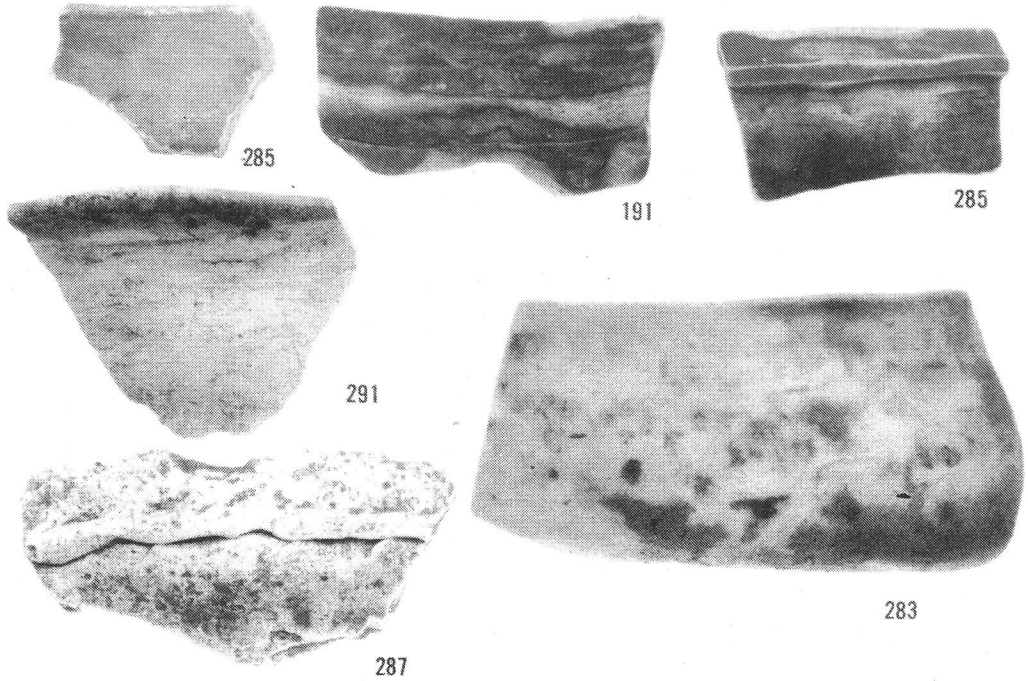
土師器皿 C₃・D₁ 類



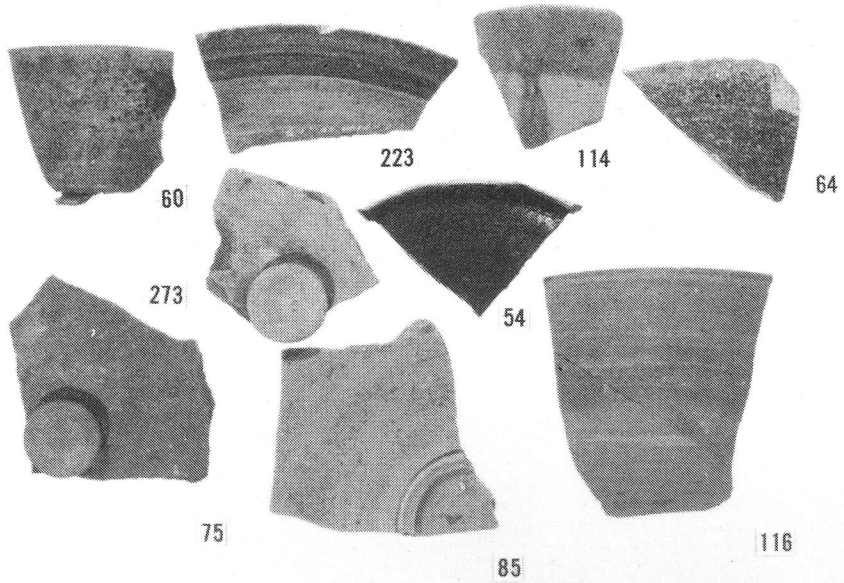
青磁・白磁・染付



土 錘



瓦器・土師器 鍋



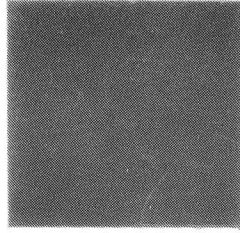
須 恵 器



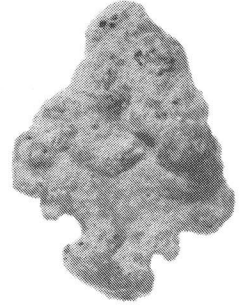
307



133

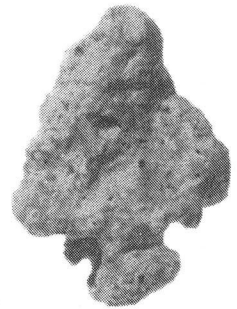
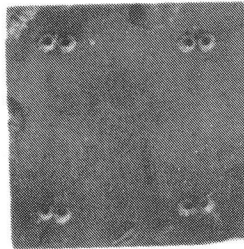


134



306

石 鏃 ・ 石 鏃 ・ 鉄 鏃



上 同 (裏)



調査に協力された方々

付図2. 十万遺跡 中近世遺構全体図 (S = 1/200)



十万遺跡発掘調査報告書

1988年3月

香我美町教育委員会

(高知県香美郡香我美町徳王子)